

IBM SPSS Collaboration and  
Deployment Services 5 管理者  
ガイド



注： この情報をおよびサポートされている製品を使用する前に、注意事項 p. 156 の一般情報をお読みください。

このエディションは IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 5 および新しいエディションで指示がない限りすべての後続リリースと変更に適用されます。

アドビ製品の画面コピーは、Adobe Systems Incorporated の承認を得て掲載しています。

Microsoft 製品の画面コピーは、Microsoft Corporation の承認を得て掲載しています。

ライセンスの対象 - IBM の所有物

**© Copyright IBM Corporation 2000, 2012.**

米国政府機関によるユーザーの権利の制限 - IBM Corporation との GSA ADP Schedule Contract により、使用、複製または情報の開示が制限されています。

---

# はじめに

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は予測分析の幅広い使用および展開を可能にします。分析資産を安全かつ監査可能な形で集中的に格納でき、予測分析プロセスの管理および制御を行う高度な機能が提供されます。また、分析処理の結果をエンド ユーザーに提供する高度なメカニズムも提供されます。

本マニュアルでは、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 操作の管理面について説明しています。コンテンツ リポジトリ サーバーのセット アップ、ユーザーの管理、通信プロトコルの構成、更新のインストール、リポジトリの監査など、タスクについての情報が提供されています。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のソフトウェアおよびハードウェアの要件およびシステム インストールおよび構成は、『IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 5 のインストール手順と構成ガイド』を参照してください。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の分析機能の日常的な使用に関連するタスクについては、『IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 5ユーザー ガイド』に説明されています。

## テクニカル サポート

IBM Corp. のユーザー登録を行ったお客様は、IBM Corp. のテクニカル サポートをご利用いただけます。IBM Corp. 製品の使用方法、または対応するハードウェア環境へのインストールについてサポートが必要な場合は、テクニカル サポートにご連絡ください。テクニカル サポートに連絡するには、IBM Corp. ホームページ (<http://www.spss.co.jp>) をご覧になるか、IBM Corp. 社までお問い合わせください。お客様の ID、所属する組織 ID、およびシステムのシリアル番号をお手元にご用意ください。

## ご意見をお寄せください

お客様のご意見は貴重な情報です。IBM Corp. 製品に関するご意見、ご感想をお寄せください。E-mail: [jpsales@spss.com](mailto:jpsales@spss.com) 郵便: 〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-1-39 恵比寿プライムスクエアタワー 10F エス・ピー・エス・エス株式会社。

---

# 内容

<b>1</b>	<b>概要</b>	<b>1</b>
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services . . . . .	1
	Collaboration. . . . .	1
	Deployment. . . . .	2
	システム アーキテクチャ. . . . .	3
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository . . . . .	4
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager . . . . .	4
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal . . . . .	5
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View . . . . .	6
	実行サーバー. . . . .	6
	スコアリング サーバー . . . . .	7
	BIRT Report Designer for IBM SPSS. . . . .	7
	IBM SPSS Decision Management . . . . .	8
	IBM ShowCase . . . . .	8
<b>2</b>	<b>このリリースにおける新機能</b>	<b>10</b>
	管理者向けの新機能. . . . .	10
<b>3</b>	<b>スタートアップガイド</b>	<b>12</b>
	リポジトリの起動. . . . .	12
	ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用 . . . . .	14
	パスワードの変更 . . . . .	15
	ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのナビゲーション . . . . .	16
	システム情報へのアクセス . . . . .	16
	IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用 . . . . .	17
	管理対象サーバー . . . . .	17
	新しい管理対象サーバーの追加 . . . . .	18
	管理対象サーバー プロパティの表示 . . . . .	21
	管理対象サーバーへの接続 . . . . .	22

管理対象サーバーの接続解除	23
管理対象サーバーの削除	24
命名規則	24

## 4 ユーザーとグループ 26

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーの設定	27
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager における ユーザーとグループの管理	28
ユーザーの作成	30
ユーザーの編集	32
ユーザーのロックとロック解除	34
ユーザーの削除	35
グループの作成	35
グループの編集	37
グループの削除	39
ユーザーとグループのインポート	39
拡張グループの作成	40
許可ユーザーの作成	42

## 5 ロール 45

ロールの概要	45
Actions	45
管理者ロール	47
ロール定義の管理	48
新しいロールの作成	49
ロールの編集	50
ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集	50
ロールの削除	52

## 6 クロス サイト スクリプト (XSS) フィルタ 53

XSS フィルタルールの管理	53
XSS フィルタルールの作成	54

## 7 セキュリティプロバイダ 55

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるセキュリティプロバイダ	56
セキュリティプロバイダの構成	57
ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のセキュリティプロバイダ	63
セキュリティプロバイダの有効化と無効化	63

## 8 シングル サインオン 67

シングル サインオンの設定	67
---------------	----

## 9 リポジトリ構成 69

Administrator	69
BIRT Report Designer for IBM SPSS	70
キャッシュ プロバイダ	70
Coordinator of Processes	71
カスタム ダイアログ	72
Data Service	73
Deployment Manager	74
Deployment Portal	74
Deployment Portal スコアリング	75
Enterprise View	76
ヘルプ	77
通知	78
ページャー	84
プロセス管理	84
報告	86
リポジトリ	87
Scoring Service	92
検索	92
セキュリティ	93
セットアップ	95

IBM ShowCase .....	96
CMOR .....	97
<b>10 MIME タイプ</b>	<b>99</b>
マッピングする MIME タイプを追加する .....	100
マッピングする MIME タイプを編集する .....	101
MIME タイプのマッピングの削除 .....	102
<b>11 リポジトリのインデックス再作成</b>	<b>103</b>
<b>12 リポジトリ メンテナンス</b>	<b>105</b>
リポジトリ バックアップ .....	106
自動メンテナンス サービス .....	106
自動リポジトリ メンテナンスの設定 .....	106
期限切れの送信作業の削除 .....	108
ジョブ履歴のサイズの管理 .....	108
メンテナンス アクティビティの監視 .....	109
バッチ削除 .....	109
クリーンアップ ユーティリティの実行 .....	110
一括削除ジョブの作成 .....	112
<b>13 通知</b>	<b>113</b>
通知メッセージ テンプレートの構造 .....	113
メッセージのプロパティ .....	114
メッセージ内容 .....	116
メッセージ書式 .....	118
通知テンプレートの編集 .....	120
ジョブ ステータス .....	121
通知サービス パフォーマンスの最適化 .....	123
通知サービス構成 .....	123

一般的な推奨事項	125
通知サービスのデバッグ	127
通知の配信失敗のトラブルシューティング	128

## 14 JMS 構成 130

JMS 同時並行処理数の拡大	131
メッセージ ベース プロセスの例	132

## 15 リポジトリの監査 133

データベースの監査機能	133
監査イベント	134
イベントテーブル	135
監査ビュー	138
監査 (SPSSPLAT_V_AUDIT)	138
カスタム プロパティ (SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY)	139
ファイル バージョン (SPSSPLAT_V_FILEVERSION)	140
ジョブ履歴 (SPSSPLAT_V_JOBHISTORY)	141
ジョブ ステップ (SPSSPLAT_V_JOBSTEP)	142
スケジュール (SPSSPLAT_V_SCHEDULE)	143
ストリーム属性値 (SPSSPLAT_V_STREAMATTRVALUE)	144
ストリーム ノード (SPSSPLAT_V_STREAMNODE)	144
スコアリング サービス ログ	145
要求ログ テーブル	146
データベース ビュー	146
監査クエリーの例	149

## 付録

### A Nativestore スキーマの参照 152

nativestore 要素	152
user 要素	152
obsolete 要素	154

<b>B 注意事項</b>	<b>156</b>
<b>索引</b>	<b>159</b>



# 概要

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は企業レベルのアプリケーションであり、予測分析の幅広い使用および展開を可能にします。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services によって、分析資産を安全かつ監査可能な形で集中的に格納でき、予測分析プロセスの管理および制御を行う高度な機能が提供されます。また、分析処理の結果をエンドユーザーに提供する高度なメカニズムも提供されます。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用すると、次のような利点があります。

- 分析資産の価値の保護
- 法令順守の実現
- 分析の生産性の向上
- 分析管理にかかる IT コストを最小化します

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用してさまざまな分析資産を安全に管理でき、分析資産の開発および使用における連携を促進します。さらに、展開機能によって適切なユーザーがタイムリーに、適切な処理を行う必要のある情報を取得できるようにします。

## Collaboration

Collaboration とは、分析資産を効率的に共有および再利用する機能のことをいいます。企業全体で分析を開発および実行するために重要な機能です。分析者には、他の分析者またはビジネスユーザーが使用できるようにする必要があるファイルを置くための場所が必要です。こうした場所では、分析の展開を管理するためにファイルのバージョン制御の実装が必要です。ファイルへのアクセスおよび変更を制御するには、セキュリティが必要です。また、ビジネスにおけるこうした重要な資産の損失を防ぐためには、バックアップおよび復元のメカニズムが必要になります。

これらのニーズに対応するために、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では多くのファイルシステムに類似したフォルダ階層を使用して資産を保存するリポジトリを用意しています。企業のユーザーに適切なアクセス権限がある場合、これらのユーザーは IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository で保存されているファイルを使用できます。ユーザーが資産を検出できるよう、リポジトリでは検索機能を用意しています。

分析者は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のサービス インターフェイスを使用するクライアント アプリケーションからリポジトリのファイルを使用できます。IBM® SPSS® Statistics や IBM® SPSS® Modeler のような製品を使用して、リポジトリのファイルと直接相互作用できます。分析者は、開発中にファイルのバージョンを保存し、後でそのバージョンを取得、完了して運用プロセスに移行するまで変更を継続することができます。これらのファイルには、ビジネス ユーザが分析の結果を利用できる分析プロセスを実行するカスタム インターフェイスを追加できます。

リポジトリを使用すると、容易にバックアップおよび復元できる分析資産の集約場所を提供することによって、業務を保護します。また、ユーザー、ファイル、バージョン ラベル レベルの権限が各資産へのアクセスを制御します。バージョン コントロールおよびオブジェクト バージョン ラベルによって、適切なバージョンの資産を運用プロセスで使用できます。また、ログ機能によってファイルやシステムの変更を追跡できます。

## Deployment

予測分析の利点を最大限に活用するために、分析資産では業務決定の入力を提供する必要があります。Deployment は、スケジュールに沿って、またはリアルタイムでユーザーおよびプロセスに結果を配信することによって、分析とアクションの間のギャップを埋めます。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では、リポジトリに保存されている各ファイルをジョブの処理に含めることができます。ジョブは分析の成果物の実行シーケンスを定義し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で作成できます。実行の結果は、リポジトリ、ファイル システム、または指定した受信者に配信できます。リポジトリに保存した結果には、適切な権限を持つユーザーであれば IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal インターフェイスを使用してアクセスできます。ジョブ自体は、定義されたスケジュールに従って、またはシステム イベントに対応してトリガできます。

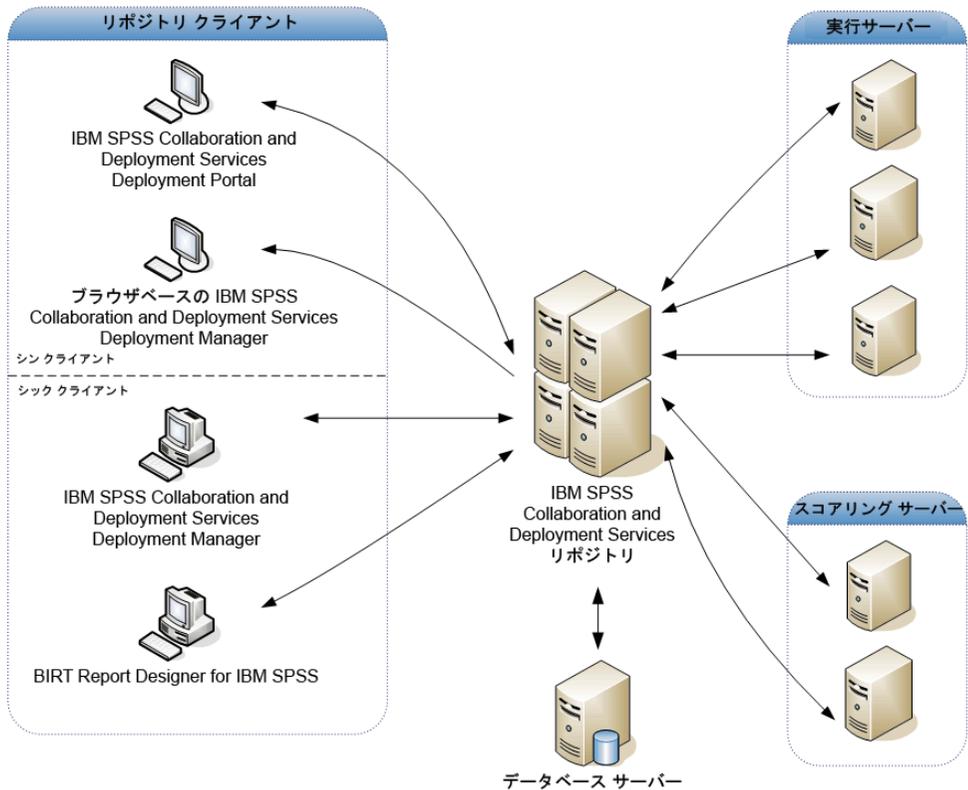
また、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のスコアリング サービスを使用して、展開モデルの分析閣下を、顧客との対話時にリアルタイムで配信できます。スコアリング向けに構成された分析モデルは、現在の顧客対話から収集したデータを過去のデータと結合して、対話のコースを決定するスコアを生成できます。クライアント アプリケーションはサービスを使用でき、プロセスを定義するカスタム インターフェイスを作成できます。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の展開機能は、企業のインフラストラクチャと容易に統合するために設計されています。シングル サインオン機能によって、プロセスのさまざまな段階で資格情報を手動で入力する必要がなくなります。さらに、Federal Information Processing Standard Publication 140-2 に準拠するよう、システムを設定できます。

## システム アーキテクチャ

一般的に、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、さまざまなクライアントに機能する単一の、集約化された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository で構成され、実行サーバーを使用して分析資産を処理します。

図 1-1  
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のアーキテクチャ



IBM SPSS Collaboration and Deployment Services は、次のコンポーネントから構成されています。

- 分析アーティファクト向け IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository
- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager
- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal
- ブラウザベース IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager

- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View
- BIRT Report Designer for IBM® SPSS®

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository

リポジトリは、モデルおよびデータなどの分析資産を集中して格納するための場所を提供します。リポジトリには、次の機能があります。

- セキュリティ
- バージョン管理
- 検索
- 監査

リポジトリを使用するには、IBM DB2、Microsoft SQL Server、Oracle などのリレーショナル データベースがインストールされている必要があります。

リポジトリの構成オプションは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager またはブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して定義します。リポジトリのコンテンツは、Deployment Manager で管理し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal でアクセスします。

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager はクライアント アプリケーションであり、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository を使用して、モデルの更新やスコアの生成など、分析タスクをスケジューリング、自動化、および実行できます。クライアント アプリケーションを使用すると、次のことが可能です。

- レポート、SAS シンタックス ファイル、およびデータ ファイルなど、システム内の既存ファイルを表示する。
- リポジトリにファイルをインポートする。
- 四半期ごとまたは時間ごとなど、特定の反復パターンを使用してジョブを繰り返し実行するようにスケジューリングする。
- ユーザーフレンドリなインターフェイスで既存のジョブ プロパティを変更する。
- ジョブのステータスを決定する。
- ジョブ ステータスの E メール通知を指定する。

また、クライアント アプリケーションを使用して、次のような IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の管理タスクを実行することができます。

- ユーザーの管理
- セキュリティ プロバイダの構成
- 役割およびアクションの割り当て

### **ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager**

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager は、次のようなセットアップやシステム管理タスクを実行するためのシンクライアント インターフェイスです。

- システム構成オプションの設定
- セキュリティ プロバイダの構成
- MIME タイプの管理

管理者以外のユーザーは、ログイン資格情報に関連する適切なアクションの権限を持つ場合、これらのタスクのいずれかを実行できます。アクション権限は管理者によって割り当てられます。

## **IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal**

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal は、リポジトリにアクセスするためのシンクライアント インターフェイスです。管理者向けに作成されているブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager と異なり、Deployment Portal はさまざまなユーザーを対象としている Web ポータルです。Web ポータルには次の機能があります。

- フォルダごとのリポジトリ コンテンツの参照
- 公開コンテンツの表示
- ジョブとレポートの実行
- リポジトリに保存されたモデルを使用してスコアを生成
- リポジトリ コンテンツの検索
- コンテンツのプロパティの表示
- E メール アドレス、パスワード、全般オプション、登録、および出力ファイル形式のオプションなど、個々のユーザー設定へのアクセス

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View は、企業データの単一で一貫したビューを提供します。分析、最適化、配布、およびレポート作成に必要なウェアハウス データやトランザクションデータの共通ビューを、ユーザーが定義および管理することができます。基礎となるデータは、データ ウェアハウス、オペレーショナル データ ストア、オンラインのトランザクション データベースなど、さまざまなソースから入手できます。Enterprise View を利用すれば、企業データの使用方法が統一されるため、保存データの複雑な構造をエンド ユーザーが意識する必要はなくなります。Enterprise View は、予測エンタープライズにおけるデータ処理の中核を担っています。

データを検出するには、予測分析を実施する組織による大規模なリソースの投資が必要となります。このプロセスには、多大な労力がかかります。組織の各部門の担当者たちが関与することになり、また、多くの場合、組織の境界を越えてデータの構造や意味の違いを解決する必要が生じます。Enterprise View は、データ検出プロセスの結果の記録、結果として生じたスキーマのバージョン管理やセキュリティ保護、時間の経過に伴う変更の追跡を行うためのメカニズムを備えています。

Enterprise View には IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View Driver コンポーネントが含まれており、他のアプリケーションを使用してリポジトリに格納されている Enterprise View オブジェクトにアクセスできるように設計されています。ドライバは、直接物理データソースを問い合わせず、データ プロバイダ 定義のデザインに応じて物理的なデータ ソースを仮想化する点を除いて、JDBC と ODBC ドライバと同様に動作します。Enterprise View が IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の一部としてインストールされるのに対して、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View Driver は別個にインストールする必要がある点に注意してください。詳細は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View Driver のマニュアルを参照してください。

## 実行サーバー

実行サーバーには、リポジトリ内に保存されているリソースを実行する機能があります。リソースが実行するジョブに含まれている場合、ジョブ ステップ定義でステップの処理に使用される実行サーバーが指定されています。実行サーバーの種類はリソースによって異なります。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services で現在サポートされる実行サーバーは次のとおりです。

- **SAS** :SAS の実行サーバーは SAS 実行形式ファイル sas.exe です。これは、Base SAS® ソフトウェアに含まれています。SAS シンタックス ファイルを処理するには、この実行サーバーを使用します。
- **リモート プロセス** :リモート プロセス実行サーバーを使用して、プロセスをリモート サーバー上で開始および監視できます。プロセスが完了すると、成功メッセージまたは失敗メッセージを返します。Remote Process Server として機能しているマシンには、リポジトリと通信するために必要なインフラストラクチャをインストールする必要があります。  
適切なアダプタをインストールして、その他特定の種類のリソースを処理する実行サーバーをシステムに追加できます。詳細は、これらのリソース タイプのマニュアルを参照してください。  
ジョブ作成時、実行サーバーをジョブ内の各ステップに割り当てます。ジョブを実行すると、リポジトリは、指定された実行サーバーを使用して対応する分析を行います。

## スコアリング サーバー

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services スコアリング サービスも個別に展開可能なアプリケーション、スコアリング サーバーとして使用できます。スコアリング サーバーはいくつかの主要領域で展開の柔軟性を改善します。

- スコアリング パフォーマンスを他のサービスとは独立して評価することができる
- スコアリング サービスを独立して設定し、コンピューティング リソースを IBM SPSS Collaboration and Deployment Services スコアリング サービスに割り当てる
- スコアリング サーバーのオペレーティング システムとプロセッサアーキテクチャは IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository や他のスコアリング サーバーに一致する必要はない
- スコアリング サーバーのアプリケーション サーバーは IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository やその他のスコアリング サーバーに使用されるアプリケーション サーバーと一致する必要はない

## BIRT Report Designer for IBM SPSS

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のレポート作成機能は、BIRT (Business Intelligence and Reporting Tools) により有効化されます。BIRT は、Eclipse Foundation が Eclipse Public License に基づいて配布するオープンソースのパッケージです。BIRT により、レポートのレイアウト、データ アクセス、スクリプトなど、レポート作成の中核

となる機能が提供されます。BIRT の詳細は、[BIRT プロジェクト ページ \(http://www.eclipse.org/birt\)](http://www.eclipse.org/birt) を参照してください。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールには、BIRT のレポート作成エンジン サーバー コンポーネントが含まれており、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のレポート作成ジョブ ステップの一部として、BIRT のレポート シンタックス ファイルを実行できます。BIRT Report Designer for IBM® SPSS® は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services と組み合わせて使用できるスタンドアロン アプリケーションです。レポート作成のための高度な機能を豊富に持つユーザー インターフェイスを備えており、別個にインストールする必要があります。

BIRT Report Designer for IBM SPSS レポートで JDBC ベースのデータベース接続が必要な場合、対応する JDBC ドライバを IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository とともにインストールする必要があります。JDBC ドライバの場所に関するアプリケーション サーバー固有の情報については、リポジトリのインストール手順の該当する項を参照してください。

BIRT Report Designer for IBM SPSS を起動するには、インストール ディレクトリのファイル BIRT.exe を実行します。BIRT Report Designer for IBM SPSS の使用方法については、アプリケーションとともにインストールされるドキュメントを参照してください。

## IBM SPSS Decision Management

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、経営上の意思決定による予測分析を統合するアプリケーション スイートの IBM® SPSS® Decision Management をインストールする前提条件です。SPSS Decision Management では、高速スコアリング、マスタ データ管理を使用し、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の j 自動化機能を処理し、高ボリュームの決定を最適化および自動化して、特定の業務上のシチュエーションにおける結果を改善することができます。

## IBM ShowCase

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services を IBM i に展開して IBM® ShowCase® ビジネス インテリジェンス スイートとの統合を可能にし、エンタープライズレベルのレポートング プラットフォームを提供して、さまざまな個人やグループに情報を効率的に、安全に、費用をかけず配信することができます。このレポートング環境内では、IBM® ShowCase® Query や IBM® ShowCase® Report Writer のコンテンツ向けの集約的な、安全で検索可能なリポジトリを確立することができます。プラットフォーム経由でコンテンツやレポートの出力への簡単なアクセスを提供、スケジュールされた動的な実行のためにクエリやレポート定義を Web 上で定義、更新

---

のスケジュール設定ができる、または Web ブラウザ経由で更新または動的に更新できる Excel スプレッドシートを公開、そしてグラフ、画像、その他のレポートへのリンクを含むレポートを作成することができます。

**重要:** IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の高速スコアリング機能は IBM i では利用できません。

# このリリースにおける新機能

## 管理者向けの新機能

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 5 は、予測分析の導入を簡素化し、コストを管理することができる新しい機能を提供します。

### データ プロバイダの定義

プロバイダの設定をより細かく制御するためのウィザード インターフェイスを使用してセキュリティ プロバイダを定義します。 [詳細は、7 章 p.57 セキュリティ プロバイダの構成](#) を参照してください。

### アカウント ロックアウト

デフォルトでは、ネイティブのローカル ユーザー リポジトリのユーザーが不正なパスワードで 3 回連続 IBM SPSS Collaboration and Deployment Services にログオンしようとするすると、ユーザー アカウントが自動的にロックされます。アカウントが 30 分後に自動的にロック解除されるまで、または管理者が手動で解除するまで、ユーザーは（たとえ正しい資格情報を持っていても）ログインできなくなります。 [詳細は、4 章 p.34 ユーザーのロックとロック解除](#) を参照してください。

### クロスサイト スクリプティング フィルタ

クロスサイト スクリプティング (XSS) は、通常、Webアプリケーションに見られるコンピュータセキュリティの脆弱性です。通常、他のユーザーが閲覧したウェブページに悪意のあるスクリプトを追加することにより、攻撃者が最新の Web ブラウザで Web コンテンツに課されたクライアントサイドのセキュリティメカニズムをバイパスできるようにします。旧バージョンの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services では、Web セキュリティ フィルタは、ユーザーが入力したパラメータを検証することでXSS攻撃を防ぐために利用可能でしたが、フィルタ条件を変更することはできませんでした。現在、企業セキュリティポリシーに基づいて、XSSフィルタルールを追加、変更、および削除を行うことができるようになりました。 [詳細は、6 章 p.53 クロス サイト スクリプト \(XSS\) フィルタ](#) を参照してください。

## ドキュメント

完全な IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のドキュメントは、IBM Information Center <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/spsscads/v5r0m0/index.jsp> にあります。ドキュメント セットに次のガイドが追加されました。

- **トラブルシューティング ガイド**
- **クイックスタート ガイド**

# スタートアップガイド

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository を正常にインストールすると、次の操作を実行できます。

- サーバーをコンソール アプリケーションまたはサービスとして起動する
- サーバーをコンソール アプリケーションまたはサービスとして停止する
- システムへのログインとログアウト
- パスワードの変更とインターフェイスによるナビゲーション
- IBM® SPSS® Modeler サポートの追加または変更

## リポジトリの起動

リポジトリはコンソールまたはバックグラウンドで実行できます。コンソールで実行すると、処理メッセージを表示することができ、予想できない動作の診断に役立ちます。ただし、リポジトリは通常、バックグラウンドで動作し、IBM® SPSS® Modeler や IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager などのクライアントからの要求を処理します。

注：同時に他のアプリケーションを実行すると、システムのパフォーマンスが低下し、起動が遅くなる場合があります。

Windows プラットフォームの場合、コンソールでの実行とは、コマンドウィンドウで実行することです。またバックグラウンドでの実行とは、Windows サービスとして実行することです。これに対し、UNIX プラットフォームの場合、コンソールでの実行とはシェルで実行することを意味し、バックグラウンドでの実行とはデーモンとして実行することを意味します。

注：UNIX システムでアクセス許可の競合を回避するには、常に同じ資格情報（可能な限り root）でリポジトリを起動する必要があります。

アプリケーション サーバーを起動すると、リポジトリが起動します。これは、リポジトリのインストールまたはネイティブのアプリケーション サーバー管理ツールに付属するスクリプトで実行できます。詳細は、アプリケーション サーバーのベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

## WebSphere

WebSphere 管理ツールを使用します。詳細は、WebSphere のマニュアルを参照してください。

## JBoss

リポジトリをインストールする場合、以下のスクリプトを使用してください。

```
<repository installation directory>/bin/startserver.cmd
```

```
<repository installation directory>/bin/startserver.sh
```

または、JBoss 管理ツールを使用してサーバーを起動します。詳細は、JBoss のマニュアルを参照してください。

## WebLogic

単一の WebLogic サーバーを設定する場合、リポジトリのインストールに付属している次のスクリプトを使用してください。

```
<repository installation directory>/bin/startserver.cmd
```

```
<repository installation directory>/bin/startserver.sh
```

WebLogic アプリケーション サーバーも、お好みのメカニズムを使用して開始することができますが、正しい環境変数と Java のプロパティが設定されていることを確認する必要があります。このプロセスをサポートするために、設定プロセスは toDeploy/current ディレクトリで以下のスクリプトを作成します。

- setCDSEnv.cmd または setCDSEnv.sh
- startCDSWebLogic.cmd または startCDSWebLogic.sh
- startManagedCDSWebLogic.cmd または startManagedCDSWebLogic.sh

設定時に自動展開を選択している場合、ファイルもドメインおよび <domain>/bin ディレクトリにコピーされます。これらのファイルを調査して、設定する必要がある環境および Java プロパティを確認します。特定のプロパティは、インストールされている IBM SPSS アダプターによって異なります。起動スクリプトを使用してサーバーを起動する場合、スクリプトから setCDSEnv.cmd/setCDSEnv.sh を呼び出すことができます。ノードマネージャまたは他のメカニズムを使用してサーバーを起動している場合、同等の設定を定義してください。

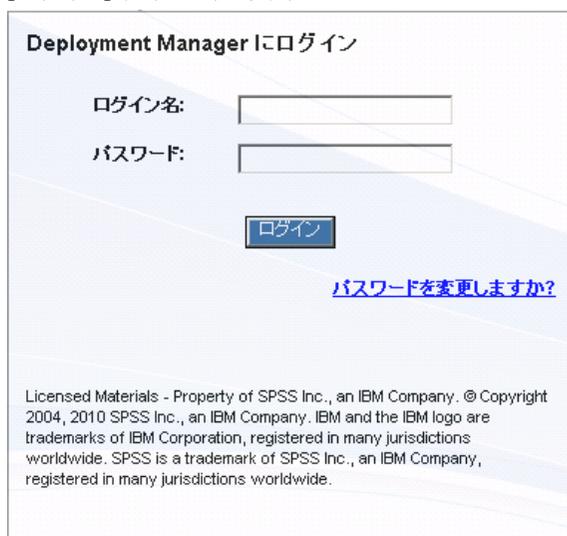
## ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用

[ログイン] ページは システムへの入口です。ログインするには、次の手順を行います。

- ▶ [ログイン] ページに移動します。通常、URL は `http://<host IP address>:<port number>/security/login` となります。[ログイン] ページが表示されます。IP アドレスの代わりに `localhost` を使用すると、一部のアプリケーションサーバーでログインに失敗する場合があります。常に IP アドレスを使用することをお勧めします。

図 3-1

[ログイン] ダイアログ ボックス



Deployment Manager にログイン

ログイン名:

パスワード:

[パスワードを変更しますか?](#)

Licensed Materials - Property of SPSS Inc., an IBM Company. © Copyright 2004, 2010 SPSS Inc., an IBM Company. IBM and the IBM logo are trademarks of IBM Corporation, registered in many jurisdictions worldwide. SPSS is a trademark of SPSS Inc., an IBM Company, registered in many jurisdictions worldwide.

- ▶ [ログイン名] フィールドにユーザー ID を入力します。
- ▶ [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
- ▶ [ログイン] をクリックします。デフォルトでは、[構成] ページが表示されます。

### 付加オプション

[ログイン] ページでは、パスワードを変更することもできます。 [詳細は、 p.15 パスワードの変更 を参照してください。](#)

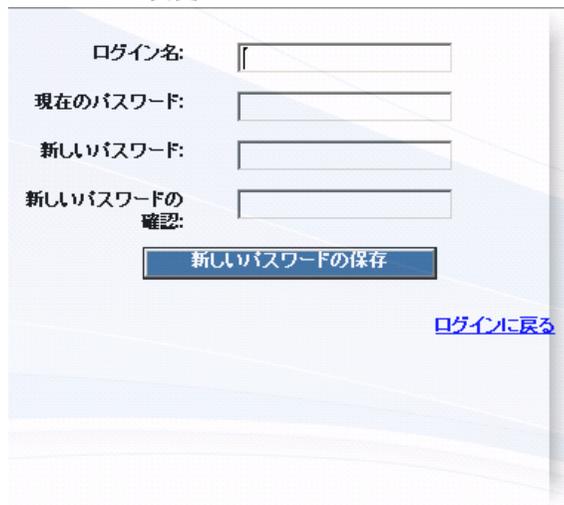
**重要:** ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、シングル サインオンを利用できません。

## パスワードの変更

パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

[ログイン] ページで、[パスワードを変更しますか?] をクリックします。[パスワードの変更] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 3-2  
パスワードの変更



- ▶ [ログイン名] フィールドにログイン名を入力します。
- ▶ [現在のパスワード] フィールドに現在のパスワードを入力します。
- ▶ [新しいパスワード] フィールドに新しいパスワードを入力します。
- ▶ [新しいパスワードの確認] フィールドに新しいパスワードを再入力します。
- ▶ [新しいパスワードの保存] をクリックします。[メッセージ] セクションに次のテキストが表示されます。

Password updated

- ▶ [ログインに戻る] をクリックします。[ログイン] ページが表示されます。新しいパスワードを使用してシステムにログインします。 [詳細は、p. 14 ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用 を参照してください。](#)

## ブラウザベースの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのナビゲーション

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、主にタブを基準としたナビゲーションを行います。通常、システムのコンポーネントは一般的な項目から特殊な項目へと並べられています。左側のナビゲーション パネルから、次のカテゴリを選択できます。

- 構成
- Deployment Portal
- MIME タイプ
- リポジトリ インデックス
- セキュリティプロバイダ
- ログアウト
- バージョン情報
- 管理者ガイド
- ヘルプ

これらの項目ごとに、関連する 1 つ以上のセクションがあります。項目をクリックすると、対応するセクションが右側のペインに表示されます。セクションに複数のサブセクションがある場合は、一連のタブが右側のペインに表示されます。デフォルトでは、最初のタブの内容が表示されます。たとえば、ナビゲーション リストで **[MIME タイプ]** をクリックすると、**[MIME タイプとファイル タイプのアイコン]** セクションが表示されます。

### [設定] ボタンと Enter キーの使用

システムは、マウスで操作します。Enter キーを使用して操作を完了しないでください。これは通常、Enter を押しても要求が送信されないためです。システムでは常に **[設定]** ボタンが表示されます。**[設定]** をクリックする代わりに Enter キーを押すと、要求は処理されません。**[設定]** をクリックすることにより、変更内容がデータベースにコミットされます。

## システム情報へのアクセス

インストール済みの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に関する情報は、バージョン情報ページを使用して確認できます。このバージョン情報ページには、システムのバージョン番号と、全般的なコンポーネントのカテゴリ（エリア）、バージョン番号、およびライセンスを含め、個々のコンポーネント（インストール済みパッケージ）に関する情報が表示されます。また、各パッケージに含まれるファイルを一覧する詳細情

報も表示できます。システム情報、インストール ログ、およびアプリケーション サーバー ログをダウンロードすることも可能です。アプリケーション サーバー ログは、システムのトラブルシューティングに使用できます。

#### **インストール済みパッケージの詳細情報を表示するには**

- ▶ [詳細の表示] をクリックします。

#### **システム情報をテキスト ファイルとしてダウンロードするには**

- ▶ ページ下部の [バージョンとシステムの詳細をダウンロード] をクリックします。

#### **バージョン、システム情報、およびアプリケーション サーバー ログのテキスト ファイルを含む zip ファイルをダウンロードするには**

- ▶ ページ下部の [バージョン、システム詳細、およびログを 1 つの zip ファイルでダウンロードします] をクリックします。ファイルが zip アーカイブとしてダウンロードされます。

## **IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の使用**

管理タスクは、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の他に、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して実行できます。管理者は次の操作を行えます。

- セキュリティ プロバイダの構成と有効化
- システムにアクセスするユーザーおよびグループの作成
- システムの機能へのアクセスを制御するためのロールの定義

また、Deployment Manager を使用すると、IBM® SPSS® Statistics サーバーや IBM® SPSS® Modeler サーバーなどその他のサーバーの管理ができます。

### **管理対象サーバー**

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager でのサーバー管理は、次の手順で実行します。

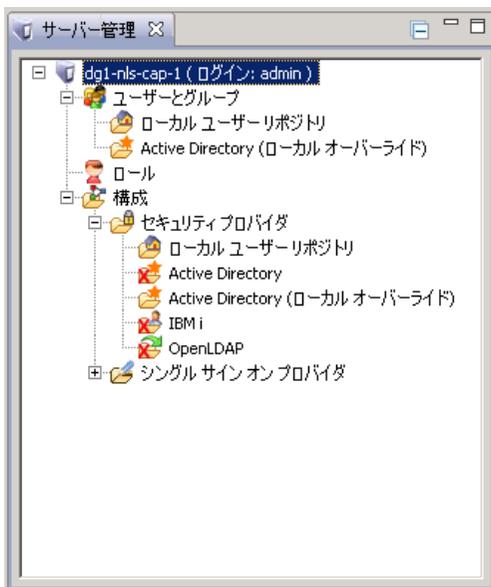
1. システムに管理対象サーバーを追加します。
2. 管理対象サーバーへログインします。
3. サーバーで必要な管理タスクを実行します。
4. 管理対象サーバーからログオフします。

この機能には、[サーバー管理] タブでアクセスできます。このタブには、現在管理可能なサーバーが表示されます。このリストは、Deployment Manager セッション全体に渡って存在するため、管理可能なサーバーに簡単にアクセスできます。

メニューから次の項目を選択します。

[Tools] > サーバー管理

図 3-3  
管理対象サーバーのリスト



管理対象サーバーのリストには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバー、IBM® SPSS® Modeler サーバー、IBM® SPSS® Statistics サーバーなど、さまざまなサーバーの種類が記載されています。サーバーで実際に利用できる管理機能は、サーバーのタイプによって異なります。たとえば、リポジトリではセキュリティプロバイダを構成および有効化できますが、SPSS Modeler Server ではできません。

## 新しい管理対象サーバーの追加

管理タスクを行う前に、管理対象サーバーへの接続を確立する必要があります。

メニューから次の項目を選択します。

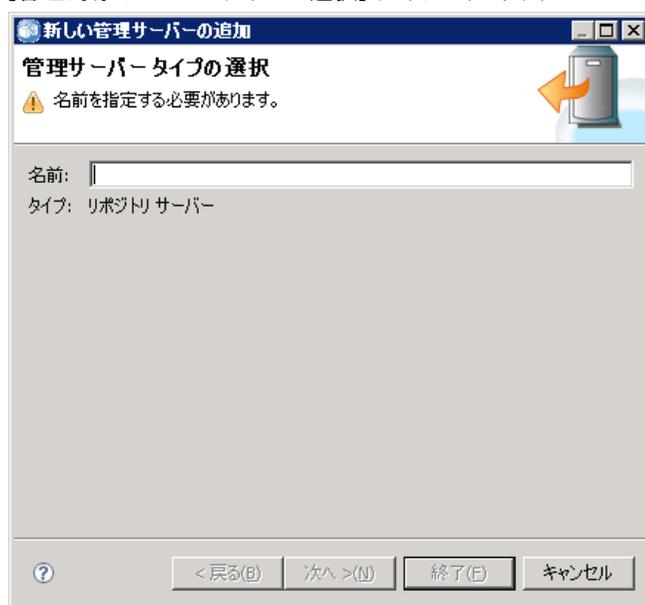
ファイル > 新規 > [管理対象サーバー接続]

[新しい管理対象サーバーの追加] ダイアログ ボックスが表示されます。新しい接続を追加するには、管理対象サーバーのタイプと、管理対象セキュリティ サーバーの情報を指定する必要があります。

## 管理対象サーバーの名前とタイプの選択

新しい管理対象サーバーをシステムに追加する最初の手順では、そのサーバーの 2 つのパラメータ（名前とタイプ）を定義します。

図 3-4  
[管理対象サーバー タイプの選択] ダイアログ ボックス



**名前:** [サーバー管理] タブ上でそのサーバーを識別するために使用されるラベル。my\_server:8080 など、名前にポート番号を含めると、管理対象サーバー リストでそのサーバーを識別するのに役立ちます。

注： アルファベット文字の使用をお勧めします。次の記号は禁止されています。

- 引用符（一重および二重）
- アンパサンド (&)
- 小なり記号 (<) および大なり記号 (>)
- ピリオド
- カンマ
- セミコロン

**タイプ**：追加するサーバーのタイプ。リストされるサーバー タイプは、システム構成によって異なります。次のものが含まれる場合があります。

- IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Modeler Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Statistics Server
- 管理対象の IBM® SPSS® Text Analytics Server

### 管理対象サーバー タイプの選択

[管理対象サーバー タイプの選択] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。

1. サーバーの名前を入力します。
2. サーバー タイプを選択します。
3. [次へ] をクリックします。[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

### 管理対象サーバー情報

新しい管理対象サーバーをシステムに追加する 2 番目の手順では、そのサーバーのプロパティを定義します。

図 3-5

[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックス

新しい管理サーバーの追加

管理対象サーバー情報

ホスト

ポート 80

これはセキュアポートです。

① <戻る(B) 次へ >(N) 終了(F) キャンセル

**ホスト：** サーバーの名前または IP アドレス。

注： アルファベット文字の使用をお勧めします。次の記号は禁止されています。

- 引用符（一重および二重）
- アンパサンド（&）
- 小なり記号（<）および大なり記号（>）
- ピリオド
- カンマ
- セミコロン

**ポート：** サーバー接続に使用されるポート番号。

**これは安全なポートです。** サーバー接続での Secure Sockets Layer (SSL) の使用を有効または無効にします。このオプションは、すべての管理対象サーバー タイプで指定できるわけではありません。

### 管理対象サーバー情報の指定

[管理対象セキュリティ サーバー情報] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。

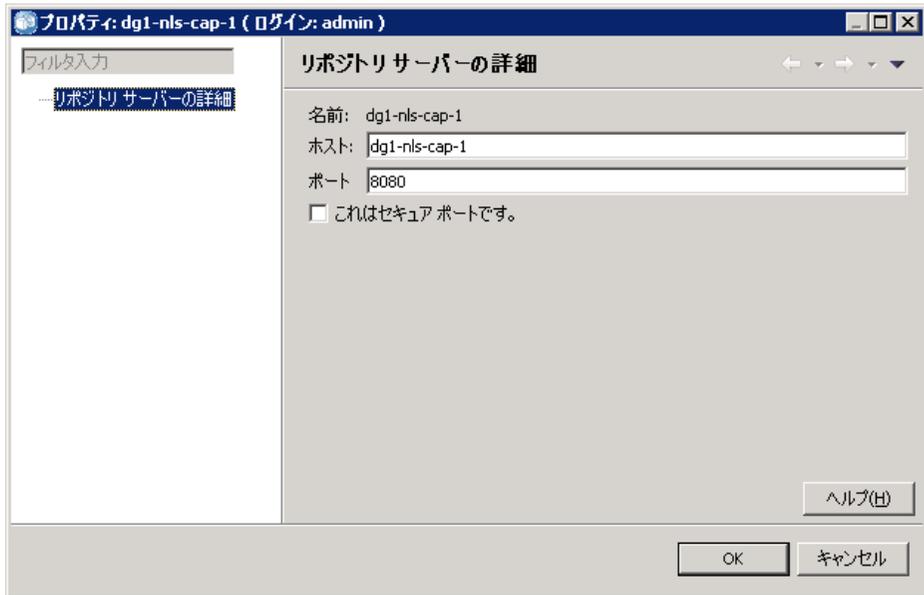
1. 追加するサーバーのホスト名または IP アドレスを入力します。
2. 追加するサーバーが実行されているポート番号を入力します。
3. サーバーで SSL を使用するかどうかを指定します（使用できる場合）。
4. [完了] ボタンをクリックします。

[サーバー管理] タブの管理対象サーバー リストに、該当サーバーが表示されます。

## 管理対象サーバー プロパティの表示

既存の管理対象サーバーのプロパティを表示するには、[サーバー管理] タブで該当サーバーを右クリックして、ドロップダウン メニューの [プロパティ] を選択します。[プロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。表示されるプロパティは、選択したサーバーのタイプによって異なります。

図 3-6  
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository Server のプロパティ



リポジトリサーバーのプロパティには、次のものがあります。

- **ラベル:** [サーバー管理] タブで表示される、サーバーに関連付けられる名前。
- **ホスト:** サーバーの名前または IP アドレス。
- **ポート:** サーバー接続に使用されるポート番号。
- **これは安全なポートです。** このオプションを選択すると、サーバーの通信に SSL 接続が使用されます。

## 管理対象サーバーへの接続

ほとんどのサーバーでは、管理タスクを行うために、管理対象サーバー リストのサーバーに接続する必要があります。[サーバー管理] タブで、管理対象サーバーをダブルクリックします。[サーバーへログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 3-7  
[サーバーへログイン] ダイアログ ボックス



リポジトリ サーバーのログイン パラメータには、次のものがあります。

**ユーザー ID:** サーバーにログインするユーザー。クリア テキストで表示されます。

**パスワード:** ユーザーの認証に使用される文字列。安全のために、パスワード テキストはマスクされた形式で表示されます。

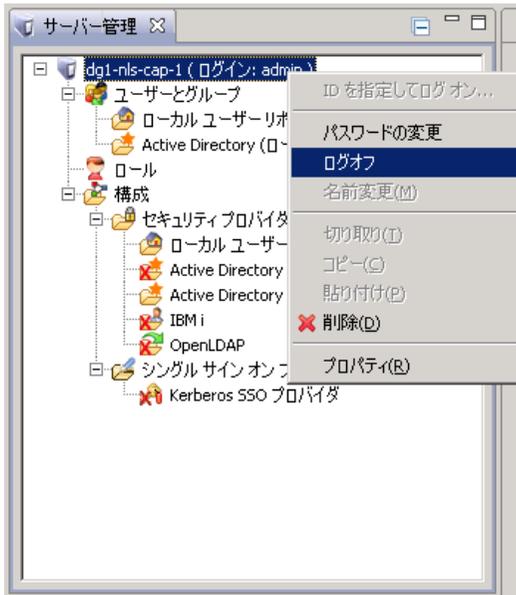
**プロバイダ:** 指定されたログイン名とパスワードの組み合わせを検証するために使用するプロバイダ。このフィールドは、システムで複数のセキュリティ プロバイダが有効になっている場合にだけ表示されます。複数のセキュリティ プロバイダが有効になっていない場合、システムによって、提供された資格情報がローカルのユーザー リポジトリに対して検証されます。

## 管理対象サーバーの接続解除

目的の管理タスクが完了したら、サーバーからログオフします。

1. [サーバー管理] タブで、サーバーを右クリックします。
2. [ログオフ] を選択します。

図 3-8  
サーバーからのログオフ



サーバーを管理するには、再びログインする必要があります。

## 管理対象サーバーの削除

サーバーは、管理対象サーバー リストから削除するまで、リストに表示されます。

1. [サーバー管理] タブで、削除するサーバーを選択します。
2. メニューから次の項目を選択します。

編集 > 削除

または、サーバーを右クリックして、ドロップダウン メニューから [削除] を選択します。

削除したサーバーの管理タスクが後で必要になった場合は、そのサーバーをシステムに再び追加する必要があります。

## 命名規則

システムでは、フォルダからトピックまで、エンティティに名前を付けるように求められます。たとえば、新規ユーザーを追加したり、新しいトピックを作成したりすることがあります。

そのような場合には、次の命名規則が適用されます。

- システムでは、スペースを含む、大部分の文字を使用できます。ただし、スラッシュ (/) は使用できません。名前の一部にスラッシュを入力すると、このスラッシュは名前に含まれません。
- スペースを含め、長さは最大 255 文字です。
- 名前では、大文字と小文字が区別されません。

# ユーザーとグループ

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ユーザーとは、ファイルへのアクセスとプログラムの実行が許可されている個人またはプロセスです。内部データベースまたは外部データベースに対するユーザーの認証は、ユーザー名とパスワードの組み合わせを使用して行われます。アプリケーション リソースに対するユーザーのアクセス レベルには複数の種類があります。

ユーザーは、情報へのアクセスや情報操作の必要性に基づいてグループに分類することができます。ユーザーをグループ分けすることで、複数のユーザーに対し系統立った一定の方法でアクセス許可を割り当てるときの労力を軽減できます。

ユーザーおよびグループに対して、システム リソースへのアクセス許可を割り当てるためのメカニズムをロールといいます。ロールとは、システム内で事前定義された複数のアクションの組み合わせで、たとえばファイルや MIME タイプへのアクセス権、システム構成を変更する権限などが設定されます。ロール割り当てを追加または削除したり、必要に応じて新しいロールを作成することができます。ロールは、ユーザーがシステムにアクセスする前に明示的に割り当てる必要があります。 [詳細は、5 章 p. 45 ロールの概要 を参照してください。](#)

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のユーザーとグループは、セキュリティ プロバイダにより処理されます。セキュリティ プロバイダとは、ユーザーの資格情報を認証するシステムのことです。ユーザーとグループは、ローカルで定義したり（この場合は IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 自体がセキュリティ プロバイダとなります）、Windows Active Directory や OpenLDAP などのリモートディレクトリを元にして作成することができます。 [詳細は、7 章 p. 55 セキュリティ プロバイダ を参照してください。](#)

環境によっては、リモートで定義された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 専用のユーザーのグループを設定する必要があります。これが該当するのは、リモート ディレクトリに指定されているグループがそれほど詳細に指定されていない場合です。外部アプリケーションからのリモート ディレクトリのクエリーが許可されていない場合、またはポリシーの制限がある場合、ディレクトリの管理者は、より詳細なグループを追加できないことがあります。このような場合は、ローカルで指定したリモート ユーザーのグループ（拡張グループといいます）を、リモート ディレクトリですでに定義されているグループのリストに追加します。

ほとんどの環境では、リモート ディレクトリに存在するユーザーの数が非常に多くても、実際に IBM SPSS Collaboration and Deployment Services にアクセスする必要があるユーザーはその中のごく一部です。この場合、管理者が許可ユーザーのリストを指定することにより、該当するユーザーだけがログインできるようになります。許可ユーザーのリストはユーザー名でのフィルタとして機能しますが、実際のユーザー認証はリモート ディレクトリに対して通常の方法で実行されます。

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーの設定

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services でローカル ユーザーを設定する手順は次のとおりです。

1. ユーザーを作成し、必要に応じてグループのメンバシップを割り当てます。ローカル ユーザーとグループは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で管理できます。
2. 個別のユーザーごと、またはグループごとにロールを割り当て、ユーザーのアクセス レベルを定義します。詳細は、[5 章 p.50 ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集](#) を参照してください。適切なアクションが設定されたロールがない場合は、新しいロールを作成する必要があります。詳細は、[5 章 p.49 新しいロールの作成](#) を参照してください。

外部で定義されたユーザーを IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で設定する手順は次のとおりです。

1. 外部セキュリティ プロバイダを設定します（定義されていない場合）。ユーザーは、このセキュリティ プロバイダを元にして作成されます。詳細は、[7 章 p.57 セキュリティ プロバイダの構成](#) を参照してください。
2. Active Directory（ローカル オーバーライド）ユーザーの一部にアクセスを制限する必要がある場合は、許可ユーザーを作成します。許可ユーザーを作成できるのは、Deployment Manager だけです。
3. リモート ディレクトリに存在しないグループに Active Directory（ローカル オーバーライド）ユーザーを追加する必要がある場合は、拡張グループを定義し、ユーザーをそのグループに追加します。拡張グループを作成できるのは、Deployment Manager だけです。
4. 個別のユーザーごと、またはグループごとにロールを割り当てます。リモートで定義されたユーザーへのロールの割り当て方法は、ローカル ユーザーにロールを割り当てる場合と同じです。

## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるユーザーとグループの管理

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager では、ローカル ユーザーとグループ、および Active Directory (ローカル オーバーライド) セキュリティ プロバイダに対して定義した許可ユーザーと拡張グループを管理できます。ユーザーまたはグループに関する操作を行う前に、この機能を制御するための管理インターフェイスを開きます。

1. [ツール] メニューで、[サーバー管理] を選択します。
2. [サーバー管理] タブから、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバーにログインします。[ユーザーとグループ] アイコンをダブルクリックして、階層を展開表示します。設定済みの外部セキュリティ プロバイダがない場合、階層には [ローカル ユーザー リポジトリ] しか表示されません。Active Directory (ローカル オーバーライド) がセキュリティ プロバイダとして設定されていて、許可ユーザーまたは拡張グループ オプションが有効になっている場合は、[Active Directory (ローカル オーバーライド)] も表示されます。

図 4-1  
[サーバー管理] タブ

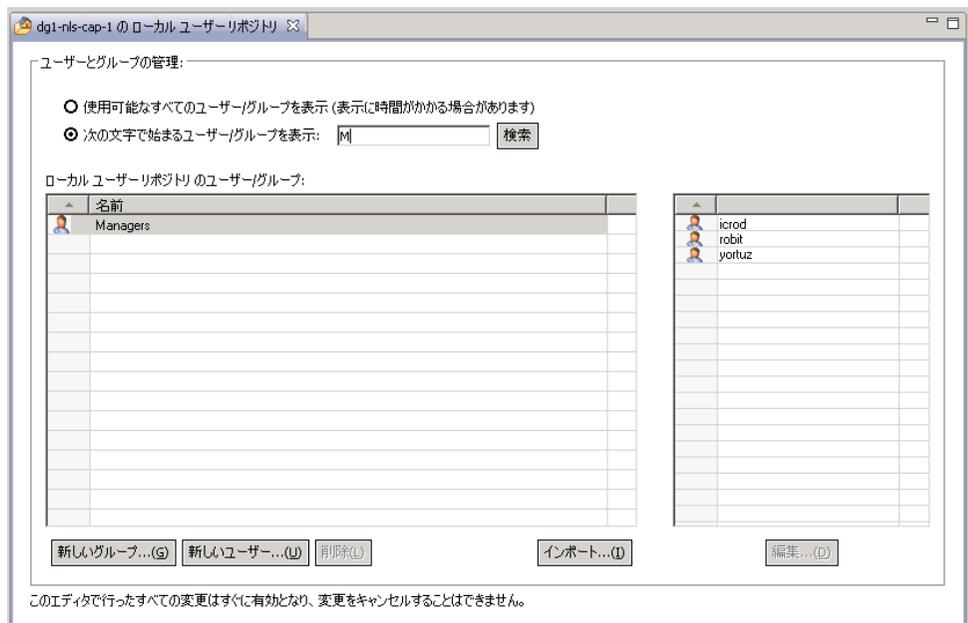


3. [ローカル ユーザー リポジトリ] アイコン、または [Active Directory (ローカル オーバーライド)] アイコンをダブルクリックします。

[ユーザーとグループの管理] エディタが表示されます。

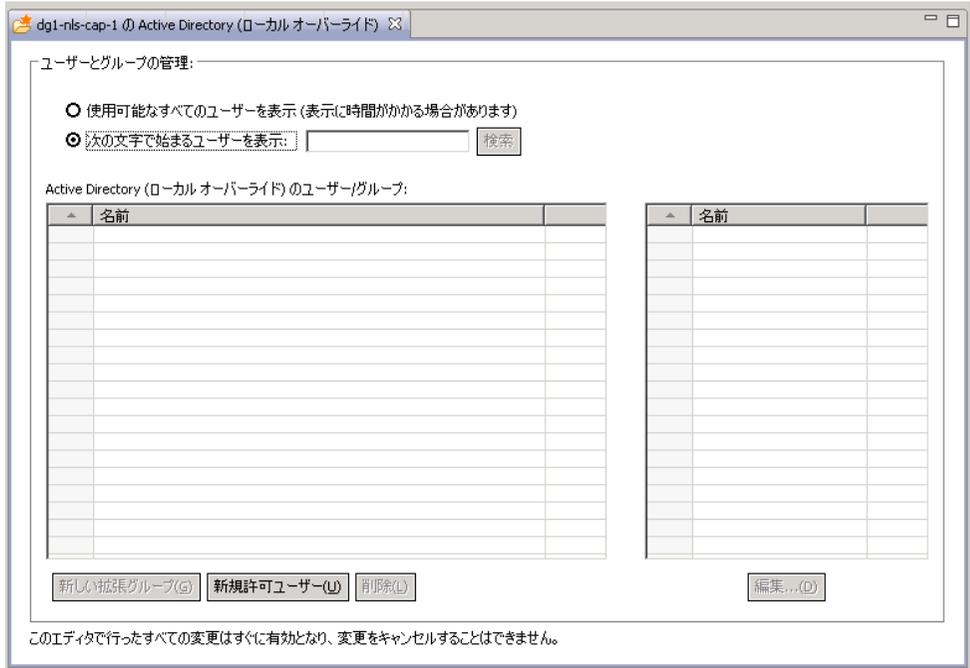
- ローカル ユーザー リポジトリの場合、このエディタには、すべてのネイティブ ユーザーおよびグループが表示されるか、ユーザー名やグループ名の最初の文字列に基づいてフィルタリングされたリストが表示されます。管理者は、ユーザーとグループの作成および削除、既存のユーザーとグループのプロパティの編集、ユーザーとグループのインポートを実行、ユーザーがシステムにアクセスしないようロックしたりロックを解除したりできます。

図 4-2  
[ユーザーとグループの管理] エディタ



- Active Directory (ローカル オーバーライド) の場合、このエディタには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services にアクセスできるようにあらかじめ外部で定義されたすべてのユーザーおよびグループが表示されるか、ユーザー名やグループ名の最初の文字列に基づいてフィルタリングされたリストが表示されます。管理者は、許可ユーザーと拡張グループの作成および削除を実行できます。また、そのセキュリティ プロバイダに対して許可ユーザーと拡張グループのオプションが有効になっている場合は、既存のグループのプロパティも編集できます。  
詳細は、7 章 p. 55 セキュリティ プロバイダ を参照してください。

図 4-3  
[ユーザーとグループの管理] エディタ (Active Directory (ローカル オーバーライド) の場合)



## ユーザーの作成

ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新規ユーザー] をクリックします。[ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-4  
[ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックス

**ユーザー名**：名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。

**パスワード**：ローカル ユーザーのパスワードです。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

**確認**：パスワード確認用のフィールドです。パスワードが一致しない場合、メッセージが表示されます。

**使用可能なすべてのグループを表示**：システムで認識されている全グループのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

**次の文字で始まるグループを表示**：入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なグループ** :ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

**グループの所属ユーザー** :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

**すべて追加** :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

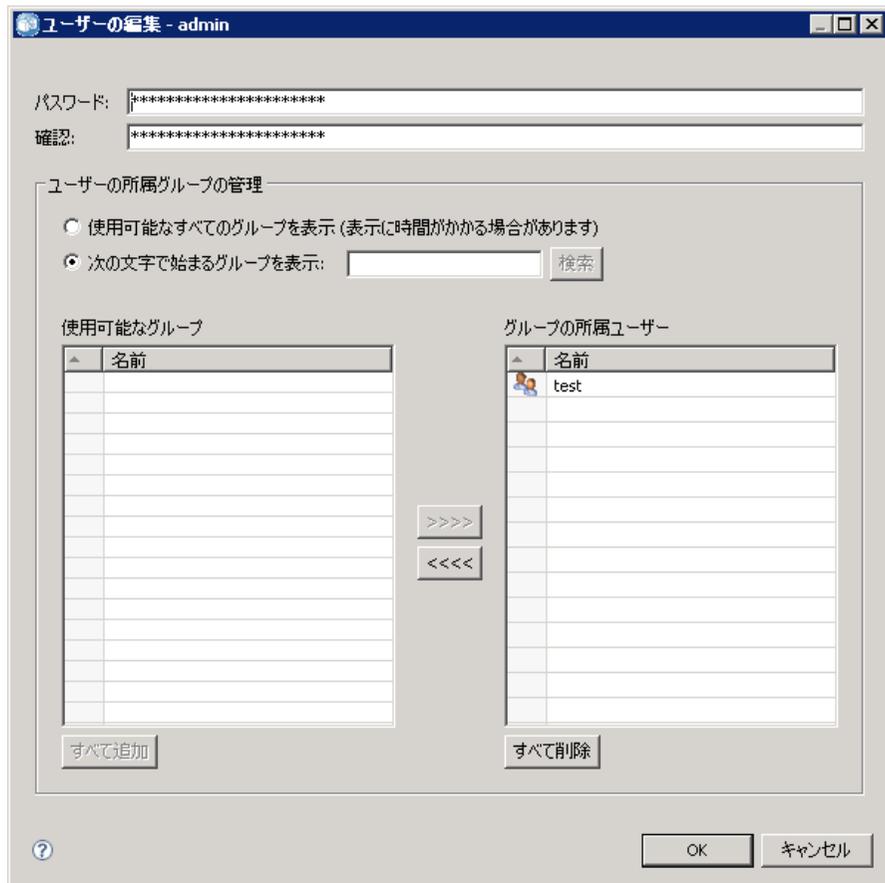
ローカル ユーザーを作成する場合、ログイン資格情報を指定する必要があります。ユーザーはグループに関連付けることもできます。

1. [ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスで、ユーザー名を指定します。
2. パスワードを指定します。
3. パスワードを確認します。
4. 必要に応じて、ユーザーをグループに関連付けます。
5. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいユーザーが表示されます。

## ユーザーの編集

ローカル ユーザーおよび Active Directory (ローカル オーバーライド) の許可ユーザーについて、グループ割り当てを編集できます。ローカル ユーザーの場合、パスワードも編集できます。[ユーザーとグループの管理] エディタでユーザーを選択して、[編集] をクリックします。[ユーザーの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-5  
[ユーザーの編集] ダイアログ ボックス



**パスワード:** ローカル ユーザーのパスワードです。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

**確認:** パスワード確認用のフィールドです。パスワードが一致しない場合、メッセージが表示されます。

**使用可能なすべてのグループを表示:** システムで認識されている全グループのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリ数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

**次の文字で始まるグループを表示:** 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なグループ:** ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

**グループの所属ユーザー** :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

**すべて追加** :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

## ユーザーのロックとロック解除

デフォルトでは、無効なパスワードでネイティブのローカル リポジトリユーザーが IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に 3 回続けてログオンしようとする、ユーザー アカウントが自動的にロックされます。ユーザー アカウントが 3 分後に自動的にロック解除されるまで、または管理者が手動でロック解除するまで、(正しい資格情報であっても) ユーザーはログインできなくなります。

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の [セキュリティ セクション] で、この機能をカスタマイズする 2 つの構成設定があります。

- **無効なログイン試行数のしきい値** : この設定は、自動的にユーザをロックアウトするまで失敗したログインを許可する回数を定義します。また、自動的にユーザーをロックしないように選択することができます。
- **アカウント ロックアウト期間** : この設定は自動的にロックアウトされたユーザのロックを解除するまでの待機時間 (分単位) を定義します。また、自動的にユーザーをロック解除しないように選択することができます。

この機能は、ローカル ユーザー リポジトリのネイティブ セキュリティプロバイダのユーザーに適用されます。

ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、手動でローカルユーザをロックしたりロックを解除できます。[状態] 列はユーザーがロックされているかどうかを示します。現在ロックされているすべてのユーザーを表示するには、**ユーザーとグループの管理** エディタで **[ロックされているユーザーのみを表示]** を選択します。

手動でローカル ユーザのロックを解除するには :

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、ロックされているユーザーを選択します。[状態] 列では、ロックされているユーザーに **[ロック]** と表示されます。現在ロックされているすべてのユーザーを表示する場合は、**[ロックされているユーザーのみを表示]** をクリックします。
2. **[ロック解除]** をクリックします。ユーザーのロック解除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。

3. [はい] をクリックすると、ユーザーのロックが解除されます。

手動でローカル ユーザをロックをするには：

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、ロックするユーザーを選択します。グループをロックすることはできません。
2. [ロック] をクリックします。ユーザーのロックを確認するダイアログ ボックスが表示されます。
3. [はい] をクリックすると、ユーザーがロックされます。手動でロック解除されるまで手動でロックされているユーザがロックアウトされたままになります。前述の [アカウントのロックアウト期間] 構成設定は適用されません (ユーザーは自動的に解除されません)。

## ユーザーの削除

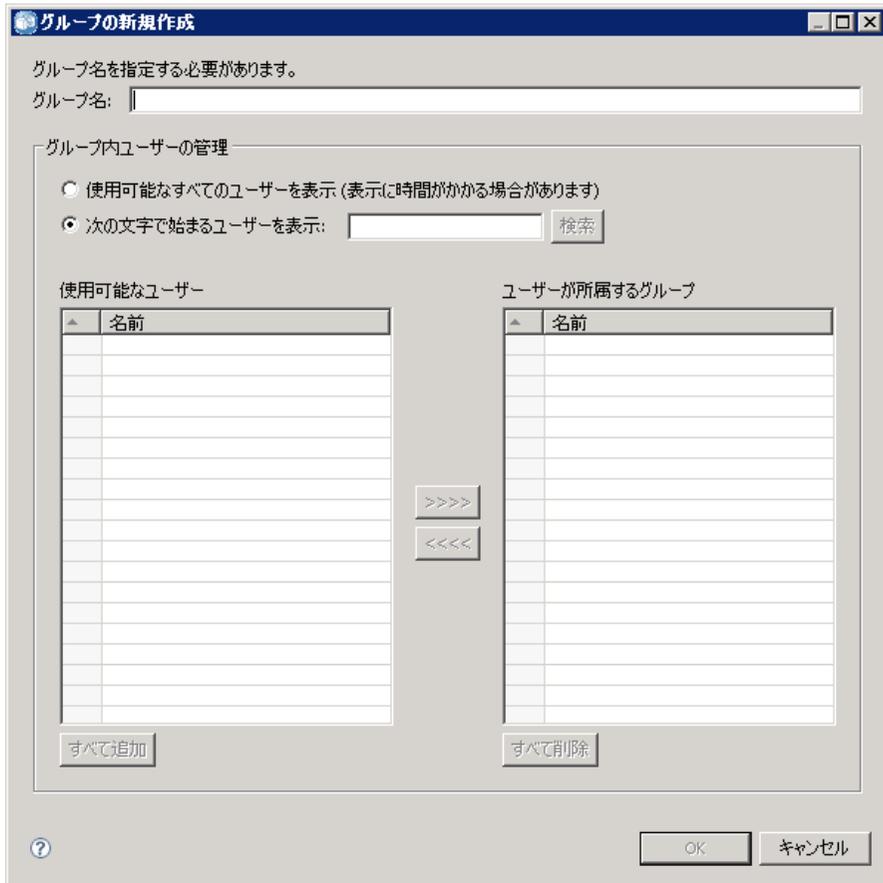
ローカル ユーザー、または Active Directory (ローカル オーバーライド) の許可ユーザーを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、ユーザーを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。ユーザーの削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。
3. [はい] をクリックすると、ユーザーがシステムから削除されます。ユーザーは、ユーザーとグループのリストから削除されます。

## グループの作成

ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新規グループ] をクリックします。[グループの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-6  
[グループの新規作成] ダイアログ ボックス



**グループ名**：名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。

**使用可能なすべてのユーザーを表示**：システムで認識されている全ユーザーのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

**次の文字で始まるユーザーを表示**：入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なユーザー**：グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

**ユーザーが所属するグループ**：グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

**すべて追加** :すべてのユーザーをグループに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

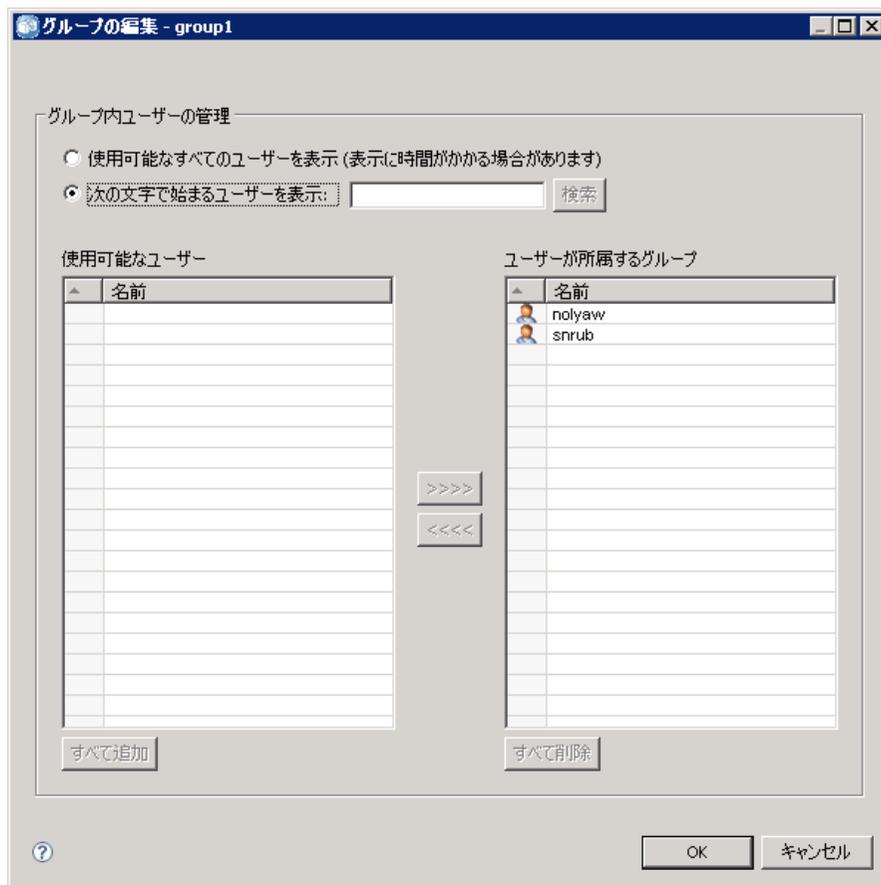
ローカル グループを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。グループには複数のユーザーを追加することもできます。

1. グループ名を指定します。
2. 必要に応じて、グループにユーザーを追加します。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいグループが表示されます。

## グループの編集

ローカル グループ、および Active Directory (ローカル オーバーライド) の拡張グループのユーザー リストは変更することができます。[ユーザーとグループの管理] エディタでグループを選択して、[編集] をクリックします。[グループの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-7  
[グループの編集] ダイアログ ボックス



**使用可能なすべてのユーザーを表示：** システムで認識されている全ユーザーのリストを表示します。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

**次の文字で始まるユーザーを表示：** 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なユーザー：** グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

**ユーザーが所属するグループ：** グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

**すべて追加：** すべてのユーザーをグループに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

## グループの削除

ローカル グループまたは Active Directory (ローカル オーバーライド) の拡張グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ユーザーとグループの管理] エディタで、削除するグループを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。選択したエントリの削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。
3. [はい] をクリックすると、グループがシステムから削除されます。グループはユーザーとグループのリストから削除されます。

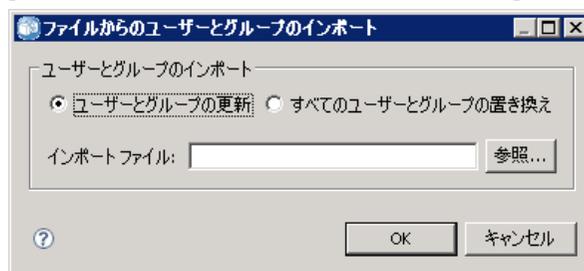
## ユーザーとグループのインポート

多数のローカル ユーザーまたはグループを定義する場合は、プリンシパルのインポート ファイルを使用してユーザーとグループを一括してインポートできます。このファイルは `nativestore.xsd` スキーマで定義されている構造に従う必要があります。詳細は、「[A 付録](#)」を参照してください。

ユーザーとグループをインポートするには、次の手順を実行します。

1. ローカル ユーザー リポジトリ用の [ユーザーとグループの管理] エディタで [インポート] ボタンをクリックします。[ファイルからのユーザーとグループのインポート] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-8  
[ファイルからのユーザーとグループのインポート] ダイアログ ボックス



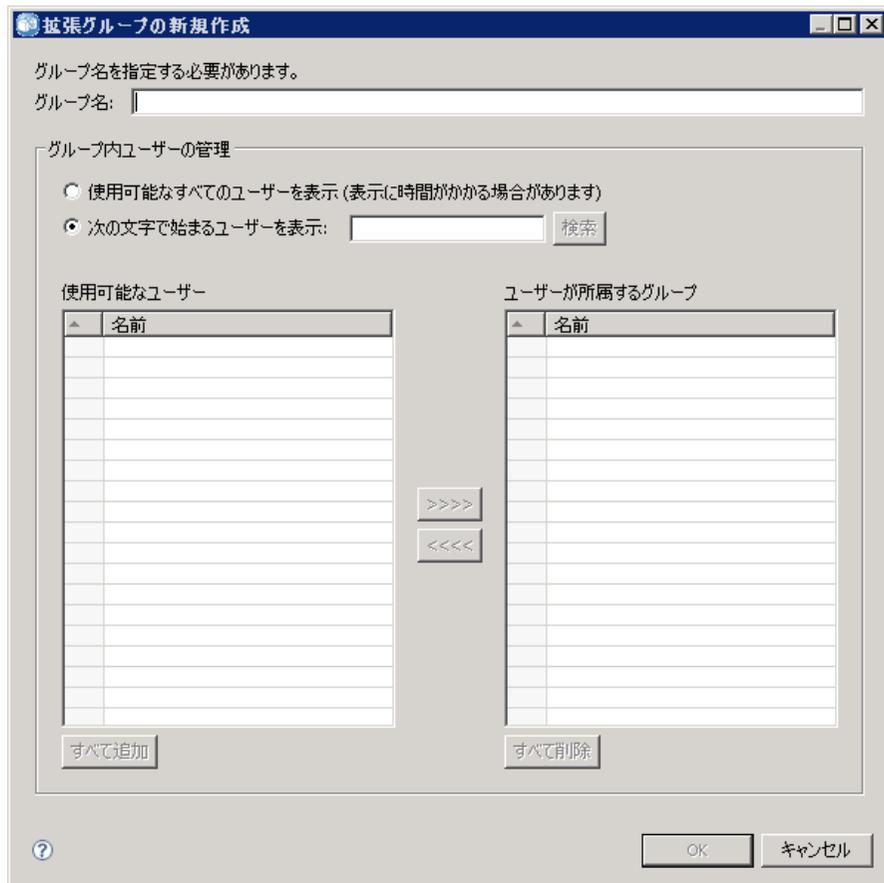
2. [ユーザーとグループの更新] または [すべてのユーザーとグループの置き換え] を選択します。

- **ユーザーとグループの更新**:インポート ファイルの情報で既存のユーザーを更新します。このファイルで定義されていない既存のユーザーとグループは、更新されません。
  - **すべてのユーザーとグループの置き換え**:現在のユーザーとグループを、インポート ファイルの情報で置き換えます。このファイルで定義されていない既存のユーザーとグループは、削除されます。
3. インポート ファイルが置かれている場所に移動します。
  4. [OK] をクリックすると、ファイルがインポートされます。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しいユーザーとグループが表示されます。

## 拡張グループの作成

Active Directory (ローカル オーバーライド) 用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新しい拡張グループ] をクリックします。[拡張グループの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-9  
[拡張グループの新規作成] ダイアログ ボックス



**使用可能なすべてのユーザーを表示：** 許可ユーザーのオプションが有効である場合、すべての許可ユーザーのリストが表示されます。許可ユーザーのオプションが無効である場合、ディレクトリ内の全ユーザーのリストが表示されます。非常に大きいディレクトリの場合、表示できるエントリの数が制限されることがあります。そのため、検索文字列を指定することをお勧めします。

**次の文字で始まるユーザーを表示：** 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なユーザー：** グループに追加できる認識済みユーザーが表示されます。

**ユーザーが所属するグループ：** グループに割り当てられているユーザーが表示されます。

**すべて追加** :すべてのユーザーをグループに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているユーザーのグループへの関連付けをすべて解除します。

拡張グループを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。グループには複数のユーザーを追加することもできます。

1. グループ名を指定します。
2. 必要に応じて、グループにユーザーを追加します。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しい拡張グループが表示されます。

## 許可ユーザーの作成

Active Directory (ローカル オーバーライド) 用の [ユーザーとグループの管理] エディタで、[新しい許可ユーザー] をクリックします。[許可ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 4-10  
[許可ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックス

**ユーザー名** : 名前では大文字と小文字は区別されません。スペースを含めることもできます。リモート ディレクトリにユーザーが実際に存在するかどうかの確認はできません。また、ユーザー名の入力を誤ると、システムに対する認証は行われません。

**すべての拡張グループを表示** :すべての拡張グループのリストが表示されます。

**次の文字で始まるグループを表示** : 入力された文字列に従って、使用可能なグループのリストをフィルタリングします。このフィールドを使って、使用可能なグループのリストを見やすくできます。

**使用可能なグループ** :ユーザーを割り当てられる認識済みグループが表示されます。

**グループの所属ユーザー** :ユーザーが現在割り当てられているグループが表示されます。

**すべて追加** :すべてのグループをユーザーに関連付けます。

**すべて削除** :表示されているグループのユーザーへの関連付けをすべて解除します。

注 : 許可ユーザーを拡張グループに関連付けることができるのは、Active Directory (ローカル オーバーライド) で拡張グループが有効になっている場合だけです。拡張グループが有効になっていない場合、ユーザー選択のフィールドは表示されません。

許可ユーザーを作成する場合、ユーザー名を指定する必要があります。ユーザーはグループに関連付けることもできます。

1. [ユーザーの新規作成] ダイアログ ボックスで、ユーザー名を指定します。
2. 必要に応じて、ユーザーを拡張グループに関連付けます。
3. [OK] をクリックします。[ユーザーとグループの管理] エディタのリストに、新しい許可ユーザーが表示されます。

# ロール

## ロールの概要

ロールを使用して、システム機能へのユーザーおよびグループのアクセスを管理することができます。ロールはユーザーおよびグループに割り当てられ、セキュリティ プロバイダを組み合わせで使用します。

作成された各ロールは、ロールに割り当てられたユーザまたはグループが持つアクセス許可やコントロールのレベルを示すアクションと関連付けます。たとえば、基本ユーザー ロールを作成します。基本ユーザー ロールには、システムにアクセスするためのアクションの制限されたセットや、リポジトリのコンテンツを表示する機能が割り当てられています。基本ユーザー ロールは、サーバーを定義、他のユーザーを追加、またはその他のユーザーやグループに影響を与えるシステム構成を定義するような関連アクションを割り当てられていません。

ただし、上級ユーザー ロールは、ユーザーを削除したり、グループを作成、追加ロールを定義するなど、管理タスクを実行する必要があります。この場合、アプリケーション ドメインに対してより多くのコントロールを持つ、制限の少ないロールを作成し、非常に少人数のユーザーに割り当てることができます。

一連の可能なアクションはシステム内で定義され、アクションを割り当てるユーザーによって編集することはできません。

ユーザーが複数のグループに所属する場合、そのユーザーに割り当てられたロール「アクション セット」は、グループ メンバシップを介して間接的に割り当てられているすべてのロール同様、そのユーザーに明示的に割り当てられたすべてのロールで構成されています。ユーザーまたはグループが複数のロールに割り当てられている場合、ユーザーまたはグループのアクション セットは、グループ メンバシップで間接的に割り当てられたすべてのロールに加え、明示的に割り当てられたすべてのロールで構成されています。ユーザーとグループはセキュリティ プロバイダごとに管理する必要があります。ロールはセキュリティ プロバイダ全体で管理されます。ユーザーおよびグループの詳細は、「[4 章](#)」を参照してください。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のサーバー管理ツールを使用して、ロール定義を管理し、ロールに割り当てられているユーザーやグループを変更します。

## Actions

一連のアクションで構成されるロール。このアクションはシステムによって定義されており、変更することはできません。

### IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のアクション

- **コンテンツとフォルダへのアクセス** :IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository にアクセスします。
- **共同フィードにアクセス** : RSS (Really Simple Syndication) フィードなどの共同フィードにアクセスします。
- **布置**。リポジトリの設定を変更します。
- **モデルの構成** : スコアリングのモデルを構成します。
- **登録の作成** :リポジトリ オブジェクト (フォルダ、ファイル、ジョブなど) を個別に登録します。登録者は、対応するオブジェクトが変更されたときに E メール メッセージを受信します。
- **通知の定義と管理** :ジョブの成功や失敗などのイベントについて複数のユーザーに配信される通知を定義および管理します。
- **資格情報の定義** :実行サーバーのセキュリティ資格情報を作成、表示、および変更します。
- **カスタム プロパティの定義** :リポジトリ内のオブジェクトのカスタム プロパティを定義および変更します。
- **データソースの定義** :データ ソースを定義および変更します。
- **メッセージドメインの定義** :JMS メッセージングのドメインを定義および変更します。
- **プロモーション ポリシーを定義** : リポジトリオブジェクトをプロモーションするためのポリシー (ルールのセット) を定義して変更します。
- **サーバー クラスタの定義** :実行サーバー クラスタを定義および変更します。
- **サーバーの定義** :実行サーバーを定義および変更します。
- **トピックの定義** :リポジトリのトピック階層を定義および変更します。
- **ジョブ編集** :ジョブを作成および変更します。ユーザーに対してジョブが表示されるかどうかはアクセス許可によって決まります。
- **ジョブ実行** :ジョブを実行します。ユーザーに対してジョブが表示されるかどうかはアクセス許可によって決まります。
- **ロックの管理** : ユーザーがリポジトリ ソースで作成するロック (他のユーザーがロックしたりソースのロック解除など) を管理します。
- **IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View の管理** :Enterprise View、アプリケーション ビュー、データ プロバイダ定義を作成、変更、および削除します。
- **登録の管理** :他のユーザーの登録を管理したり、登録を削除したりします。
- **MIME タイプ** :リポジトリに対してマップされている MIME タイプを管理します。

- **オブジェクトのプロモーション:** リポジトリ オブジェクトをプロモートします。
- **リポジトリ インデックス:** リポジトリのコンテンツのインデックスを再作成します。
- **カスタム ダイアログの実行:** IBM® SPSS® Statistics カスタム ダイアログを実行します。
- **動的レポートの実行:** IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal で、Business Intelligence Reporting Tools (BIRT) など、動的レポートを実行します。
- **スケジュール:** ジョブ スケジュールを管理します。
- **モデルのスコアリング:** モデルをスコアリングします。
- **すべてのバージョンを表示:** Deployment Portalで、オブジェクトのすべてのバージョン（ラベル付けされているものとされていないもの）を表示します。デフォルトでは、Deployment Portal でラベル付きバージョンのみが参照できます。
- **最新を表示:** 最新バージョンのオブジェクトをインストールします。
- **ワークの送信:** IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services による処理で必要となるワーク（レポートなど）を送信します。
- **ユーザー設定管理:** 他のユーザーの設定を管理します。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 製品は、他のユーザーの設定を変更するための任意のユーザー インターフェースを提供していません。直接ユーザー設定 Web サービスを呼び出す場合にのみこの設定が適用されます。
- **期限切れファイルの表示:** ファイルやジョブなど期限切れコンテンツを表示します。
- **モデル管理ダッシュボードの表示:** IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager および Deployment Portal にモデル管理ダッシュボードを表示します。

注:[最新の表示] アクションは、[すべてのバージョンの表示] のサブセットで、両方のアクションがある場合、[すべてのバージョンを表示] が [最新を表示] に優先されます。

## 管理者ロール

システムには定義済みの管理者ロールが含まれます。このロールは変更できません。このロールは、システムで行うことができずすべてのアクションと関連付けられています。このロールに割り当てられたユーザは、システムのいかなるアクションも実行できます。また、リポジトリ コンテンツのエクスポートやインポートなど、アクションによって制御され

ていない一部の機能は、このロールに割り当てられたユーザーのみが行うことができます。

管理者が可能な制御が幅広いため、このロールにユーザーを割り当てる際には注意が必要です。システム内のすべての権限にアクセスする必要があるユーザーのみを割り当ててください。アクションのサブセットのみが必要がユーザーが、カスタム ロールに割り当てます。 [詳細は、p. 49 新しいロールの作成](#) を参照してください。

## ロール定義の管理

ロールに関する操作を行うには、[ツール] メニューの [サーバー管理] を選択し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository サーバーを選択して、ログインします。そのサーバーに対応する [ロール] アイコンをダブルクリックして、[ロール定義の管理] エディタにアクセスします。

図 5-1  
ロール定義とユーザー/グループ割り当ての管理



このエディタで行ったすべての変更は直ちに反映されます。変更内容をキャンセルすることはできません。

**すべてのロール：**セキュリティ プロバイダで利用できる全ロールのリストが表示されます。新しいロールを追加すると、このリストにエントリが追加されます。システムに新しいロールを追加するには、[新規ロール] ボタンをクリックします。ロールを削除するには、ロールを選択して [削除] ボタンをクリックします。このリストでロールを選択すると、ロールに関連付けられているアクションが表示されます。

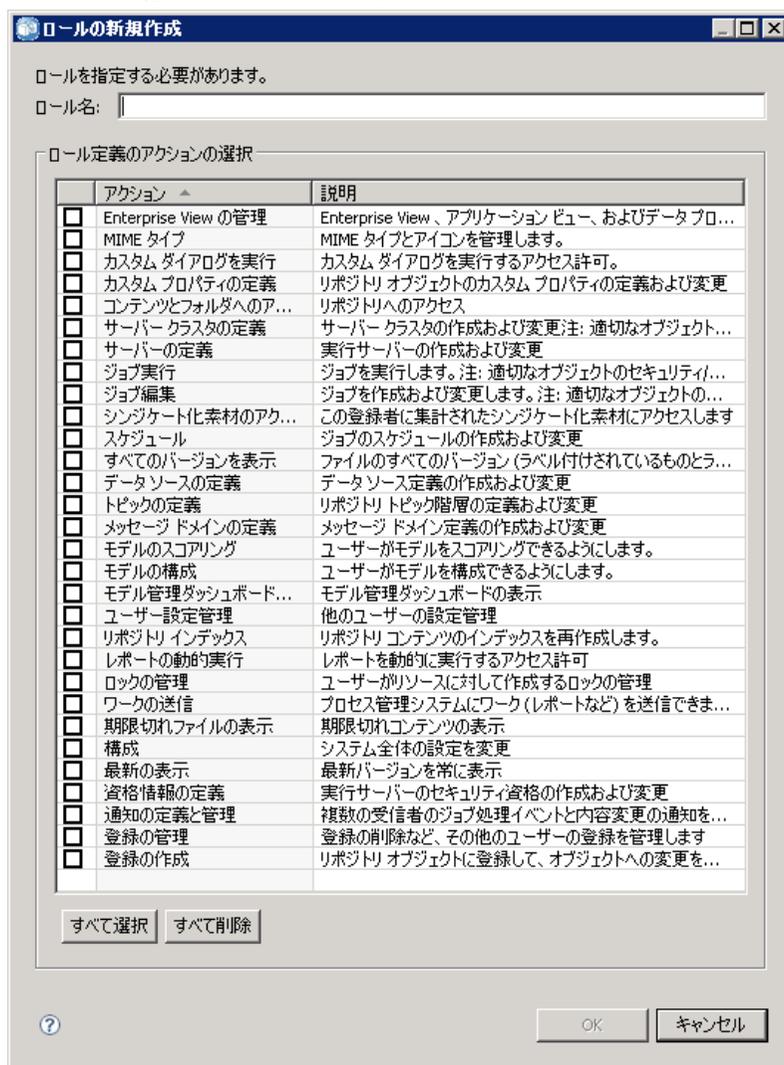
**ロールの定義：**選択したロールに関連付けられているアクションのリストが表示されます。選択したロールに関連付けられているアクションを編集するには、[アクションの編集] ボタンをクリックします。

**ロールに割り当てるユーザーとグループ：**選択したロールに割り当てられているユーザーとグループのリスト。選択したロールに割り当てられているユーザーとグループを編集するには、[ユーザーとグループの編集] ボタンをクリックします。

## 新しいロールの作成

新しいロールを作成するには、[ロール] エディタの [新規ロール] をクリックします。[ロールの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 5-2  
[ロールの新規作成] ダイアログ ボックス



**ロール名:** ロールを識別するためのテキスト文字列。ロール名は一意である必要があります。他のロール名と重複しないようにしてください。

**アクション。** システム内で定義されている、使用可能なすべてのアクションが表示されます。最初は、ロールにアクションは関連付けられていません。

アクションをロールに割り当てるには、アクションの横にあるチェックボックスをオンにします。また、すべてのアクションをロールに追加するには、[すべて選択] ボタンをクリックします。[すべて削除] ボタンをクリックすると、アクションの選択がすべてクリアされます。アクションのリストは、[アクション] 列をクリックして並べ替えることができます。[OK] をクリックすると、ロールが作成されて保存されます。

## ロールの編集

ロールに割り当てられているアクションのリストを編集するには、編集するロールを [ロール] エディタで選択し、[アクションの編集] ボタンをクリックします。[ロールの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

**ロール名：** ロールを識別するためのテキスト文字列。ロール名は一意である必要があります。他のロール名と重複しないようにしてください。

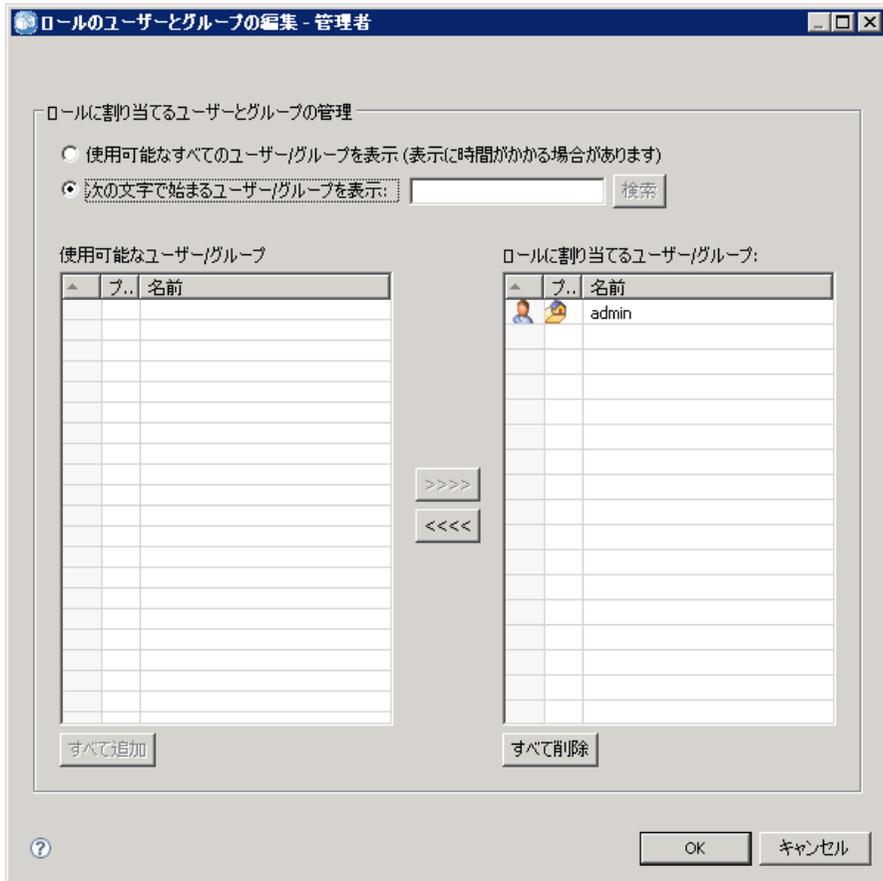
**アクション。** システム内で定義されている、使用可能なすべてのアクションが表示されます。最初は、ロールにアクションは関連付けられていません。

アクションをロールに割り当てるには、アクションの横にあるチェックボックスをオンにします。また、すべてのアクションをロールに追加するには、[すべて選択] ボタンをクリックします。[すべて削除] ボタンをクリックすると、アクションの選択がすべてクリアされます。アクションのリストは、[アクション] 列をクリックして並べ替えることができます。[OK] をクリックすると、変更したロール定義が保存されます。

## ロールに割り当てられているユーザーとグループの編集

ロールを定義した後、アクセスのレベルを定義するために、ロールにユーザーとグループを関連付ける必要があります。ロールにユーザーとグループを割り当てるには、[ロール] エディタの [ユーザーとグループの編集] ボタンをクリックします。[ロールのユーザーとグループの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

図 5-3  
[ロールのユーザーとグループの編集] ダイアログ ボックス



ロールに割り当てられるユーザーとグループの表示には、次の 2 つのオプションがあります。

- **使用可能なすべてのユーザー/グループを表示：**すべてのセキュリティプロバイダで指定できるすべてのユーザーおよびグループのリストが表示されます。
- **次の文字で始まるユーザー/グループを表示：**検索オプションに従って、指定可能なユーザーとグループのリストをフィルタリングします。

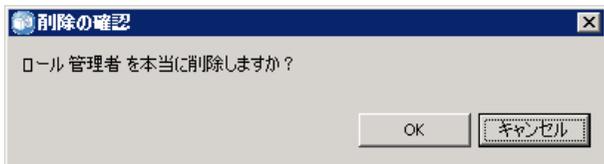
[使用可能なユーザー/グループ] のリストには、検索オプションに適合するユーザーとグループが表示されます。ユーザーまたはグループを選択して [>>>>] ボタンをクリックすると、そのユーザーまたはグループがロールに割り当てられます。ロールからユーザーまたはグループを削除するには、[ロールに割り当てるユーザー/グループ] リストでユーザーまたはグループを選択し、[<<<<] ボタンをクリックします。完了したら、[OK] をクリックします。

## ロールの削除

ロールを削除するには、次の手順を実行します。

1. [ロール] エディタで、削除するロールを選択します。
2. [削除] ボタンをクリックします。削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。

図 5-4  
[削除の確認] ダイアログ ボックス



3. 削除するロールを確認して、[OK] をクリックします。  
そのロールがシステムから削除されます。

# クロス サイト スクリプト (XSS) フィルタ

クロス サイト スクリプティング (XSS) は、通常、Web アプリケーションに見られるコンピュータのセキュリティ上の脆弱性です。それは通常、他のユーザーが閲覧したウェブページに悪意のあるスクリプトを追加することにより、攻撃者が Web コンテンツに課されるクライアントサイドのセキュリティメカニズムをバイパスできるようにします。XSS は、データの機密性に応じて、重大なセキュリティリスクになる可能性があります。

5 より前の IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のバージョンでは、Web セキュリティ フィルタは、ユーザーが入力したパラメータを検証することで XSS 攻撃を防ぐことができました。しかし、すべてのフィルタ基準が製品に組み込まれており、ユーザーによる編集またはカスタマイズに利用できませんでした。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、ユーザーは、エンタープライズ セキュリティ ポリシーに基づいて、XSS フィルタルールを追加、変更、削除することができます。

## XSS フィルタルールの管理

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、ユーザーは、エンタープライズ セキュリティ ポリシーに基づいて、XSS フィルタルールを追加、変更、削除することができます。XSS フィルタを使用して作業するには、まず管理インタフェースに移動します。

1. [ツール] メニューの [サーバー管理] を選択します。
2. [サーバー管理] タブから、リポジトリ サーバーにログインします。[設定] アイコンをダブルクリックして、階層を展開します。
3. [クロス サイト スクリプト フィルタ] アイコンをクリックします。

[XSS フィルタ ルールの定義の管理] エディタが表示されます。

エディタは、現在サーバーに定義されているすべての XSS フィルタ ルールが表示されます。管理者は、XSS フィルタルールを作成、変更、および削除することができます。現在、その種類に対して定義された任意のフィルタ ルールを表示するには、ドロップダウンからフィルタ タイプを選択します。次に示すフィルタ タイプを使用できます。

- HTML 要素の制限
- JavaScript 機能の制限
- プレーン テキスト文字列の制限
- 制限文字列の正規表現
- 許可された文字列

XSSフィルタルールへの変更は、すぐに適用されます（サーバを再起動する必要はありません）。

## XSS フィルタルールを作成

新しい XSS フィルタ ルールを作成するには：

1. 管理 XSS フィルタ ルール定義エディタで、新しいルールを作成するためのフィルタ タイプを選択します。
2. [追加] をクリックします。[ ルールの編集 ] ダイアログが表示されます。
3. 新しい XSS フィルタ ルールに該当する値を入力、[OK] をクリックします。

このドキュメントでは、フィルタ ルールの XSS を記載していません。例を記載すると、悪意のあるスクリプトのためのアイデアを提供する可能性があります。

# セキュリティ プロバイダ

セキュリティ プロバイダは、特定のユーザー ディレクトリに対してユーザーが指定した資格情報を検証します。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services には、認証の内部ディレクトリが含まれますが、既存のエンタープライズユーザー ディレクトリも使用できます。使用できるプロバイダは次のとおりです。

- **ネイティブ (またはローカル ユーザー リポジトリ)**: IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の内部セキュリティ プロバイダ。ユーザー、グループ、ルールをすべて定義できます。ネイティブ プロバイダは常に有効で、無効化することはできません。
- **OpenLDAP®**: 認証、許可、セキュリティ ポリシーに対するオープンソースの LDAP の実装。このプロバイダのユーザーとグループは、LDAP ツールを使用して直接定義する必要があります。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で使用するために OpenLDAP を構成すると、ユーザーを OpenLDAP サーバーに対して認証し、該当するユーザーに関連するアクセス許可やアクセス権限を維持することができます。ネイティブ プロバイダと異なり、このプロバイダは有効化したり無効化したりできます。
- **Active Directory®**: 認証、許可、およびセキュリティ ポリシーを管理する Microsoft バージョンの軽量ディレクトリ アクセス プロトコル (Lightweight Directory Access Protocol: LDAP)。このプロバイダのユーザーとグループは Active Directory フレームワークで直接定義する必要があります。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services で使用するために Active Directory を構成すると、ユーザーを Active Directory サーバーに対して認証し、該当するユーザーに関連するアクセス許可やアクセス権限を維持することができます。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。Active Directory の詳細は、元のベンダーのマニュアルを参照してください。
- **Active Directory (ローカル オーバーライド)**: Active Directory を使用し、拡張グループや許可ユーザーのフィルタリングを作成できるプロバイダ。拡張グループには、Active Directory の一連のユーザーが含まれますが、Active Directory フレームワーク外にあります。許可ユーザーのフィルタリングでは、システムに対して認証を行う Active Directory ユーザーのリストを定義されたセットに制限します。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。
- **IBM i**: IBM i ユーザー プロファイル ディレクトリを使用して、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーを認証することができます。このプロバイダは、有効化/無効化が可能です。IBM i セキュリティ プロバイダをシングルサインオン対応 IBM SPSS

Collaboration and Deployment Services インストールで使用する場合、EIM (Enterprise Identify Management) を有効化する必要があります。また、アプリケーション サーバーが IBM i 以外のホストで稼動している場合、/QIBM/UserData/Java400/ext/eim.jar を IBM SPSS Collaboration and Deployment Services アプリケーション サーバーのライブラリ ディレクトリにコピーする必要があります。

- **JDE アプリケーション ユーザー:**IBM® ShowCase® を使用する場合、ShowCase アダプタ インストールでは、このセキュリティ プロバイダを IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーにインストールします。このセキュリティ プロバイダを、JD Edwards (JDE) アプリケーションがログインして IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 環境を使用できるように設定する場合があります。詳細については、『ShowCase 管理者ガイド』を参照してください。

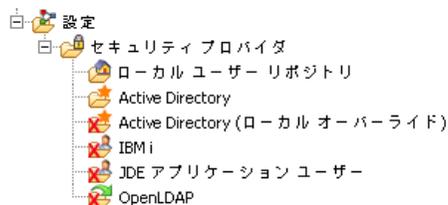
## IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager におけるセキュリティ プロバイダ

セキュリティ プロバイダを使用した操作を行う前に、この機能を制御するための管理インターフェイスを開きます。

1. [ツール] メニューの [サーバー管理] を選択します。
2. [サーバー管理] タブから、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーにログインします。
3. サーバーの [構成] アイコンをダブルクリックして、階層を展開します。
4. [セキュリティプロバイダ] アイコンをダブルクリックして、階層を展開します。
5. 新しいセキュリティプロバイダを設定するには、[セキュリティプロバイダ] を右クリックし、**新規作成** を選択します。ウィザードが表示されます。または既存のセキュリティ プロバイダ構成を変更するには、[セキュリティプロバイダ] でセキュリティ プロバイダの名前をダブルクリックします。

セキュリティ プロバイダを有効または無効にするには、[サーバー管理] タブでセキュリティ プロバイダを右クリックし、[有効化] または [無効化] をクリックします。

図 7-1  
セキュリティプロバイダへのアクセス



## セキュリティプロバイダの構成

各種類のセキュリティプロバイダには、使用する認証および承認システムに応じた設定があります。詳細については、以下のトピックを参照してください。

セキュリティプロバイダを有効または無効にするには、[サーバー管理] タブでセキュリティプロバイダを右クリックし、[有効化] または [無効化] をクリックします。

注：既存のセキュリティプロバイダ定義に変更が行われている場合、リポジトリが再起動するまで、またはセキュリティプロバイダを無効にして再度有効化するまで、有効ではありません。Active Directory セキュリティプロバイダの名前が変更されているなど特定の場、ユーザーおよびグループを削除してロールに再度追加する必要があります。 [詳細は、4 章 p.27 IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ユーザーの設定](#) を参照してください。

### ネイティブ

ローカルユーザーリポジトリのネイティブセキュリティプロバイダは IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 内部でだけ使用され、構成する設定事項はありません。

### OpenLDAP

または既存の OpenLDAP 構成を変更するには、[セキュリティプロバイダ] で OpenLDAP の名前をダブルクリックします。

新しい OpenLDAP を設定するには、[セキュリティプロバイダ] を右クリックします。

新規 > データプロバイダの定義

新しいセキュリティプロバイダ定義ウィザードが表示されます。[種類] ドロップダウンメニューから [OpenLDAP] を選択します。セキュリティプロバイダ定義の名前を入力し、[次へ] をクリックしてウィザードの手順に従います。次の詳細を参照してください。

### ホスト設定

- **ホスト URL** : LDAP サーバーへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレス (ldap://yourserver.yourcompany.com など) です。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **セキュアソケットレイヤ接続の使用** : OpenLDAP サーバーとの通信に SSL を使用する場合に選択します。

- **ページ検索結果:** LDAP サーバーが LDAP 検索出力を表示するオプションを提供している場合、このオプションが有効な場合にのみこのオプションを選択します。表示された結果検索コントロールの追加情報は、「RFC 2686 - LDAP Control Extension for Simple Paged Results Manipulation」 (<http://datatracker.ietf.org/doc/rfc2696/>) を参照してください。

### 資格情報

- **検索資格情報タイプ:** 検索資格情報の処理を指定します。バック エンドサーバーが許可している場合、[匿名バインドの使用] オプションを選択すると検索ユーザー ID およびパスワードを入力することなく検索することができます。[Kerberos 資格情報を使用] オプションを使用すると、検索にシステムの Server Process Credential を使用します。[指定された資格情報を使用] オプションを選択し、検索資格情報として使用するユーザー ID とパスワードを指定します。
- **ユーザーの検索:** 検索を実行するためのユーザー ID。識別名の形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **ユーザー パスワードの検索:** セキュリティのため、指定されたドメインユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (\*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワードフィールドに値を入力してください。

### ユーザー バインドの定義

- **コンテキスト バインドの使用:** ユーザーがログインする際にバインド操作を実行します。推奨。
- **パスワード属性:** ユーザー バインドを希望しない場合に使用するパスワード属性。選択すると、セキュリティ サーバーがクエリのパスワード属性の戻り値を許可していることを確認します。そうでない場合、このオプションは使用できません。
- **パスワード ダイジェスト:** セキュリティ サーバーがパスワードの変換に使用するパスワード ダイジェスト メソッド。このオプションは、ユーザー バインドを希望しない場合に使用します。選択すると、セキュリティ サーバーがクエリのパスワード属性の戻り値を許可していることを確認します。そうでない場合、このオプションは使用できません。

### ユーザー検索の設定

- **検索フィルタベース DN:** ユーザー検索用のベース識別名。
- **オブジェクト フィルタ式** フィルタリングに使用するオブジェクト クラスと値。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **検索フィルタ式:** 検索 ID として使用する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。

- **属性の検索:** 検索フィルタ式に一致する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **グループ ユーザー フィルタ:** ユーザー グループ メンバーシップを示す属性。

### グループ検索の設定

- **検索フィルタベース DN:** グループ検索用のベース識別名。
- **オブジェクト フィルタ式** フィルタリングに使用するオブジェクト クラスと値。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **検索フィルタ式:** 検索 ID として使用する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **グループ属性:** 検索フィルタ式に一致する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **メンバー属性:** ユーザー グループ メンバーシップを示す属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **更新の間隔:** グループ メンバーシップ データを更新する間隔。

## Active Directory

新しいアクティブ ディレクトリ セキュリティ プロバイダを設定するには、[セキュリティプロバイダ] を右クリックします。

新規 > データプロバイダの定義

新しいセキュリティ プロバイダ定義ウィザードが表示されます。[種類] ドロップダウン メニューから [アクティブ ディレクトリ] を選択します。セキュリティ プロバイダ定義の名前を入力し、[次へ] をクリックしてウィザードの手順に従います。次の詳細を参照してください。

### ホスト設定

- **ホスト URL:** Active Directory サーバーの URL。LDAP のデフォルトのポートは 389 です。
- **セキュア ソケット レイヤ接続の使用:** Active Directory サーバーとの通信に SSL を使用する場合に選択します。
- **ページ検索結果:** Active Directory サーバーが Active Directory 検索出力を表示するオプションを提供している場合、このオプションが有効な場合にのみこのオプションを選択します。

### 資格情報

- **検索資格情報タイプ:** 検索資格情報の処理を指定します。バック エンドサーバーが許可している場合、[匿名バインドの使用] オプションを選択すると検索ユーザー ID およびパスワードを入力することなく検索す

ることができます。[Kerberos 資格情報を使用] オプションを使用すると、検索にシステムの Server Process Credential を使用します。[指定された資格情報を使用] オプションを選択し、検索資格情報として使用するユーザー ID とパスワードを指定します。

- **ユーザーの検索:** 検索を実行するためのユーザー ID。domain\username という形式で指定します。指定された名前のユーザーは、ユーザーを検索および認証するための適切なアクセス許可を持っている必要があります。
- **ユーザー パスワードの検索:** セキュリティのため、指定されたドメインユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (\*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワードフィールドに値を入力してください。

### ドメイン名

- **ドメイン:** ユーザーがログインしている DNS 名前空間。

### ユーザー バインドの定義

- **コンテキスト バインドの使用:** ユーザーがログインする際にバインド操作を実行します。推奨。
- **パスワード属性:** ユーザー バインドを希望しない場合に使用するパスワード属性。選択すると、セキュリティ サーバーがクエリのパスワード属性の戻り値を許可していることを確認します。そうでない場合、このオプションは使用できません。
- **パスワード ダイジェスト:** セキュリティ サーバーがパスワードの変換に使用するパスワード ダイジェスト メソッド。このオプションは、ユーザー バインドを希望しない場合に使用します。選択すると、セキュリティ サーバーがクエリのパスワード属性の戻り値を許可していることを確認します。そうでない場合、このオプションは使用できません。

### ユーザー検索の設定

- **検索フィルタベース DN:** ユーザー検索用のベース識別名。
- **オブジェクト フィルタ式** フィルタリングに使用するオブジェクト クラスと値。この値は使用されるスキーマに依存します。
- **検索フィルタ式:** 検索 ID に使用する属性。この値は使用されるスキーマに依存します。
- **属性の検索:** 検索フィルタ式に一致する属性。この値は使用されるスキーマに依存します。
- **グループ ユーザー フィルタ:** ユーザー グループ メンバーシップを示す属性。

### グループ検索の設定

- **検索フィルタベース DN:** グループ検索用のベース識別名。
- **オブジェクト フィルタ式** フィルタリングに使用するオブジェクト クラスと値。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **検索フィルタ式:** 検索 ID として使用する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **グループ属性:** 検索フィルタ式に一致する属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **メンバー属性:** ユーザー グループ メンバーシップを示す属性。この値は使用される LDAP スキーマに依存します。
- **更新の間隔:** グループ メンバーシップ データを更新する間隔。

### Active Directory (ローカル オーバーライド)

新しいActive Directory (ローカル オーバーライド) セキュリティ プロバイダを設定するには、[セキュリティプロバイダ] を右クリックします。

新規 > データプロバイダの定義

新しいセキュリティ プロバイダ定義ウィザードが表示されます。[種類] ドロップダウン メニューから [Active Directory (ローカル オーバーライド)] を選択します。セキュリティ プロバイダ定義の名前を入力し、[次へ] をクリックしてウィザードの手順に従います。

ほとんどの設定は [Active Directory](#) の場合と同じです。ただし、ローカル オーバーライド用の 2 つの設定が追加されています。

- **許可ユーザー:** 許可ユーザーを使用するかどうかを指定します。許可ユーザーを使用すると、ユーザーを定義するローカルのリストに含まれているユーザーだけを Active Directory で認証できます。
- **拡張グループ:** 拡張グループを使用するかどうかを指定します。拡張グループを使用すると、Active Directory ユーザーのグループを定義できます。Active Directory ユーザーは、このようなローカル グループに割り当てることができます。

### IBM i

インストール後、IBM i が IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の [セキュリティ プロバイダ] に表示されます。IBM i セキュリティ プロバイダを設定するには、以下の設定の値を指定します。

- **有効:** IBM i システムをセキュリティ プロバイダとして使用するかどうかを指定します。

- **IBM i サーバー:** IBM i システムへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレスです。Enterprise Identity Management (EIM) とともに IBM i セキュリティ プロバイダを使用して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services へのシングル サインオンを有効化する場合、この値は EIM 対象レジストリ値に一致する必要があります。EIM 対象レジストリ値がホストの完全修飾名である場合、完全修飾ホスト名を入力してください。
- **ユーザー プロファイル:** IBM i システムでディレクトリ検索に使用されるユーザー プロファイル。
- **パスワード:** 指定した IBM i プロファイルのパスワード。セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (\*) 形式で表示されます。値が正しいかどうか確認するために、両方のパスワード フィールドに値を入力してください。
- **[EIM ルックアップの有効化]:** IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで有効化されたシングル サインオンの場合、Enterprise Identity Management が有効化されていることを示します。
- **EIM サーバー:** Enterprise Identity Management のホスト URL。
- **EIM ユーザー:** Enterprise Identity Management のホスト ログインのユーザー名。
- **EIM パスワード:** 指定した Enterprise Identity Management ユーザーのパスワード。

注：任意の IBM i ユーザー プロファイルをディレクトリ検索に使用できますが、表示されるプロフィール一覧は、検索に使用するプロフィールの権限に基づいてフィルタ処理されます。**QSECOFR** レベルのユーザーを指定すると、システムのプロファイルがすべて表示されます。権限が少ないユーザーを使用すると、ユーザー プロファイルのセキュリティ設定に基づいて、表示されるプロフィールの数が少なくなります。

### IBM i ユーザーとグループ権限

IBM i ユーザー プロファイルがグループとしての使用を目的としている場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 権限が割り当てられてから、その他の IBM i プロファイルをそのプロフィールに割り当てる必要があります。そうでない場合、権限がその他の IBM i ユーザーに割り当てられることはありません。たとえば、IBM i ユーザーの `test` が作成され、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の権限が割り当てられ、その後グループとして IBM i ユーザー `test2` に割り当てられた場合、`test2` は IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の `test` の以前の権限を継承しません。ただし、`test` の IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 権限が定義される前に `test2` が `test` と関連付けられている場合、`test2` は権限を継承します。

## IBM ShowCase および JD Edwards (JDE) ユーザー

IBM® ShowCase® を使用する場合、セキュリティ プロバイダおよび IBM SPSS Collaboration and Deployment Services との統合に関する追加情報に関する製粉付属のマニュアルを参照してください。

## JDE アプリケーション ユーザー

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services - Server Adapter for ShowCase をインストールすると、JDE Application User セキュリティ プロバイダを使用して Deployment Manager および Deployment Portal のエンド ユーザーは Oracle JDE アプリケーション ユーザーでログインすることができます。詳細については、『IBM® ShowCase® 管理者ガイド』を参照してください。

# ブラウザベース IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のセキュリティ プロバイダ

[セキュリティ プロバイダ] ページにアクセスするには、次の手順を実行します。

- ▶ ナビゲーション リストで [セキュリティプロバイダ] をクリックします。[セキュリティ プロバイダ] ページが表示されます。

使用されているセキュリティ プロバイダを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ セキュリティ プロバイダの横のチェック ボックスをオン（有効にする場合）またはオフ（無効にする場合）にします。
- ▶ [設定] をクリックします。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初に作成されたセキュリティ プロバイダだけがリストに表示されます。

## セキュリティ プロバイダの有効化と無効化

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初に作成および設定されたセキュリティ プロバイダだけがブラウザに表示されます。各種類のセキュリティ プロバイダには、使用する認証および承認システムに応じた設定がありますが、新しいセキュリティ プロバイダを設定または設定全体を変更するには、Deployment Manager クライアントを使用します。

各セキュリティ プロバイダの隣のチェックボックスを使用して、[設定] をクリックすることにより、使用可能なセキュリティ プロバイダを有効または無効にすることができます。

## ネイティブ (ローカル)

ネイティブ (ローカル) セキュリティ プロバイダは、システムに固有であり、削除することはできません。ネイティブ セキュリティ システムにユーザーを追加することはできますが、これを無効にすることはできません。

## Active Directory

特定の Active Directory の設定を構成するには、[Active Directory (LDAP 経由)] チェック ボックスの右にある **[設定の編集]** をクリックします。現在の設定の一部が表示されます。Active Directory セキュリティ プロバイダは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初に設定されている場合にのみ使用可能です。詳細は、[Active Directory](#) を参照してください。

## Active Directory (ローカル オーバーライド)

[Active Directory (ローカル オーバーライド)] セキュリティ プロバイダ オプションを選択すると、Active Directory に加えてローカル プリンシパル フィルタの追加オプションを使用したり、ローカル グループを指定したりできます。特定の Active Directory (ローカル オーバーライド) の設定を構成するには、[Active Directory (ローカル オーバーライド)] チェック ボックスの右にある **[設定の編集]** をクリックします。現在の設定の一部が表示されます。ほとんどの設定は Active Directory の設定に対応しています。ただし、次の 2 つのオプションも使用できます。Active Directory (ローカル オーバーライド) セキュリティ プロバイダは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初に設定されている場合にのみ使用可能です。

- **許可ユーザー**：許可ユーザーを使用する (true) か使用しない (false) かを指定します。許可ユーザーを使用すると、ユーザーを定義するローカルのリストに含まれているユーザーだけを Active Directory で認証できます。
- **拡張グループ**：拡張グループを使用するかどうか (true または false) を指定します。拡張グループを使用すると、Active Directory ユーザーのグループを定義できます。Active Directory ユーザーは、このようなローカル グループに割り当てることができます。

## IBM i

IBM i に IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository をインストールすると、IBM i ユーザー プロファイル ディレクトリは、リポジトリ ログインの認証に使用されます。特定の IBM i 設定を表示するには、[IBM i] チェック ボックスの右にある [設定の表示] をクリックします。現在の設定の一部が表示されます。IBM i セキュリティ プロバイダは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初にインストールおよび設定されている場合のみ使用可能です。

- **IBM i サーバー:** IBM i システムへのパス。通常は、DNS の解決可能な名前または IP アドレスです。Enterprise Identity Management (EIM) とともに IBM i セキュリティ プロバイダを使用して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services へのシングル サインオンを有効化する場合、この値は EIM 対象レジストリ値に一致する必要があります。EIM 対象レジストリ値がホストの完全修飾名である場合、完全修飾ホスト名を入力してください。
- **ユーザー プロファイル:** IBM i システムでディレクトリ検索に使用されるユーザー プロファイル。
- **パスワード:** 指定した IBM i プロファイルのパスワード。セキュリティのため、指定されたドメイン ユーザーのパスワードは、ハッシュ化されたアスタリスク (\*) 形式で表示されます。
- **[EIM ルックアップの有効化]:** IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで有効化されてシングル サインオンの場合、true の値は Enterprise Identity Management が有効化されていることを示します。
- **EIM サーバー:** Enterprise Identity Management のホスト URL。
- **EIM ユーザー:** Enterprise Identity Management のホスト ログインのユーザー名。
- **EIM パスワード:** 指定した Enterprise Identity Management ユーザーのパスワード。

注：任意の IBM i ユーザー プロファイルをディレクトリ検索に使用できますが、表示されるプロファイル一覧は、検索に使用するプロファイルの権限に基づいてフィルタ処理されます。QSECOFR レベルのユーザーを指定すると、システムのプロファイルがすべて表示されます。権限が少ないユーザーを使用すると、ユーザー プロファイルのセキュリティ設定に基づいて、表示されるプロファイルの数が少なくなります。

## OpenLDAP

特定の OpenLDAP 設定を表示するには、[OpenLDAP] チェック ボックスの右にある [設定の表示] をクリックします。現在の設定の一部が表示されます。OpenLDAP セキュリティ プロバイダは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager クライアントで最初に設定されている場合にのみ使用可能です。詳細は、[OpenLDAP](#)を参照してください。

# シングル サインオン

シングル サインオン (SSO) は、アクセス コントロールの方法の 1 つで、ユーザーは 1 回ログインすると、再度ログインすることなく複数のソフトウェア システムのリソースにアクセスを取得することができます。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、**Kerberos** セキュリティ プロトコルに基づいて、外部ディレクトリ サービスを経由してユーザーの認証を最初に行い、その資格情報を IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal などすべての IBM SPSS Collaboration and Deployment Services アプリケーションまたはポータルサーバーに継続して使用することによって、シングル サインオンの機能を提供しています。追加の認証は必要ありません。

シングル サイン オン構成は、Deployment Manager の [サーバー管理] タブで実行されます。シングル サインオンを有効化するには、さまざまな前提条件を満たす必要があります。詳細は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールおよび構成マニュアルを参照してください。

## シングル サインオンの設定

- ▶ [ツール] メニューから [サーバー管理] を選択して IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーにログインし、[シングル サインオン] アイコンをダブルクリックします。シングル サインオン プロバイダ エディタが開きます。

図 8-1  
シングル サインオン プロバイダ エディタ  
シングル サイン オンプロバイダ構成

	<input type="checkbox"/> 有効
セキュリティプロバイダ	Active Directory
KDC ホストアドレス	kdc.mycompany.com
Kerberos Realm	MYCOMPANY.COM
ホストアドレス	server.mycompany.com
Kerberos サービスプリンシパル	HTTP/server.mycompany.com@MYCOMPANY.COM
Kerberos サービスプリンシパル パスワード	***** *****
Kerberos キーテーブル URL	FILE:C:/keytab/krb5.keytab
JAAS 構成ファイル	#USE_SUPPLIED#

- **有効**: シングル サインオン プロバイダを使用するかどうかを指定します。
- **セキュリティプロバイダ**: Windows Active Directory など、構成された外部セキュリティ プロバイダ。ローカル セキュリティ プロバイダを選択することはできません。
- **Kerberos Key Distribution Center ホスト アドレス**: Kerberos ドメイン コントローラ ホストの完全修飾名。Windows Active Directory の場合、Microsoft Active Directory Services がインストールされているホストの名前になります。
- **Kerberos Realm**: Kerberos 方式。Active Directory の場合、ドメイン名となります。
- **ホスト**: IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository ホストの名前。たとえば、`repositoryhost.mycompany.com` となります。
- **Kerberos サービス プリンシパル名**: Kerberos サービス プリンシパルのユーザー名です。
- **Kerberos サービス プリンシパル パスワード**: ユーザーの Kerberos サービス プリンシパルのパスワード。
- **Kerberos キー テーブル URL**: Kerberos プリンシパル認証のためのキータブ ファイルの URL。
- **JAAS 構成ファイル**: IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ホスト ファイル システムの JAAS (Java 認証・承認サービス) 構成ファイルのパス。指定されている場合は、デフォルトの JAAS 構成を上書きします。アプリケーション サーバーに応じて、SSO に対応するように JRE を設定する必要があります。

# リポジトリ構成

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、ユーザー インターフェイスに使用されるテンプレートや、[ログイン] 画面に表示されるメッセージなど、コンポーネントを構成するためのさまざまなオプションを備えています。

これらのオプションにアクセスするには、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で次の手順を実行します。

- ▶ ナビゲーション リストで **[構成]** をクリックします。**[構成]** ページが表示されます。
- ▶ **[構成]** リストで、構成するプロパティに対応するリンクをクリックします。

プロパティの各構成画面には、**[設定]** と **[デフォルトの使用]** の 2 つのボタンがあります。構成が終了したら、**[設定]** ボタンをクリックして新しい設定内容を有効にします。値を元のシステム構成に戻すには、**[デフォルトの使用]** ボタンをクリックします。

注： 下記に表示された特定の構成オプションは、オプションの IBM SPSS Collaboration and Deployment Services コンポーネントまたは IBM® SPSS® Statistics、または IBM® ShowCase® など、その他の IBM Corp. 製品向けのオプションです。コンポーネントがインストールされていない場合、オプションは無効です。

## Administrator

**[構成]** ページの **[管理者]** オプションでは、管理ユーザー インターフェイスの生成に使用するテンプレートの場所を指定できます。デフォルトでは、インストール プログラムによって設定されたパスが使用されます。

テンプレート ディレクトリを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ **[構成]** リストの **[管理者]** で **[テンプレート]** をクリックします。現在のテンプレート ディレクトリが **[テンプレート]** テキスト ボックスに表示されます。
- ▶ **[テンプレート]** テキスト ボックスに、使用するテンプレートが含まれているディレクトリの新しいパスを入力します。

- ▶ [設定] をクリックします。指定したパスは、システムがテンプレートにアクセスするためのデフォルトのパスになります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトのディレクトリに戻ります。

## BIRT Report Designer for IBM SPSS

BIRT Report Designer 構成オプションを使用して、レポートの処理および表示に影響を与える設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの BIRT Report Designer for IBM SPSS で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-1  
BIRT Report Designer for IBM SPSS 構成オプション

名前	説明	設定
BIRT リンク リソースの場所	スタイルシートや画像のカスケードなど、レポートの外部リソースが保存されるサーバー ファイル システムのディレクトリ。	外部リソースを含むディレクトリの完全パス。システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトのディレクトリに戻ります。
SVG グラフを有効化	SVG グラフ出力を有効化するかどうかを指定します。SVG 出力が必要で、レポート出力を表示するブラウザが SVG 対応である場合にのみ、この設定を選択します。オフの場合、グラフを生成するレポートでは、SVG ではなく PNG 画像形式を使用します。	デフォルトはオフです。

## キャッシュ プロバイダ

[キャッシュ プロバイダ] オプションでは、データ キャッシュ プロバイダ クラスを指定できます。デフォルトでは、Ehcache (com.spss.cache.service.ehcache.EhcacheProvider) が使用されます。クラスタ化された IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services インストールでは、追加のオプションを使用して、マルチキャスト グループを使用するクラスタのピアを自動検出する Ehcache を構成できます。

または、Oracle Coherence を IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository キャッシュとして使用できます。Oracle Coherence を有効化する手順は、次のとおりです。

- ▶ Oracle から Coherence コンポーネントを取得し、ライセンスを取得します。Coherence JAR ファイルとすべての要件の場所は、<IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のインストールの場所>/components/cache-provider です。
- ▶ IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストール ディスクの optional フォルダから coherence\_cache\_provider.package をインストールします。
- ▶ com.spss.cache.service.coherence.CoherenceCacheProvider を、構成設定のキャッシュ プロバイダとして指定します。  
設定を変更するには、[構成] リストのキャッシュ プロバイダで対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

名前	説明	設定
キャッシュ プロバイダ クラス名	キャッシュ プロバイダ クラス名。	クラス名。
マルチキャスト グループ アドレス	Ehcache のマルチキャスト グループ アドレス。	有効なネットワークアドレス。
マルチキャスト グループ ポート	Ehcache の、マルチキャスト ハートビート トラフィックの専用ポート。	有効なポート番号。
デフォルト値の上書き	Ehcache でオプションが有効になっている場合、プロバイダはマルチキャスト グループ アドレス およびマルチキャスト グループ ポートの値を使用して、デフォルトを上書きします。	デフォルトはオフです。

## Coordinator of Processes

Coordinator of Processes 設定オプションを使用して、Coordinator of Processes の接続要求および保守の活動の有効期限の制限に影響を与える設定を指定することができます。設定を変更するには、[構成] リストの [Coordinator of Processes] の下にある対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-2  
Coordinator of Processes 構成オプション

名前	説明	設定
保留接続タイムアウト	保留中の接続要求の有効期限のタイムリミット。対象となるサーバーが指定した時間間隔内に応答しない場合、Coordinator of Processes が接続要求を却下します。	整数値。デフォルトは 5 秒です。
Coordinator of Processes メンテナンス プロバイダの有効化	Coordinator of Processes のメンテナンス活動を有効または無効する	デフォルトはオンです。

## カスタム ダイアログ

可能であれば、IBM® SPSS® Statistics カスタム ダイアログ構成オプションを使用すると、カスタム ダイアログを実行する設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [カスタム ダイアログ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-3  
カスタム ダイアログ構成オプション

名前	説明	設定
有効なファイル サーバーの参照	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、指定されたファイル サーバーの SPSS Statistics データセットの参照が有効化されるかどうかを定義します。	有効にするには、オンにします。
ファイル サーバーの場所	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、SPSS Statistics の参照に使用するファイル サーバー (リポジトリの外部) の場所。ファイル サーバーの参照が有効で、場所が指定されていない場合、指定された SPSS Statistics サーバーのファイル システムが使用されます。	値は、ディレクトリのネットワーク パスまたは絶対パスとなります。
ファイル サーバー名	SPSS Statistics データセットの参照に使用するファイル サーバーに関連する名前。	文字列値。値が指定されていない場合、「ファイル サーバー」という名前が使用されます。

名前	説明	設定
リポジトリ参照の有効化	カスタム ダイアログのデータセットを選択する場合、リポジトリの SPSS Statistics データセットの参照が有効化されるかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
SPSS Statistics サーバー	カスタム ダイアログ シンタックスの実行に使用する SPSS Statistics サーバーのリポジトリ名または URI。代わりに、サーバー クラスタの名前または URI を指定することができます。その場合、サーバーは可用性に基づいてクラスタから自動的に選択されます。サーバーが指定されない場合、検出された最初の有効なサーバー クラスタ定義の使用できるサーバーを使用して、デフォルトのサーバーを選択します。有効なクラスタがない場合、検出された最初の有効なサーバーを使用します。	サーバー オブジェクトのリポジトリ名または URI に対応する文字列値 (例: <code>spsscr://?id=0a30063bc975ede400</code> )。URI は、 でオブジェクト プロパティにあります。詳細は、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のマニュアルを参照してください。
SPSS Statistics サーバー資格情報	カスタム ダイアログ シンタックスの実行時、SPSS Statistics サーバーへの接続に使用する資格情報。注: IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の使用に Active Directory が設定されている場合、資格情報は必要ありません。	資格情報オブジェクトのリポジトリ名または URI に対応する文字列値。
SPSS Statistics サーバー セッション タイムアウト	ユーザーのアクティビティがない SPSS Statistics サーバーへの接続を維持するタイムアウト値 (分) を定義します。	整数値。デフォルトは 20 分です。

## Data Service

Data Service 構成オプションを使用して、Data Service 接続を最適化するためのパラメータを指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [データ サービス] に対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-4  
Data Service の構成オプション

名前	説明	設定
アクティブ接続最大数	有効な接続の最大数。	整数値。デフォルトは 5 です。
アイドル コネクタの最大数	アイドル状態の接続の最大数。	整数値。デフォルトは 5 です。

## Deployment Manager

[構成] ページの [Deployment Manager] オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager とリポジトリの間の通信のプロトコル タイムアウトを指定できます。Deployment Manager クライアントがリポジトリ サーバーを待機する秒数を指定します。サーバー トランザクションでタイムアウト エラーが発生した場合は、より大きな値を使用します。

プロトコル タイムアウトを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [Deployment Manager] で [プロトコル タイムアウト] をクリックします。現在の値が表示されます。
- ▶ [プロトコル タイムアウト] テキスト ボックスに、適切な秒数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

## Deployment Portal

[構成] ページの [Deployment Portal] オプションでは、Web ベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal アプリケーションの認証設定やレポート タイムアウト制限を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの Deployment Portal で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-5  
IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Portal 構成オプション

名前	説明	設定
構成済みの認証条件クラス	Deployment Portal アプリケーションに認証情報を提供するために使用する Java クラス名。デフォルトでは com.spss.er.internal.configuration.ConfiguredAuthenticationImpl になります。これは、アプリケーション サーバーのクラスパスで設定されます。クラスは、Deployment Portal で提供される認証基準インターフェイス (com.spss.er.internal.configuration.ConfiguredAuthenticationInterface.java) に準拠する必要があります。	クラス名。
構成済みの認証条件を使用する	ユーザーが構成済み認証基準を使用して、[ログイン] 画面を省略して Deployment Portal に認証情報を渡すことができるようにします。	デフォルトはオフです。

## Deployment Portal スコアリング

[バッチ スコアリングの行制限] 構成オプションを使用して、選択したデータ セットからバッチ スコアリングできる最大行数を指定することができます。

行制限を変更するには、次の手順を行います。

- ▶ [構成] リストの [Deployment Portal スコアリング] で、[バッチ スコアリングの行制限] をクリックします。現在の値が表示されます。
- ▶ [バッチスコアリングの行制限] テキスト ボックスに、適切な分数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

## Enterprise View

Enterprise View 構成オプションを使用して、IBM® SPSS® Statistics Data File Server を使用するための設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの Enterprise View で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-6

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Enterprise View 構成オプション

名前	説明	設定
最大 CQL クエリー列	CQL (Common Query Language) クエリーが返す最大行数。	整数値。デフォルトは 2 です。
SPSS Statistics データファイルの追加サーバー	この設定は、SPSS Statistics データファイルからメタデータを取得するために使用できる追加の SPSS Statistics データファイルを指定します。	host:port: サーバーのポート (例: server2:18886;server3:18886)。
SPSS Statistics データファイル負荷バランス	負荷バランシング設定は、SPSS Statistics データファイルからメタデータを取得する際、複数の SPSS Statistics データファイルサーバーがフェイルオーバーモードで使用されるか、または負荷バランシングモードで使用されるかを設定します。フェイルオーバーモードの場合、リストのサーバーが順番に使用されます。最初のサーバーが機能しない場合、2 番目のサーバーが使用されます。負荷バランシングをオンにすると、使用できるサーバーのいずれかが無作為に選択されます。追加の SPSS Statistics データファイルサーバーが指定されない限り、この設定は無効です。	デフォルトはオンです。

名前	説明	設定
SPSS Statistics Data File Server ホスト	SPSS Statistics データファイルにアクセスするために使用する SPSS Statistics Data File Server の名前。ホストが指定されていない場合、ローカルホストが使用されます。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SPSS Statistics Data File Server ポート	SPSS Statistics Data File Server のポート番号が指定されていない場合、ローカルホストが使用されます。	有効なポート番号。
SPSS Statistics Data File Server セキュア	SPSS Statistics Data File Server と通信する場合に SSL を使用するかどうかを示すインジケータ。デフォルト値 false は、セキュア ソケットが使用されていないことを示します。	true または false。デフォルトは false です。

## ヘルプ

[構成] ページの [ヘルプ] オプションでは、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のドキュメント コンポーネントの場所を指定できます。デフォルトでは、インストールプログラムによって設定されたパスが使用されます。[ヘルプ](#) 表は、可能な設定について説明しています。

テーブル 9-7  
ヘルプ構成オプション

名前	説明	設定
Guide Directory	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のガイドおよびマニュアルの0場所を指定します。	ガイドを含むディレクトリのパス
Help Directory	Deployment Manager のヘルプ システムの場所を定義します。	ヘルプ システムを含むディレクトリのパス

ヘルプ設定を変更するには、以下のステップを実行します。

1. [構成] リストで、[ヘルプ] グループから変更する設定をクリックします。現在の値が表示されます。
2. 新しい値を入力します。
3. [設定] をクリックします。指定した値がその設定の現在の値となります。

システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

## 通知

[構成] ページの [通知] オプションでは、SMTP メール設定を指定したり、通知サービスのパフォーマンス チューニングを有効にしたりできます。詳細は、13 章 p.123 [通知サービス パフォーマンスの最適化](#) を参照してください。RSS (Really Simple Syndication) などのフィードの共同設定に指定することもできます。

設定を変更するには、[構成] リストの [通知] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-8  
通知構成オプション

名前	説明	設定
バイナリ コンテンツの有効化	通知メッセージで E メール添付などのバイナリ コンテンツを有効にします。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタのコア プール サイズ	アイドル状態でもイベント コレクタ プールに保持するスレッドの数。	整数値。デフォルトは 16 です。
異なる受信者	このチェック ボックスをオンにすると、一意の受信者だけを対象に通知メッセージが生成されます。オフにすると、重複したアドレスは削除されず、受信者は指定した通知イベントに一致するすべての個別の登録と通知により生成されたメッセージを受け取るようになります。このオプションは、デバッグを行う場合を除き変更しないでください。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタの有効化	通知イベントをサービスで処理するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
イベント コレクタ プールのキープ アライブ時間	スレッド数がイベント コレクタ プールのスレッドのコア数より多い場合、超過したアイドル状態のスレッドが終了するまでに新しいイベントを待機する最大時間 (秒)。	整数値。デフォルトは 32 です。

名前	説明	設定
イベント継承の有効化	派生した通知イベントをサービスで処理するかどうかを定義します。	デフォルトはオフです。
イベント ノイズ フィルタ	関連する通知プロバイダや登録者に一致した登録情報を持たない通知イベントを処理の早い段階で除外します。	true または false。デフォルトは true です。
イベント ノイズ フィルタ キャッシュ	イベント ノイズ フィルタ処理中に使用する LRU キャッシュの最大サイズを定義します。	整数値。デフォルトは 2048 です。
イベント ノイズ フィルタ 文字列キー	通知イベントの識別に、ハッシュ コードの代わりに文字列を使用します。	デフォルトはオフです。
イベント キュー記憶域のコミット バッチ サイズ	着信通知イベントの永続記憶域のコミット バッチ サイズを設定します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 32 です。
イベント コレクタの最大プール サイズ	イベント コレクタ プールに保持できるスレッドの最大数。	整数値。デフォルトは 32 です。
メッセージ バスの有効化	通知メッセージを JMS メッセージ バスに送信するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
メッセージ バス フィルタの有効化	関心のある通知のみを JMS メッセージ バスに送信するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
通知監査の有効化	通知サービスが監査サービスと連携するかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
通知キャッシュの配布	通知サービスが配布キャッシュを使用するかどうかを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	デフォルトはオフです。
通知キュー	バックグラウンド スレッドが処理できるようになるまで、着信通知イベントをキューに格納します。	true または false。デフォルトは true です。

名前	説明	設定
永続イベント キューの有効化	消費されるメモリーを最小にするために着信通知イベントを一時的にディスク上の永続記憶域に保持するかどうかを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	デフォルトはオフです。
永続イベント キュー サイズ	着信通知イベントの永続記憶域の最大サイズ (MB) を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 8 MB です。
永続イベント キューのタイプ	永続イベント キューのストレージタイプを定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	DISK または JMS。デフォルトは DISK です。
永続 JMS 接続ファクトリ	受信通知イベントの継続に使用する JMS 接続ファクトリの JNDI 名を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
永続 JMS キュー	受信通知イベントの継続に使用する JMS キューの JNDI 名を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
個別登録を優先	このチェック ボックスをオンにすると、登録において、ユーザーの個別の登録設定と管理者によって作成された通知設定が同一になっているものが優先的に処理されます。このチェック ボックスをオフにすると、処理の順序が逆になります。	デフォルトはオンです。

名前	説明	設定
SMTP 8 ビット MIME	true に設定したとき、サーバーが <b>8BITMIME</b> エクステンションをサポートしている場合は、”quoted-printable” または “base64” エンコーディングが使用されたメッセージのテキスト部分は、(8 ビット テキストの RFC2045 ルールに従っている場合) “8 ビット” エンコーディングに変換されます。	true または false。デフォルトは false です。
SMTP 認証	true の場合、 <b>AUTH</b> コマンドを使ったユーザー認証が試行されます。	true または false。デフォルトは false です。
SMTP 接続タイムアウト	ソケット接続のタイムアウト値 (ミリ秒)。	整数値。デフォルトではタイムアウトはありません (無制限)。
SMTP 配布の有効化	チェックボックスがオンの場合、SMTP を介して通知メッセージを配布できます。リポジトリ管理者は、サーバーで生成されるすべての電子メールが送信されないよう、SMTP 配布を無効にできます。生成された E メール メッセージがリポジトリに保持されないため、SMTP 配布が無効になっていると、すべてのメッセージが失われることに注意してください。	デフォルトはオンです。
SMTP DSN 通知	DSN の <b>RCPT</b> コマンドに対する <b>NOTIFY</b> オプションです (RFC3461 の「Delivery Status Notifications」)。	<b>NEVER</b> または <b>SUCCESS</b> 、 <b>FAILURE</b> 、 <b>DELAY</b> の組合せ (コンマで区切り)。
SMTP DSN RET	DSN の <b>MAIL</b> コマンドに対する <b>RET</b> オプションです (RFC3461 の「Delivery Status Notifications」)。	<b>FULL</b> または <b>HDRS</b> 。
SMTP EHLO	false の場合は、 <b>EHLO</b> コマンドでのサインオンは試行されません。	true または false。デフォルトは true です。
送信元 SMTP E メール アドレス	通知の E メールに使用する送信者または返信先のアドレス。	既存の SMTP の E メールアドレス。

名前	説明	設定
SMTP ホスト	Eメールの送信に使用される SMTP サーバーの IP アドレスまたはホスト名。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SMTP ローカル ホスト	SMTP HELO または EHLO コマンドで使用するローカル ホスト名。デフォルトでは <code>InetAddress.getLocalHost().getHostName()</code> になります。通常、JDK とネーミング サービスが適切に構成されていれば、設定の必要はありません。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
SMTP パスワード	SMTP 認証のパスワード。	マスクされたパスワード。
SMTP ポート	送信メールに使用されるポート。	有効なポート番号。デフォルトは 25 です。
SMTP QUIT	true に設定した場合、QUIT コマンドの応答が待機されます。false に設定した場合、QUIT コマンドが送信されると、接続が直ちにクローズされます。	true または false。デフォルトは false です。
SMTP SASL 方式	DIGEST-MD5 認証に、SASL (Simple Authentication and Security Layer) 方式が使用されます。	展開またはサーバー、あるいはその両方に固有の、大文字と小文字が区別される文字列。プリンシパル名を選択する方式またはドメインを識別します。
SMTP 部分送信	true に設定した場合、メッセージに指定された複数のアドレスのうち一部のアドレスが無効でも、メッセージが送信されます。一部のアドレスで発生したエラーは、 <code>SendFailedException</code> で報告されます。false に設定した場合、無効な受信者アドレスが 1 つでも含まれていると、メッセージはいずれのアドレスにも送信されません。	true または false。デフォルトは false です。
SMTP タイムアウト	ソケット入出力のタイムアウト値 (ミリ秒)。	整数値。デフォルトではタイムアウトはありません (無制限)。

名前	説明	設定
SMTP 転送プロトコル	メッセージ転送プロトコル。	smtp または smtps。デフォルトは smtp で、SSL/TLS を使用して該当するサービスに接続するには smtps を使用します。
SMTP デバッグ モードの有効化	デバッグ モードのオンとオフを切り替えます。	true または false。デフォルトは false です。
SMTP ユーザー	SMTP のデフォルト ユーザー名。	ユーザー名です。
登録識別キャッシュ	登録識別に使用する LRU キャッシュの最大サイズを定義します。	整数値。デフォルトは 2048 です。
共同エン트리 キャッシュ TTL	共同フィード エントリがキャッシュに保存される期間 (分) を定義します。RSS などのフィードです。	整数値。デフォルトは 15 分です。
共同エン트리最大値	RSS など、共同フィードのエントリの最大数を定義します。	整数値。デフォルトは 256 です。
共同エン트리永続 TTL	共同エントリが永続ストレージに保存される期間 (日数) を定義します。RSS などのフィードです。	整数値。デフォルトは 7 日間です。
共同フィード タイプ	共同フィードの形式を定義します。	RSS_2_0 または ATOM_1_0。デフォルトは RSS_2_0 です。
共同配布の有効化	XML フィードの共同配布を有効にします。	デフォルトはオンです。
共同 Vacuumer の有効化	共同 Vacuumer を有効にします。共同 Vacuumer はシステム化が期限の切れた共同エントリを削除します。[共同 Vacuumer の頻度] オプションで指定した間隔に基づいて自動的に操作し、[共同エン트리永続 TTL] の値を使用して、期限の切れたデータおよび削除できるデータを指定します。Vacuumer を指定しない場合、アプリケーションのパフォーマンスが低下します。このオプションを無効にすることはお勧めしません。	デフォルトはオンです。

名前	説明	設定
共同 Vacuumer の頻度	共同 Vacuumer が実行する頻度 (分) を定義します。変更を有効にするには、通知サービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 60 分です。
共同 Vacuumer マスタ	共同 Vacuumer がサーバークラスタのマスタ ノードにのみ実行されるかどうかを定義します。	デフォルトはオフです。
共同 Vacuumer クォータ	共同 Vacuumer の 1 回の実行中に削除する共同エントリの数を制限します。	整数値。デフォルトは 4096 です。
URL データ ソースのディスク キャッシュ サイズ	通知イベントの一部として送信されるバイナリ コンテンツ (添付) の最大ディスク キャッシュ サイズ。	整数値。デフォルトは 64 です。

## ページャー

[ページャー タイムアウト] 構成オプションを使用して、ページ化されたデータを使用できるの時間 (分) を指定します。この値を変更すると、ペーシング システムのパフォーマンスに影響を与えます。新しいオプションの値を有効にするには、リポジトリを再起動する必要があります。

ページャー タイムアウトを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [ページャー] で [ページャー タイムアウト] をクリックします。現在の値が表示されます。
- ▶ [ページャー タイムアウト] テキスト ボックスに、適切な分数を入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定した値がタイムアウト値になります。
- ▶ システム定義のデフォルトに戻すには、[デフォルトの使用] をクリックします。システムのインストール時に設定されたデフォルトの値に戻ります。

## プロセス管理

[構成] ページの [プロセス管理] オプションでは、ジョブ実行設定を指定するだけでなく、Web サービス エンドポイントも定義できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [プロセス管理] の下にある対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-9  
プロセス管理構成オプション

名前	説明	設定
カレンダー プール	カレンダー スケジュールに従ったリポジトリのスキャンを繰り返す場合に、プロセス管理サーバーが待機する期間。カレンダー スケジュールは、スケジュールの時刻/日付に基づいて実行されます。	秒単位の期間を示す整数値。デフォルトは 60 です。
JMS 接続ファクトリ名	JNDI サービスに登録された JMS 接続ファクトリの名前。適切な値については、アプリケーションサーバーのドキュメンテーションまたは JMS サーバーのドキュメンテーションを参照してください。	デフォルトは <b>ConnectionFactory</b> です。名前は、関連付けられたメッセージング プロバイダ内で一意である必要があります。
JMS ネーミング ファクトリ	JMS Java クラス。たとえば、JBoss アプリケーションサーバーのネーミング ファクトリは <code>org.jnp.interfaces.NamingContextFactory</code> です。このオプションは、すべてのメッセージベース ジョブのすべてのメッセージが 1 つのリモートサーバーから送信される場合に設定できます。	デフォルト値は、ローカル アプリケーションサーバーの JMS ネーミング ファクトリのクラス名です。
JMS ネーミング サービス	ネーミング サービスの場所 (URI)。たとえば、JBoss アプリケーションサーバーのネーミング ファクトリはこのオプションは、 <code>jnp://localhost:1099</code> です。すべてのメッセージベース ジョブのすべてのメッセージが 1 つのリモートサーバーから送信される場合に設定できます。	デフォルト値は、ローカル アプリケーションサーバーの JMS ネーミング サービスの URI です。
JMS プロセス イベント接続ファクトリ	プロセス イベント キューに使用する JMS ファクトリのクラス名。	デフォルト値は、ローカル アプリケーションサーバーの JMS ネーミング ファクトリのクラス名です。
JMS プロセス イベント キュー	JMS プロセス イベント キューの JNDI 名。	デフォルト値は、ローカル アプリケーションサーバーの JMS プロセス イベント キューです。

名前	説明	設定
ジョブ履歴の制限	ジョブの各バージョンに保存するジョブ履歴エントリの最大数。上限に達すると、最も古いジョブ履歴エントリが新しいエントリで置き換えられます。	整数値。デフォルトは 10 です。
最大繰り返し回数	繰り返しジョブ ステップの繰り返しの最大回数。	整数値。デフォルトは 250 です。
ポーリング メッセージ	リポジトリのスキャンを繰り返すときに、プロセス管理サーバーが待機する時間 (秒)。スキャンにより、アクティブ化するメッセージ ベースのスケジュールが取得されます。	整数値。デフォルトは 120 です。
プロセス通知の有効化	プロセス管理サーバーが通知サーバーと連動する必要があるかどうかを指定します。	true または false。デフォルトは true です。
期限切れの送信アーティファクトの削除	期限切れになったときの処理しりリソースを送信によって作成されたアーティファクトをリポジトリから削除するかどうかを示します。	デフォルトはオンです。
廃止されたジョブ履歴の削除	廃止されたジョブ履歴を削除するかどうかを示します。	デフォルトはオンです。
送信済みアーティファクトの有効期限	ジョブなど送信済みアーティファクトの有効期間 (日単位)。	整数値。デフォルトは 5 です。
送信済みアーティファクトのタイムスタンプ	自動的に生成された送信済み作業フォルダの名前に使用されるタイムスタンプの形式。	年、月、日、時、分、秒の形式は、 yyyy. MM. dd. hh. mm. ss. SSS です。
タイムスタンプ フォルダの日付と時刻の形式。	タイムスタンプ フォルダの日付と時刻の形式。	年、月、日、時、分、秒の形式は、 yyyy. MM. dd. hh. mm. ss. SSS です。
タイムスタンプ フォルダの日付の形式。	タイムスタンプ フォルダの日付の形式。	月、日、年の形式は MM-dd-yyyy です。
タイムスタンプ フォルダの時刻の形式。	タイムスタンプ フォルダの時刻の形式。	時、分、秒の形式は、 HH. mm. ss です。

## 報告

レポート作成の設定オプションでは、ビジュアルライゼーション処理用にデバッグ情報を XML 出力として書き出すためのパスを指定できます。

重要: このオプションの値が指定されていない場合は、ビジュアライゼーション処理のデバッグ情報は生成されません。

ディレクトリ パスを変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [構成] リストの [レポート作成] の下の [ビジュアライゼーション ディレクトリの指定] をクリックします。現在のディレクトリが [ビジュアライゼーション ディレクトリの指定] テキスト ボックスに表示されます。
- ▶ ディレクトリの絶対パスの値を新たに入力します。
- ▶ [設定] をクリックします。指定したパスが、ビジュアライゼーション処理の情報を書き出すためのデフォルト ディレクトリになります。

## リポジトリ

[構成] ページの [リポジトリ] オプションでは、Web サービス エンドポイントを定義して、接続の有効性を切り替えることができます。設定を変更するには、[構成] リストの [リポジトリ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-10  
リポジトリ構成オプション

名前	説明	設定
カテゴリ値の制限	IBM® SPSS® Modeler ストリーム メタデータとして保存されるカテゴリ変数値の数を制限します。保存された値は、検索実行時に評価されるコンテンツに含まれます。リポジトリにストリームを保存し、検索を実行するのに必要な時間を削減するために必要です。	整数値。-1 の値は制限なしを示します。すべてのカテゴリ値はメタデータとして保存されます。値の保存を無効にするには、0 を入力します。保存される値を制限するには、1 以上を入力します。
コンテンツ リポジトリ エンドポイント	リポジトリの Web サービス エンドポイント アドレスを定義します。	URL:

名前	説明	設定
資格情報パスワードは暗号化する必要があります	資格情報パスワードは暗号化する必要があります。false の場合、パスワードを暗号化されていないテキストで渡すことができます。 注：SSL がすでに有効化され、非 SSL 展開でのみ使用して資格情報パスワードを暗号化する必要がある IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services の展開の場合、このオプションは無効となります。	デフォルトはオフです。
デフォルトの文字セット	サーバーのファイル システムとの間でダウンロード/アップロードされたコンテンツに使用されるデフォルトの文字、または Web ブラウザでリポジトリ ファイルを表示するときに使用されるデフォルトの文字を定義します。この値は、プレーン テキスト ファイルなどのコンテンツに文字セットを明示的に割り当てていない場合にのみ使用されます。	文字セットを指定する値 (UTF-8、ASCII など)。
パフォーマンス データをログに記録	true の場合、パフォーマンス データはログに記録されます。	デフォルトはオフです。
メッセージ バス通知の有効化	リポジトリ サーバーがメッセージ バスと連携するかどうかを指定します。	デフォルトはオンです。
Modeler パラメータ パスワード インジケータ	この文字列が含まれている SPSS Modeler のストリーム パラメータは、ストリームの実行をスケジュールするとき、UI に格納してマスクする場合に暗号化されます。	マスクされたパスワード。
オブジェクト キャッシュ: 有効	リポジトリ オブジェクトのキャッシュが有効かどうかを示します。選択されている場合、内部キャッシュを有効にするか、外部キャッシュの設定を指定します。	デフォルトはオフです。

名前	説明	設定
オブジェクト キャッシュ: 外部キャッシュ アドレス	外部キャッシュのアドレス。内部キャッシュが使用されない場合にのみ必要です。	有効なネットワークアドレス。
オブジェクト キャッシュ: 外部キャッシュ ポート	外部キャッシュのポート番号。内部キャッシュが使用されない場合にのみ必要です。	有効なポート番号。
オブジェクト キャッシュ: 内部使用	内部キャッシュを使用するかどうかを示します。	デフォルトはオフです。
インデックス再作成の キュー サイズ	リポジトリのインデックス再作成に使用するキューのサイズを定義します。インデックス再作成スレッド プール サイズ構成オプションで定義された値より大きな値である必要があります。	整数値。デフォルトは 15 です。
インデックス再作成ス レッド プール サイズ	リポジトリのインデックス再作成に使用するスレッド数を定義します。	整数値。デフォルトは 5 です。
削除されたリソースの削 除	削除された項目をリポジトリから削除するかどうかを示します。このオプションは常に選択されます。これは特殊な場合にのみオフにする必要があります(デバッグなど)。	デフォルトはオンです。
リポジトリ メンテナンス の有効化	リポジトリ メンテナンスサービスを有効または無効にします。	true または false。デフォルトは True です。
リポジトリ メンテナンス の頻度	リポジトリ メンテナンスサービスの頻度(分)を定義します。変更を有効にするには、リポジトリサービスを再起動する必要があります。	整数値。デフォルトは 60 分です。
リポジトリ メンテナンス マスタ	リポジトリ メンテナンスサービスがサーバー クラスタのマスタ ノードにのみ実行されるかどうかを定義します。	true または false。デフォルトは False です。

名前	説明	設定
リポジットリ メンテナンス クォータ	メンテナンスの間隔の時間（分）を定義し、システム リソースおよびアプリケーション処理時間を浪費せずにメンテナンス サービスを機能させることができます。負の値は、制限なしを示します。	整数値。デフォルトは 10 分です。
リポジットリ メンテナンス 開始日	リポジットリ メンテナンス サービスを開始する日時を定義します。無効な日付または現在の日付より前の日付が無視され、サービスをすぐに開始することはできません。指定した開始時刻を過ぎている場合、サービスは次の日のその時刻に開始します。	日付および時刻の形式は、[YYYY-MM-DD] HH:MM:SS です。
リポジットリ メンテナンス 開始（最大）	メンテナンス サービスを開始する最大遅延時間を定義します。	整数値。デフォルトは 30 分です。
リポジットリ メンテナンス 開始（最小）	メンテナンス サービスを開始する最小遅延時間を定義します。	整数値。デフォルトは 5 分です。
リポジットリ メンテナンス トランザクションの遅延	全体的なメンテナンスの統一や作業の遅延時間の割合を定義します。更新トランザクションの遅延が 75%（デフォルト）で、トランザクションに 1 秒かかった場合、3秒の遅延が続きます。	1 ~ 99 の整数値。デフォルトは 75 です。
リポジットリ メンテナンス トランザクション時間	各更新トランザクション（ミリ秒単位）の持続時間を定義し、保守サービス、システムリソースとアプリケーションの処理時間を過剰な負荷をすることなく機能させることができます。	整数値。デフォルトは 500 ミリ秒です。負の値は、制限なしを示します。
リポジットリ 通知の有効化	リポジットリ サーバーが通知サーバーと連動する必要があるかどうかを指定します。	デフォルトはオフです。

名前	説明	設定
リソース ロック	リソース ロックを有効にします。リソース ロックにより、複数のユーザーが同時にリソースを変更するのを防止します。リソース ロックが有効になっていると、ロックされているリソースは他のユーザーには読み取り専用に見えます。	デフォルトはオンです。
リソース転送ルックアップ テーブル	リソースの転送中に ID をルックアップするためのマッピングを実装する方法です。	DISK または MEMORY。
リソース転送のページ結果のキャッシュ サイズ	リソース転送中のページ結果保存用のキャッシュサイズ。リソース転送時にユーザーが個別に競合の解決を実行した場合、ユーザー インターフェイスに一度に表示できる数よりも多くの競合が表示されることがあります。結果のキャッシュのサイズによって、1つのセッションに対してキャッシュするページ数が決まります。ユーザーが個別の競合の解決を頻繁に利用する場合、キャッシュのサイズを増やすとパフォーマンスが向上することがありますが、キャッシュのサイズが増加するとメモリー消費量が増加します。	整数値。デフォルトは 5 です。
ストリーム プロパティの更新	使用できる場合、ファイルがリポジトリに公開される場合、ストリーム プロパティが更新されるかどうかを指定します。このオプションを無効にするとパフォーマンスが向上するため、無効にすることをお勧めします。	デフォルトはオンです。
サーバー実行ファイルの検証	サーバーの実行ファイルをリポジトリに保存する際に検証するかどうかを指定します。	デフォルトはオンです。

## Scoring Service

[スコアリング サービス] オプションでは、スコアリングの設定を指定できます。設定を変更するには、[構成] リストの [スコアリング サービス] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-11  
Scoring Service 構成オプション

名前	説明	設定
監査タイマーの時間	監査更新の間のミリ秒数。	整数値。デフォルトは 3600000 です。
デフォルトのログ記録先。	デフォルトのログ記録先。	スコアリングのログ記録用に JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
メトリック タイマーの時間	メトリック更新の間のミリ秒数。	整数値。デフォルトは 5000 です。
ホスト名の解決	スコアリング サービスがホスト名を解決する必要があるかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。
ワーカー プール最大サイズ	最大ワーカー プール サイズ。	整数値。デフォルトは 100 です。

## 検索

[構成] ページの [検索] オプションでは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の検索結果のページごとに表示するヒット件数や結果セットのサイズを指定したり、監査ビューで検索のログを記録するかどうかを指定したりできます。設定を変更するには、[構成] リストの [検索] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-12  
検索構成オプション

名前	説明	設定
検索の監査	監査ビューで各検索のログを記録します。 <a href="#">詳細は、15章 p.133 リポジトリの監査を参照してください。</a> このオプションを有効にすると、検索の処理速度が低下する場合があります。	デフォルトはオフです。
デフォルト ページ サイズ	1 ページあたりに表示する検索結果の件数。	整数値。デフォルトは 25 です。
最大行数	検索結果セットの最大行数。結果の数を無制限にする場合は -1 に設定します。それ以外の場合は、正の整数値を指定します (メモリー不足やクライアントのタイムアウトを回避するために、返される結果セットのサイズを制限します)。	整数値。デフォルトは -1 です。
検索メンテナンスの有効化	メンテナンス作業で検索サービスが有効になっているかどうかを定義します。	デフォルトはオンです。

## セキュリティ

[構成] ページの [セキュリティ] オプションでは、リポジトリのアクセスに関する設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [セキュリティ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-13  
セキュリティ構成オプション

名前	説明	設定
アカウント ロックアウト期間	自動的に無効なログイン試行の許容回数を超えた後にロックアウトされたユーザーがロック解除されるまでの分数。	整数値。デフォルトは 30 です。値が 0 の場合は、自動的にユーザーのロックを解除することはありません。
ログイン キャッシュ	Web サービスの応答速度を高めるために、ログインが保存されます。有効にした場合、ユーザー、グループ、またはロールの変更が反映されるまで	デフォルトはオンです。

名前	説明	設定
	に 30 分以上かかりま す。サーバーの再起動が 必要となります。	
キャッシュ セッション タイムアウト	アイドル (休止) 状態の ユーザーのセキュリティ セッションが削除される までの時間 (分)。	整数値。デフォルトは 30 です。
キャッシュされるログイ ン再検証の間隔	キャッシュされるログイ ンを再検証する間隔 (分)。設定を有効にする には、サーバーを再起動 する必要があります。	整数値。デフォルトは 5 です。
クライアントの無効化	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のクライアント アプ リケーション (IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager、 IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal など) のログインを無効にしま す。	デフォルトはオフです。
パスワードの暗号化	Web サービスでの暗号化 されたパスワードの使 用を必須にします。Web サービスはパスワードを 要求するときに暗号化 キーを送信します。サー バーは提示された公開 キーを使用してパスワ ードを暗号化します。[パス ワードの暗号化] をオンに した場合、Web サービスは 暗号化キーを提示してパ スワードを要求するこ とはできません。この設 定は、ユーザー設定、コン テンツ リポジトリの資格 情報、および同様のサー ビスに影響を与えます。	デフォルトはオンです。
無効なログイン試行数の しきい値	自動的にユーザをロック アウトする前に可能なロ グインの失敗数。	整数値。デフォルトは 3 です。値が 0 の場合は、 自動的にユーザーのロッ クアウトすることはない ません。

名前	説明	設定
ユーザー ID の小文字化	ユーザーの内部識別子を小文字にします。この設定は、リモートユーザーのディレクトリでユーザー ID の大文字と小文字が区別される場合にだけオフにする必要があります。	デフォルトはオンです。
メッセージ	ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のようこそ画面に表示されるメッセージ。	メッセージ テキスト。HTML タグを使用して書式を適用できます。
プリンシパルの正規化	ユーザーが作成またはインポートされて場合に正規化された文字の形式でユーザー名がデータベース内に保存されるように指定します (Unicode 技術基準での定義は 正規化形式 C となります)。	デフォルトはオフです。

## セットアップ

[セットアップ] 構成オプションでは、リポジトリの参照に使用する URL プレフィックス、JMS キュー設定および JMS メッセージ バス設定など、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のその他の設定を指定できます。

設定を変更するには、[構成] リストの [セットアップ] で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-14  
セキュリティ構成オプション

名前	説明	設定
ログ JMS 接続ファクトリ	ログ JMS 接続 ファクトリの JNDI 名。	ログ JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
ログ JMS キュー	ログ JMS キューの JNDI 名。	ログ JMS キューを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。

名前	説明	設定
メッセージ バス JMS 接続ファクトリ	メッセージ バス JMS 接続ファクトリの JNDI 名。	メッセージ バス JMS 接続ファクトリを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
メッセージ バス JMS トピック	メッセージ バス JMS トピックの JNDI 名。	メッセージ バス JMS トピックを識別するために JNDI サービスが使用する、展開特有およびサーバー特有の文字列 (大文字小文字を区別)。
URL プレフィックス	プレフィックスは、DNS (または WINS) で解決可能なものにする必要があります。SSL を使用している場合、プレフィックスは http ではなく https で始まる必要があります。さらに、http の標準ポートである 80 または https の標準ポートである 443 をサーバーが使用している場合は、ポートを省略できます。プレフィックスに加えた変更を有効にするには、サーバーを再起動する必要があります。	URL:

## IBM ShowCase

IBM® ShowCase® 構成オプションは、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の IBM® ShowCase® Warehouse Builder ジョブ ステップの作成に使用する接続設定を指定できます。Warehouse Builder は、ShowCase 製品セットとともに個別にインストールされます。

設定を変更するには、[構成] リストの ShowCase で対応するオプションをクリックします。リンク名、説明、および有効な設定値については、次の表を参照してください。

テーブル 9-15  
IBM ShowCase 構成オプション

名前	説明	設定
Warehouse Builder Database	Warehouse Builder の設定および定義情報のデータベースまたはライブラリの名前。	有効なデータベース名またはライブラリ名。
Warehouse Builder のホスト名	Warehouse Builder で使用される IBM i サーバーの IP アドレスまたはホスト名。	有効な IP アドレスまたはホスト名。
Warehouse Builder のユーザー名	上記のデータベースまたはライブラリに接続するためのユーザー名。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーが Windows にインストールされている場合にのみ適用可能です。	ユーザー名。
Warehouse Builder のユーザー パスワード	上記のデータベースまたはライブラリに接続するためのパスワード。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーが Windows にインストールされている場合にのみ適用可能です。	マスクされたパスワード。

## CMOR

CMOR 設定オプションでは、[UDF 文字制限] 設定があり、データベースのユーザー定義関数にわたることができる最大文字数を指定できます。デフォルト値はほとんどのシステムに対して十分な値であるため、変更の必要はほとんどありません。その結果、標準構成インターフェイスに CMOR オプションは表示されず、文字数制限を増やす必要がある場合にのみ使用できます。たとえば、バージョン ラベルに使用される文字数が指定された上限を超えている場合、スコアリング構成のデータ プロバイダを選択している場合に使用できる データ プロバイダ定義 - リアルタイム リストを取得できず、サーバー ログに切り詰めエラーが含まれます。ラベル数を少なくすることが泣きない場合、UDF 文字数制限を大きくする必要があります。上限値を変更するには、次の手順を実行します。

- ▶ [設定] ページで、設定リスト上部の [設定] リンクをクリックして、表示されていない設定を表示します。
- ▶ CMOR のリストの [UDF 文字制限] をクリックします。文字数制限の値が表示されます。

- ▶ 必要に応じて値を変更します。
- ▶ [設定] をクリックして新しい値を設定します。
- ▶ リポジトリ サーバーをログオフして再起動します。

SQL Server、DB2、DB2 on IBM i など一部のデータベースの場合、新しい値をするために関数を自動的に更新することはできません。こうした場合、サーバーをシャットダウンする前に関数を手動で更新する必要がありますが、再起動する前は次の手順を実行します。

- ▶ 設定値を変更した後、サーバーを停止します。
- ▶ サーバーが停止したら、データベースの既存の管理ツールを使用して、2 つの関数 `spsscmor_fn_gl2` および `spsscmor_fn_gl3` を変更します。現在の文字数の上限値（始めは 4000）を [UDF 文字制限] 設定で指定された上限値に置き換えます。
- ▶ 値を更新した後、サーバーを再起動します。

次の表は、文字数の上限を 4000 から 6000 に増やした場合、各データベースの指定の置換を示します。

テーブル 9-16  
文字数上限増加の例

データベース	以前の指定	新しい指定
SQL Server	@validLabels nvarchar(4000)	@validLabels nvarchar(6000)
DB2	valid_labels varchar(4000)	valid_labels varchar(6000)
DB2 on IBM i	valid_labels VARGRAPHIC(4000)	valid_labels VARGRAPHIC(6000)

# MIME タイプ

多目的インターネットメール拡張 (Multipurpose Internet Mail Extensions: **MIME**) は、さまざまな種類の情報を識別するための基準です。MIME は E メール の拡張から始まっていますが、HTTP によって使用され、サーバーが配信するコンテンツを定義します。

ファイルに対する要求に応答する場合、サーバーはヘッダー情報をファイルに接続します。この情報には、ファイルに含まれるメディア タイプを示す MIME タイプが含まれています。サーバーは、MIME タイプを定義するファイルの拡張子を使用します。ファイルを受信するクライアントは MIME タイプを使用して、ファイルを処理する最善の方法を決定します。

サーバーは、ファイル拡張子と MIME タイプとの関連性を制御します。これらのマッピングを構成するには、ナビゲーション リストの **[MIME タイプ]** をクリックして、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager の **[MIME タイプとファイル タイプのアイコン]** ページを使用します。

図 10-1  
[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページ

>MIME タイプとファイル タイプアイコン

∴ MIME タイプとファイル タイプ アイコンの管理

設定を編集する MIME タイプの名前をクリックしてください。

新しい MIME タイプの追加

名前	MIME タイプ	拡張子	小さいアイコン	削除
<a href="#">Archive HTML</a>	application/vnd.spss-htmlic	htmlic		✖
<a href="#">Enterprise View</a>	application/vnd.spss-enterprise-view			✖
<a href="#">JavaScript</a>	text/javascript	js		✖
<a href="#">JDBC データソース</a>	application/vnd.spss-jdbc-connection			✖
<a href="#">Joint Photographic Experts Group (JPEG) 画像</a>	image/jpeg	jpe jpeg jpg		✖
<a href="#">MIME HTML ファイル</a>	multipart/related	mht mhtml		✖
<a href="#">Modeler Server 定義</a>	application/vnd.spss-clementine-serverdef	clmsvr		✖
<a href="#">Modeler ストリーム</a>	application/vnd.spss-clementine-stream	str		✖
<a href="#">Modeler 出力</a>	application/vnd.spss-clementine-output	cou		✖
<a href="#">Modeler 展開パッケージ</a>	application/vnd.spss-pa-cdp	cdp		✖
<a href="#">ODBC データソース</a>	application/vnd.spss-odbc-connection			✖
<a href="#">PASWBIRT テンプレート</a>	application/vnd.birt-rpttemplate	rpttemplate		✖
<a href="#">PASWBIRT ライブラリ</a>	application/vnd.birt-rptlibrary	rptlibrary		✖
<a href="#">PASWBIRT レポート</a>	application/vnd.birt-rptdesign	rptdesign		✖
<a href="#">PASWBIRT レポート文書</a>	application/vnd.birt-rptdocument	rptdocument		✖
<a href="#">Portable Network Graphics (PNG) 画像</a>	image/png	png		✖
<a href="#">PostScript</a>	application/postscript	ps		✖
<a href="#">SAS サーバー定義</a>	application/vnd.spss-sas-serverdef	sassvr		✖
<a href="#">SAS ファイル</a>	application/x-sas	sas		✖

[MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、次のタスクを実行できます。

- サーバーにマッピングする MIME タイプを追加する。
- ファイルに対する画像の割り当てなど、既存の MIME タイプの設定を編集する。
- サーバーからマッピングする MIME タイプを削除する。

注：デフォルトでは、多くの共通アイコンが IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Portal に表示されません。外部のファイルタイプ (application/msword など) の場合、管理者は MIME タイプにアイコンを割り当てることができます。詳細は、[p.100 マッピングする MIME タイプを追加する](#) を参照してください。

## マッピングする MIME タイプを追加する

MIME タイプは、タイプとサブタイプの 2 つの部分で構成され、スラッシュで区切られています。タイプでは、一般的なメディア タイプをアプリケーション、オーディオ、画像、メッセージ、モデル、複数パーツ、テキスト、またはビデオに指定します。一方サブタイプでは、メディアの形式を識別し、それはメディア タイプによって異なります。たとえば、text/html は、HTML 形式のテキストに対応しています。

サブタイプには、特定の製品の MIME タイプを識別する接頭辞が含まれます。たとえば、商業製品に関連するサブタイプには、application/vnd.ms-access など、ベンダーのサブタイプを示す接頭辞 vnd. が含まれます。それに対し、非商業製品のサブタイプには、個人的サブタイプを示す接頭辞 prs. が含まれます。

MIME タイプは、Internet Assigned Numbers Authority (IANA) で登録する必要があります。登録されていないタイプには、今後登録されると考えられるタイプとの競合を回避するため、サブタイプに x- の接頭辞を使用して application/x-vnd.spss-clementine-stream とする必要があります。登録されている MIME タイプの詳細は、[IANA \(http://www.iana.org/assignments/media-types/\)](http://www.iana.org/assignments/media-types/) にお問い合わせください。

マッピングする新しい MIME タイプを追加するには

- ▶ [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、[新しい MIME タイプを追加] をクリックします。[MIME タイプとファイル タイプのアイコンの追加] ページが表示されます。

図 10-2  
MIME タイプの作成

> MIME タイプとファイル タイプ アイコン

:: MIME タイプとファイル タイプ アイコンの追加

名前:

MIME タイプ:

拡張子:   
複数の拡張子を入力する場合は、スペースで区切って入力してください。

小さいアイコン:     
 いいえ

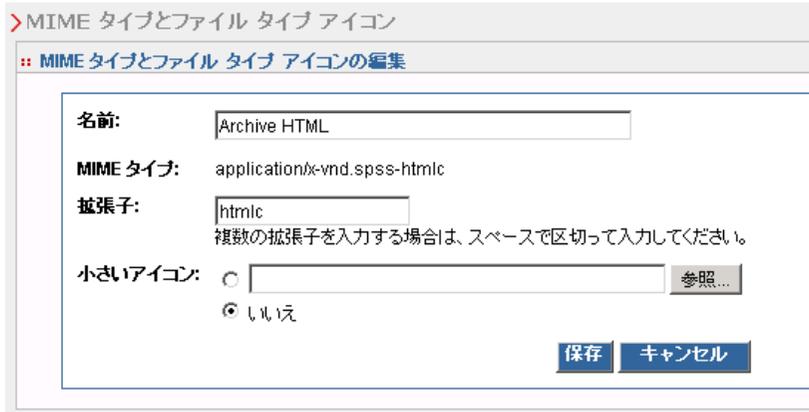
- ▶ MIME タイプの名前を入力します。名前では、タイプ自体より解釈が容易なタイプの識別子を使用します。たとえば、名前 カスタム ダイアログ パッケージ はタイプ application/x-vnd.spss-statistics-spd より解釈が容易です。
- ▶ 追加する MIME タイプを入力します。
- ▶ ファイル拡張子を入力して、MIME タイプと関連付けます。複数の拡張子を指定する場合、エントリ間にスペースを使用します。
- ▶ アイコンを MIME タイプに割り当てます。この画像のサイズは 16 x 16 ピクセルで、形式は .gif ファイルである必要があります。画像は通常、コンテンツ リストで使用されます。[参照] をクリックしてファイルに移動します。アイコンの割り当てが必要でない場合は、[いいえ] を選択します。
- ▶ [保存] をクリックすると MIME タイプを追加し、[MIME タイプとファイルタイプのアイコン] ページに戻ります。または[キャンセル] をクリックすると MIME タイプがサーバーに保存されずに戻ります。

## マッピングする MIME タイプを編集する

既存の MIME タイプを編集するには

- ▶ [MIME タイプとファイルタイプのアイコン] ページで、編集する MIME タイプの名前をクリックします。MIME タイプの [MIME タイプとファイルタイプのアイコン] のページが表示されます。

図 10-3  
MIME タイプの編集



- ▶ 必要に応じて設定を変更します。新しいファイルを選択または [いいえ] を選択する場合にのみ、アイコンが変更されます。アイコンを削除するには、[いいえ] を選択します。
- ▶ [保存] をクリックすると MIME タイプの新しい設定を追加して [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページに戻ります。または [キャンセル] をクリックすると新しい MIME タイプがサーバーに保存されずに戻ります。

## MIME タイプのマッピングの削除

既存の MIME タイプを削除するには

- ▶ [MIME タイプとファイル タイプのアイコン] ページで、削除する MIME タイプの [削除] アイコンをクリックします。

MIME タイプのテーブルが更新され、削除された MIME タイプを除いて表示されます。

# リポジトリのインデックス再作成

インデックス作成は、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository の検索を最適化するために使用します。デフォルトでは、リポジトリがアップグレードされると、古いインデックスがクリアされて再構築されます。リポジトリは、 の起動時のジョブ出力など、処理結果のインデックス再作成が強制的に行われるように構成することもできます。詳細は、 9 章 p.84 プロセス管理 を参照してください。リポジトリの検索は、起動時にインデックス再作成が実行されている間、自動的に無効となります。

インデックス再作成は、権限を持つユーザーが必要に応じてブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で実行することもできます。 詳細は、 5 章 p.45 Actions を参照してください。

注：インデックス再作成は、リソースを消費し、時間のかかるプロセスであるため、新しいデータがリポジトリに大量にインポートされる場合など、絶対に必要な場合にのみ実行するようにしてください。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services でユーザーによる操作が行われていない場合にのみインデックス再作成を実行することを強くお勧めします。インデックス再作成を実行する時点で、すべてのユーザーがログアウトすることが不可能である場合、リポジトリの検索を無効にする必要がありますが、システムの使用中にはインデックスをクリアしないでください。

リポジトリのインデックス再作成を実行するには、次の手順を実行します。

1. ブラウザベースの Deployment Manager で、ナビゲーション リストの [リポジトリ インデックス] をクリックします。[コンテンツ リポジトリ インデックス作成] ページが表示されます。

図 11-1  
コンテンツ リポジトリ インデックス作成

>コンテンツ リポジトリ

**:: インデックス作成**

コンテンツリポジトリ全体のインデックス再作成を開始するには、[インデックス作成開始] をクリックします。インデックス作成はコストが高く時間のかかるプロセスなので、絶対に必要な場合にのみ実行してください。インデックス作成の実行中は、検索サービスが矛盾した結果を返す可能性があります。

インデックス作成の実行中はクライアントを無効にする:

インデックス再作成の前にインデックス全体をクリア:

インデックス作成開始

2. 次のいずれかを実行します。
  - リポジトリにログインしているユーザーがいない場合、[インデックス再作成の前にインデックス全体をクリア] を選択する。
  - リポジトリにユーザーがログイン中である場合、[インデックス作成中はクライアントを無効にする] を選択する。
3. [インデックス作成開始] をクリックします。インデックスの再構築中には、[コンテンツ リポジトリ インデックス作成のステータス] ページに、処理されたオブジェクトの統計が表示されます。

図 11-2

## コンテンツ リポジトリ インデックス作成のステータス

>コンテンツ リポジトリ

:: インデックス作成ステータス	
ステータス:	完了
検索の無効化:	いいえ
インデックスのクリア:	はい
エラー数:	0
最新のエラー:	
開始時刻:	1 17 2008 11:08:54 午前
終了時刻:	1 17 2008 11:08:54 午前
経過時間:	00:00:00 (hh:mm:ss)
インデックス付きフォルダ:	2
インデックス付きピック:	1
インデックス付きファイル:	12
速度:	∞ オブジェクト/秒

# リポジトリ メンテナンス

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository メンテナンスには、既存のデータとアプリケーション設定のバックアップ、データの整合性と最適なパフォーマンスを確保するために未使用あるいは廃止されたデータのクリーンアップなどのタスクがあります。

時間が経つにつれて、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Repository のサイズが大きくなります。新しいオブジェクトのバージョンは、オブジェクトが保存されるたびに保存されます。さらに、各ジョブの実行から作成されたアーティファクトが蓄積されます。オブジェクトとバージョンを導入する結果として、リポジトリ データベースのサイズが増大し、パフォーマンスに悪影響に影響を与える場合があります。パフォーマンスの低下により、ファイルの保存する時間が長くなる場合があります。極端な状況では、過去にタイムアウトエラーで失敗したときより操作の開始に時間がかかる場合があります。このような問題を防ぐために、不要なオブジェクトとバージョンを定期的に削除してください。

削除の対象となる項目は次のとおりです。

- 不要なオブジェクトのラベルの付いていないバージョン
- 不要な Enterprise View のバージョン
- 不要なジョブのアーティファクト
- 送信された期限切れの作業 [詳細は、 p. 108 期限切れの送信作業の削除 を参照してください。](#)
- 古いジョブ履歴 [詳細は、 p. 108 ジョブ履歴のサイズの管理 を参照してください。](#)

さまざまな方法で不要な項目を削除することができます。各項目を手動で識別および削除することができます。または、指定された条件を満たす項目の一括削除を実行するクリーンアップ ユーティリティを使用することができます。最後に、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services - Essentials for Python を使用して定期的に行うスケジュールできる自動削除のタスクを作成することができます。多くの項目を削除してもシステムのパフォーマンス全体に影響を与えないようにするために、メンテナンス サービスが実際の削除を管理します。

## リポジトリ バックアップ

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository データおよびアプリケーションの設定は、リレーショナル データベースに保存されており、リポジトリのバックアップはデータベース ベンダーのバックアップ ユーティリティを使用してデータベース レベルで実行する必要があります。データベースのバックアップは毎日実行することをお勧めします。必要に応じて、データベースのバックアップ コピーに対してリポジトリを再インストールすることができます。

## 自動メンテナンス サービス

項目を削除すると、すぐに項目が IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository のすべてのクライアントで使用できなくなります。ただし、項目はその時点で削除されず、削除のフラグが付けられます。メンテナンス サービスが実際の削除を行います。このサービスは定期的にアクティブ化し、システムからフラグのついた項目を削除します。フラグのついた項目を現在のメンテナンス ウィンドウで削除することができない場合、項目は次のサービスのアクティブ化までシステムに保持されます。メンテナンス サービスは、システム全体の処理の削除タスクの影響を最小限に抑えます。

項目にフラグを付けずすぐに削除する例外がいくつかあります。LATEST バージョンを含むオブジェクトのバージョンをセットで削除する場合、セット全体をすぐに削除して LATEST ラベルを新しいバージョンに正しく再割り当てすることができるようにします。また、エクスポートを実行すると、フラグの付いたすべてのバージョンをすぐに削除し、削除された項目がエクスポート セットに含まれないようにします。

## 自動リポジトリ メンテナンスの設定

メンテナンス サービスでは、以下のようなさまざまなタスクを実行します。

- フラグの付いたオブジェクトおよびバージョンの削除
- 古い検索インデックスの削除
- 古いジョブ履歴の削除
- 期限切れの送信アーティファクトの削除
- 期限切れの保留中のサーバー接続の削除
- エクスポート、インポート、およびプロモーション活動中に作成された一時ファイルの削除

サービスは、設定パラメータのセットによって定義されたスケジュールで実行されます。ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、これらのパラメータの値を指定します。すべてのパラメータは、[設定] ページのリポジットリ グループで使用できます。

1. [リポジットリ メンテナンス開始日] を選択します。メンテナンス サービスを開始する必要がある日付と時刻を示す値を入力します。[設定] をクリックします。
2. [リポジットリ メンテナンス開始 (最大)] を選択します。メンテナンス サービスを開始する必要がある指定された開始時刻後の最長期間を示す値を入力します。サービスを指定した時間に開始できない場合は、サービスの起動を試みる最長時間となります。[設定] をクリックします。
3. [リポジットリ メンテナンス開始 (最小)] を選択します。メンテナンス サービスを開始する必要がある指定された開始時刻後の最短期間を示す値を入力します。サービスを指定した時間に開始できない場合は、サービスの起動を試みる最短時間となります。[設定] をクリックします。
4. [リポジットリ メンテナンスの頻度] を選択します。メンテナンス サービスを実行する頻度を示す値を入力します。たとえば、90 の値を指定すると、90 分ごとにサービスを実行します。[設定] をクリックします。
5. [リポジットリ メンテナンストランザクションの遅延] を選択します。メンテナンス トランザクションの全体的な時間は、実際のメンテナンス作業と次のトランザクションが処理されるまでの遅延時間が含まれます。遅延により、メンテナンス サービスの実行中にシステムが他のタスクに対応することが可能になります。この遅延に割り当てられたメンテナンス トランザクションの全体的な時間の割合を示す値を入力します。例えば、50% は、トランザクションの作業がの後に作業を実行するために必要な時間に等しい遅延が必要であることを示します。つまり、遅延は更新トランザクションの合計時間の半分を使用します。[設定] をクリックします。
6. [リポジットリ メンテナンストランザクション期間] を選択します。メンテナンス トランザクションに割り当てられた時間を示す値を入力します。[設定] をクリックします。
7. IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services サーバーがクラスタ環境で実行されている場合は、クラスタ ノードのすべてにわたってまたはマスタ ノードのみでメンテナンス サービスを実行することができます。[設定] リストから [リポジットリ メンテナンス マスタ] を選択します。このオプションを選択することにより、サービスを マスター ノードに限定します。[設定] をクリックします。
8. 新しい設定を使用するには、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーを再起動します。

これらの構成設定の詳細については、「[リポジトリ](#)」を参照してください。

## 期限切れの送信作業の削除

[送信済みジョブ] フォルダで作成されたアーティファクトは、指定された日数が経過した後自動的に期限が切れ、所有者と管理者にのみ表示されます。期限日以降期限の切れたアーティファクトが不要な場合、期限を過ぎたときにアーティファクトを自動的に削除のフラグを付けるようシステムを設定することができます。メンテナンス サービスがアクティブ化されると、項目がリポジトリから削除されます。

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で利用可能な [設定] ページを使用して、この機能を制御することができます。

1. プロセス管理グループから、[期限切れの送信アーティファクトの削除] を選択します。
2. チェック ボックスを選択してこの機能を有効にします。
3. [設定] をクリックします。

これらの構成設定の詳細については、「[プロセス管理](#)」を参照してください。

## ジョブ履歴のサイズの管理

ジョブを実行するごとに、いつ実行したか、実行の全体の状態がどのようなものだったかなど、ジョブの実行に関する情報を詳細に示すジョブ履歴にエントリが追加されます。これらのエントリには、ジョブの出力へと実行ログへの参照が含まれます。ジョブがスケジュールで実行されている場合、スケジュールによって開始されたすべての実行で、ジョブ履歴に対応するエントリが生成されます。

すべてのジョブ実行でジョブ履歴のエントリが生成される場合、時間を経てジョブ履歴で保持される情報の量が多くなります。しかし、履歴エントリの中には不要なものもあります。ジョブの以前の実行に関する履歴エントリは、ジョブの新しい実行が可能になると不要になります。ジョブ履歴のサイズを制御するには、ジョブのバージョン用に保存するジョブ履歴エントリの数についての制限を定義することができます。ジョブのバージョンの履歴がこの制限を超えると、メンテナンス サービスを有効化すると最も古い履歴エントリは無効になり、削除されます。たとえば、ジョブ履歴のサイズ制限が 15 である場合、最初の履歴エントリの 16 番目の実行結果が削除されます。

ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で利用可能な [設定] ページを使用して、この機能を制御することができます。自動的にジョブ履歴エントリを管理するには、次の手順を実行します。

1. プロセス管理グループから、[ジョブ履歴の制限] を選択します。各ジョブバージョンに保持する履歴エントリの数を入力します。[設定] をクリックします。
2. プロセス管理グループから、[古いジョブ履歴の削除] を選択します。ジョブ履歴の上限を超える最も古いジョブのバージョン履歴を削除するには、チェックボックスをオンにします。[設定] をクリックします。

これらの構成設定の詳細については、「プロセス管理」を参照してください。

## メンテナンス アクティビティの監視

メンテナンス サービス アクティビティの要約を、サービスをアクティブ化する時に実行されるタスクを識別できるように、システム ログ ファイルに含めることができます。メンテナンス サービスのロギングを有効にするには

1. テキスト エディタで log4j.xml 構成ファイルを開きます。
2. com.spss.process.internal.maintenance ロガーのカテゴリ要素を検索します。
3. このロガーのロギング レベルを DEBUG に設定します。
4. 変更内容を保存します。

メンテナンス サービスをアクティブ化すると、以下のメッセージがログ出力に追加されます。

- Removed N expired submitted executions in the time allotted.
- Removed N obsolete executions in the time allotted.

ロギング サービスの詳細については、『インストールと構成ガイド』を参照してください。

## バッチ削除

多くの項目を削除すると、各項目を個別に追加する必要がある場合に非常に手間取ることがあります。ただし、項目が特性を共有する場合、クリーンアップ ユーティリティを使用して項目を一括で識別、選択、削除することができます。ユーティリティを使用する場合、項目を選択およ

び削除するために満たす必要がある基準を指定します。選択基準は、以下の特性に基づきます。

- フォルダ
- MIME タイプ
- ラベルの有無
- バージョン番号
- 作成日

たとえば、クリーンアップ ユーティリティを使用して、指定されたフォルダにある最新の 3 バージョンの IBM® SPSS® Statistics シンタックス ファイル以外のすべてを削除することができます。また、指定した日付より古いラベルのないバージョンの IBM® SPSS® Modeler ストリームを削除することができます。

自動メンテナンス フレームワークが有効になっている場合は、選択したアイテムは次の機会の削除用のフラグが付けられます。メンテナンス フレームワークが無効な場合、項目はすぐに削除されます。

クリーンアップ ユーティリティは全体的に Java ベースで、サポートされている IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services プラットフォームで実行されます。ユーティリティは以下のフォルダで使用できます。

```
<repository install path>/applications/cleanup
```

項目は永久に削除されます。いったん項目が削除されると、復元することはできません。不要なリスクを回避するために、このユーティリティでファイルを削除する前にデータのバックアップを作成することをお勧めします。

コマンドラインからクリーンアップ ユーティリティを実行することも、自動の反復処理のジョブ ステップを作成することもできます。

このユーティリティを使用してファイルを削除する前に、リポジトリ データベースをバックアップすることをお勧めします。または、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services エクスポート機能を使用して、クリーンアップ ユーティリティで処理できるフォルダのバックアップを作成することができます。

## クリーンアップ ユーティリティの実行

クリーンアップ ユーティリティを実行するコマンドの構造は、次のとおりです。

```
cleanup <parameter=value parameter=value ...>
```

cleanup コマンドの後には、スペースで区切られたパラメータのリスト、削除タスクを定義する値が続きます。各パラメータ指定にはパラメータ名、等号記号、パラメータ値が含まれます。“[クリーンアップ ユーティリティ パラメータ](#)” 表は、各パラメータについて説明しています。

テーブル 12-1  
クリーンアップ ユーティリティ パラメータ

パラメータ	使用	説明
connectionURL	必須	IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services RepositoryURL
userid	必須	リポジトリ サーバーに接続するための有効なネイティブ IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ユーザー識別子。ユーザーは任意の選択した項目を削除するために十分な権限を持っている必要があります。通常、識別子は管理者に対応しています。
password	必須	指定したユーザーのパスワード。
resource	必須	リポジトリ フォルダまたはファイルへのパス。このパラメータは複数回指定することができます。
includeSubFolders	オプション	サブフォルダを検索するかどうかを示すブール値。デフォルトは false です。
includeType	オプション	含めるオブジェクトの MIME タイプ。大文字・小文字の区別はありませんが、テキストには完全に一致する必要があります。この値は複数回指定することができます。デフォルトはすべてのタイプです。
excludeType	オプション	除外するオブジェクトの MIME タイプ。大文字・小文字の区別はありませんが、テキストには完全に一致する必要があります。この値は複数回指定することができます。デフォルトは除外なしです。
deleteLabeled	オプション	ラベル付きバージョンを削除するかどうかを示すブール値。デフォルトは false です。
versionsToKeep	オプション	保持する必要がある最新バージョンの数。デフォルトは 0 です。
olderThan	オプション	指定した日付の前に作成されたリソースのみが選択されます。時間は、比較のためにクリーンアップ ユーティリティを実行するマシンにローカライズされます。デフォルトは日付フィルタなしです。
logfile	オプション	結果のログ記録に使用されるローカル ファイルへのパス。デフォルトはログ ファイルなしです。
testMode	オプション	選択した項目を削除するかどうかを示すブール値。true を指定すると、実際削除せずに、オブジェクト/バージョンが選択されます。デフォルトは false です。

以下の手順を使用して、クリーンアップ ユーティリティを起動します。

1. システムの Path 環境変数に Java パスが含まれていることを確認します。
2. コマンド プロンプトで、クリーンアップ ユーティリティを含むディレクトリに移動します。
3. 削除タスクを定義するパラメータと値のリストの前に、**cleanup** を入力します。
4. コマンドを入力すると、タスクが開始されます。

たとえば、以下のコマンドは/CleanupData フォルダのすべてのサブフォルダを再帰的に処理し、削除するラベルのないバージョンを選択します。**testMode** を使用すると、バージョンが実際に削除されず、cleanup.log ファイルを確認して、**testMode** を削除した場合に削除される選択したバージョンを識別します。

```
cleanup userid=admin password=pass connectionURL=http://localhost:8080  
testMode=true resource=/CleanupData includeSubFolders=true logfile=cleanup.log
```

## 一括削除ジョブの作成

一般ジョブ ステップを使用して、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ジョブから一括削除を開始できます。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で一括削除のジョブ ステップを作成するには、以下の手順を実行します。

1. 一般ジョブ ステップをジョブに追加します。
2. ジョブ ステップをクリックしてプロパティを変更します。
3. [全般] タブに、ステップの名前を入力します。[実行するコマンド] で、削除するタスクを定義するクリーンアップ ユーティリティ パラメータの前にシステムのクリーンアップ ユーティリティへのフルパスを入力します。
4. 削除タスクに **logfile** パラメータが含まれ、ログを IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository に保存する場合、[ファイルの出力] タブを使用してファイルの出力場所を指定します。
5. ジョブを保存します。

必要に応じてジョブを手動で実行するか、指定した回数またはシステム イベントに応じて自動的に実行するスケジュールを作成することができます。一般ジョブ ステップおよびスケジュール ジョブの詳細は、Deployment Manager のマニュアルを参照してください。

# 通知

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は、**通知と登録**というメカニズムを備えており、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository オブジェクトの変更やジョブの処理結果を随時ユーザーに通知できます。通知と登録は、ともに対応するイベントが発生したときに E メール メッセージを生成します。たとえば、ジョブが失敗した場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services は、ジョブを担当しているユーザーに E メールを自動的に送信することができます。失敗により、イベントに一致するテンプレートを検索します。テンプレートをイベントに適用すると、イベントに関連する受信者に送信される E メールを作成します。

デフォルトのリポジトリのインストールに含まれた通知テンプレートは、`<インストール ディレクトリ>\components\notification\templates` のサブディレクトリにあります。サブディレクトリの名前は、一般的なイベント タイプに対応しています。たとえば、`components\notification\templates\PRMS\Completion` フォルダには、2 つのメッセージ テンプレートが含まれています。これらのテンプレート `job_success.xml` と `job_failure.xml` は、ジョブ実行の成功と失敗にそれぞれ対応しています。ジョブが正常に完了すると、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services では、`job_success` テンプレートを使用して、成功を示す通知メッセージを生成します。通知メッセージのコンテンツと外観は、テンプレートを変更することによってカスタマイズすることができます。

## 通知メッセージ テンプレートの構造

Apache **Velocity** テンプレート言語を使用して、イベント情報を通知メッセージに変換します。

### Velocity テンプレートの構造

Velocity テンプレートには、`*.vm` のファイル拡張子が付いています。このテンプレートでは、`/mimeMessage/messageSubject`、`/mimeMessage/messageContent`、`/mimeMessage/messageProperty` の値を = 演算子で割り当てることにより、メッセージが生成されます。これらの値は、後から E メール プロセッサによって解析されます。次のサンプル テンプレートでは、ジョブの成功を示す簡単で一般的な E メール メッセージが生成されます。

```
/mimeMessage/messageSubject=Job Completion
/mimeMessage/messageContent[text/plain;charset=utf-8]=The job completed successfully.
```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 13-1  
一般的な通知メッセージ

The job completed successfully.

Velocity テンプレートの詳細は、Apache [Velocity プロジェクト](http://velocity.apache.org/) (<http://velocity.apache.org/>) のドキュメントを参照してください。

## メッセージのプロパティ

E メール通知テンプレートには、リポジトリのデフォルト設定と異なる SMTP 設定が使用される場合に、メッセージの処理方法を決定するプロパティが含まれることがあります。たとえば、異なる SMTP サーバー名、ポート番号、メッセージに割り当てる返信先の E メールアドレスの指定が必要な場合があります。デフォルトの SMTP のプロパティは、リポジトリの通知構成オプションの下に一覧表示されます。[詳細は、9 章 p. 78 通知 を参照してください。](#)リポジトリのインストールで Sun JVM を使用する場合、SMTP のプロパティは、[次の表](#)で定義されているメッセージ処理の JavaMail API のプロパティに対応します。これらのプロパティは、Java 環境によって異なる場合がある点に注意してください。SMTP のプロパティの詳細は、JVM のベンダーから提供されるドキュメントを参照してください。

テーブル 13-1  
メッセージのプロパティ

メッセージのプロパティ	属性	イベント プロパティ	説明
mail.debug	値	MailSmtpDebug	初期デバッグ モードを示すブール値。デフォルトは false です。
mail.smtp.user	値	MailSmtpUser	デフォルトの SMTP ユーザー名。
mail.smtp.password	値	MailSmtpPassword	SMTP のユーザー パスワード。
mail.smtp.host	値	MailSmtpHost	接続先の SMTP サーバー。
mail.smtp.port	値	MailSmtpPort	接続先の SMTP サーバーのポート。デフォルトは、25 です。
mail.smtp.connectiontimeout	値	MailSmtpConnectionTimeout	ソケット接続のタイムアウト値 (ミリ秒)。デフォルトでは、タイムアウトはありません (無制限)。

メッセージのプロパティ	属性	イベント プロパティ	説明
	値	MailSmtpTimeout	ソケット入出力のタイムアウト値 (ミリ秒)。デフォルトでは、タイムアウトはありません (無制限)。
mail.smtp.from	値	MailSmtpFrom	<b>SMTP MAIL</b> コマンドで使用する E メール アドレス。エンベロープ返信アドレスを設定します。
mail.smtp.from	label	MailSmtpFromPersonal	エンベロープ返信アドレスのラベル。
mail.smtp.localhost	値	MailSmtpLocalhost	ローカル ホスト名。通常、JDK とネーミング サービスが適切に構成されていれば、このプロパティを割り当てる必要はありません。
mail.smtp.ehlo	値	MailSmtpEhlo	<b>EHLO</b> コマンドでサインオンするかどうかを示すブール値。デフォルトは true です。通常、 <b>EHLO</b> コマンドに失敗すると、 <b>HELO</b> コマンドがフォールバックとして機能します。このプロパティは、サーバーのフォールバックが機能しない場合以外は使用しないでください。
mail.smtp.auth	値	MailSmtpAuth	<b>AUTH</b> コマンドでユーザーを認証するかどうかを示すブール値。デフォルトは false です。
mail.smtp.dsn.notify	値	MailSmtpDsnNotify	SMTP サーバーから配信ステータスの通知をメッセージの送信者に送信する条件を指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>NEVER</b>: 通知を送信しない。</li> <li>■ <b>SUCCESS</b>: 配信が正常に行われた場合にだけ通知を送信する。</li> <li>■ <b>FAILURE</b>: 配信が失敗した場合にだけ通知を送信する。</li> <li>■ <b>DELAY</b>: 配信の遅延が生じた場合に通知を送信する。</li> </ul> 値は、カンマで区切って複数指定できます。

これらのプロパティを Velocity テンプレートで定義する場合のシンタックスを次に示します。

- プロパティ値は、次の例のように、引数としてプロパティ名とラベルを大かっこ内に指定して、`mimeMessage/messageProperty` に割り当てる必要がある。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][Brian McGee]=bmagee@mycompany.com
```

- プロパティ ラベルの値の指定は任意。したがって、次のような代入ステートメントのシンタックスも可能である。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][]=bmagee@mycompany.com
```

- プロパティの名前およびラベルの値は、静的な値として割り当てるか、対応するイベント プロパティを参照する変数で割り当てることができる。

```
/mimeMessage/messageProperty[smtp.mail.smtp.from][$MailSmtFromPersonal]=$MailSmtFrom
```

## メッセージ内容

通知メッセージの内容は、通知テンプレートの `messageSubject` 要素と `messageContent` 要素に対して入力されたテキストに対応します。どちらの要素の場合も、このテキストにはイベント プロパティ値（変数）が含まれます。

- Velocity テンプレートでは、変数値は \$ 記号で参照されます。たとえば、`Job step ${JobName}/${JobStepName} failed at ${JobStepEnd}` の場合、`JobName`、`JobStepName`、および `JobStepEnd` プロパティの現在の値でテキストが挿入されます。

メッセージに挿入できる変数は、通知をトリガするイベントのプロパティを参照します。代表的なプロパティには次のものがあります。

- `JobName` : ジョブ名を示す文字列。
- `JobStart` : ジョブの開始時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobEnd` : ジョブの終了時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobSuccess` : ジョブが成功したかどうかを示すブール値。
- `JobStatusURL` : ジョブ ステータスの表示された URL に対応する文字列。
- `JobStepName` : ジョブ ステップ名を示す文字列。
- `JobStepEnd` : ジョブの終了時刻を示すタイムスタンプ。
- `JobStepArtifacts` : ジョブ ステップ出力の URL を示す文字列値の配列。
- `JobStepStatusURL` : ジョブ ステップ ステータスの表示された URL に対応する文字列。
- `ResourceName` : ファイル名またはフォルダ名など、イベントの影響を受けるオブジェクト名に対応する文字列。
- `ResourcePath` : イベントの影響を受けるオブジェクトのパスに対応する文字列。

- ResourceHttpRequest : オブジェクトが表示された HTTP URL に対応する文字列。
- ChildName : イベントの影響を受ける親オブジェクトが持つ、子オブジェクト名に対応する文字列。たとえば、ファイルがフォルダ内に作成されると、これはファイルの名前となります。
- ChildHttpRequest : 子オブジェクトが表示された HTTP URL に対応する文字列。
- ActionType : リポジトリ イベントについて、**FolderCreated** など、イベントを生成したアクションの種類。

使用できるプロパティは、イベントによって定義され、イベント タイプごとに異なります。

次に示すジョブ ステップの成功通知のサンプル Velocity テンプレートでは、件名行にジョブとジョブ ステップの名前を挿入します。また、メッセージの内容には、ステップの終了時刻、ステータスを参照できる URL、ジョブ ステップによって生成されたアーティファクトのリストも含まれます。このテンプレートでは、JobStepArtifacts プロパティの配列からアーティファクトの URL を取得するために、**#foreach** ループ構造が使用されている点に注意してください。

```
<html>
<head>
<meta http-equiv='Content-Type' content='text/html;charset=utf-8'/>
</head>
<body>
<p>The job <b>${JobName}</b> started ${JobStart} and #if(${JobSuccess}) completed successfully #else failed #end
${JobEnd}.

<p>To review the job log, go to <a href='${JobStatusURL}'>${JobStatusURL}</a>.</p>

<hr><p>This is a machine-generated message.Please do not reply directly.この通知を受信しない場合、
通知リストから削除してリポジトリ管理者に連絡してください。</p>
</body>
</html>
```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 13-2  
カスタマイズした内容を使用したメッセージ

The job **Churn** started May 10, 2010 5:12:09 PM and completed successfully May 10, 2010 5:12:20 PM.

To review the job log, go to

<http://CDSServer:8080/processui/jobStatus/ex/0a70077848fe9ee2000001286fdd14429e25>.

This is a machine-generated message. Please do not reply directly. If you do not wish to receive this notification, remove yourself from the notification list or contact your Repository administrator.

次のコード セグメントでは、フォルダ コンテンツ通知の Velocity テンプレートを変更してジョブへのハイパーリンクをメッセージから削除する方法を示します。IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ジョブを IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager 以外で開くことはできないため、通知メッセージをカスタマイズしてハイパーリンクを削除することを強くお勧めします。この例では、if 条件を追加してオブジェクトの MIME タイプを調べています。オブジェクトが IBM SPSS Collaboration and Deployment Services ジョブの場合は、ハイパーリンクを組み込みません。

元のテンプレート:

```
#if($Attachments)
See attachment.
#else
<p>To review the content of the file, go to <a href='${ResourceHttpUrl}'>${ResourceHttpUrl}</a>.</p>
#end
```

変更したテンプレート:

```
#if($Attachments)
See attachment.
#else
#if($Mime Type!='application/x-vnd.spss-prms-job')
<p>To review the content of the file, go to <a href='${ResourceHttpUrl}'>${ResourceHttpUrl}</a>.</p>
#end
#end
```

## メッセージ書式

通知テンプレートでは、メッセージ内容の MIME タイプを指定する必要があります。通知テンプレートでは、/mimeMessage/messageContent とともに大かっこで MIME タイプの引数を指定します。

MIME タイプには次のいずれかの値を指定できます。

- text/plain: 通知メッセージはプレーン テキストで表示されます。これは、デフォルトの設定です。
- text/html: 通知メッセージには HTML タグが含まれます。メッセージの内容の外観を制御するには、この設定を使用します。メッセージ内の HTML が適切に構成されている必要があります。

どのような場合でも、テンプレートの出力を Unicode (UTF-8) でエンコードすることが推奨されます。

HTML 通知テンプレートでは、マークアップ言語で使用可能な機能を利用できます。たとえば、メッセージには Web ページや、ジョブの出力へのリンクを含めることができます。

次のテンプレートでは、ジョブ ステップ完了の通知メッセージを生成し、内容を表として書式設定し、本文のインライン スタイルを使用してメッセージの背景色を指定し、段落には、内部のスタイル シートを使用して青色の Verdana フォントを定義します。さらにメッセージにはジョブの出力へのリンクが含まれます。

```
/mimeMessage/messageSubject=${JobName}/${JobStepName} completed successfully
/mimeMessage/messageContent[text/html;charset=utf-8]=
```

```
<html>
<head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html;charset=utf-8"/>
<style type="text/css">
table {font-family: verdana; color: #000080}
p {font-family: verdana; color: #000080}
.foot {font-size: 75%; font-style: italic;} </style>
</head>
<body style="background-color: #DCDCDC">
<table border="8" align="center" width = 100%>
<tr align="left">
<th>Job/step name</th>
<td>${JobName}/${JobStepName}</td>
</tr>
<tr align="left">
<th>End time</th>
<td> ${JobStepEnd}</td>
</tr>
<tr align="left">
<th>Output</th>
<td><p>
#f ($JobStepArtifacts)
#foreach($artifact in $JobStepArtifacts)
<a href='${artifact.get("url")}'>${artifact.get("filename")}</a><br>
#end
#else None <br>
#end
```

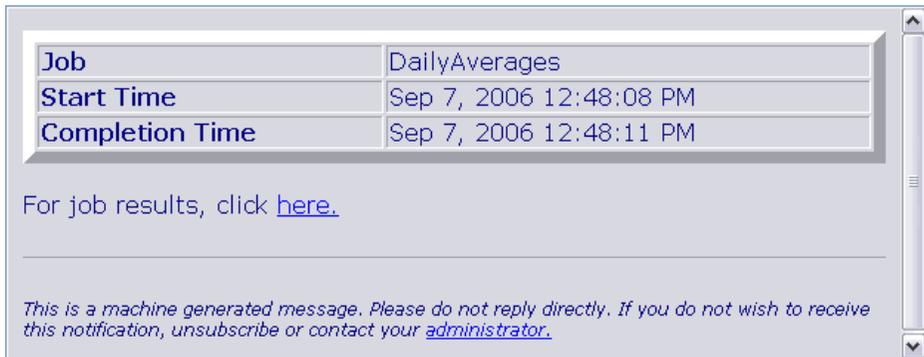
```

<p></td>
</tr>
</table>
<hr/>
<p class="foot">This is a machine generated message.
Please do not reply directly.If you do not wish to receive
this notification, unsubscribe or contact your
<a href="mailto:admin@mycompany.com"> your IBM SPSS Deployment
Services administrator.</a></p></body>
</html>

```

次の図に、結果として生成される E メールを示します。

図 13-3  
カスタマイズした書式設定を使用したメッセージ



## 通知テンプレートの編集

Velocity メッセージ テンプレートを編集するには

1. テンプレートをテキスト エディタで開きます。  
components/notification/templates フォルダのサブフォルダに、使用しているテンプレートの現在のセットが含まれています。
2. /mimeMessage/messageSubject に割り当てられている値を変更します。\$ の表記を使用して、イベント プロパティ変数をメッセージの件名に挿入します。詳細は、[p. 116 メッセージ内容](#) を参照してください。
3. メッセージの MIME タイプを定義します。messageContent に従って、MIME タイプ値が大カッコで指定されます。プレーン テキスト メッセージの場合、text/plain の値を使用します。HTML メッセージの場合、text/html の値を使用します。詳細は、[p. 118 メッセージ書式](#) を参照してください。
4. messageContent に割り当てられている値を変更します。\$ の表記を使用して、イベント プロパティ変数をメッセージ コンテンツに挿入します。

- 元の名前を使用して、テンプレートを保存します。

対応するイベントが発生した場合、後続の通知メッセージでは変更されたテンプレートが使用されます。

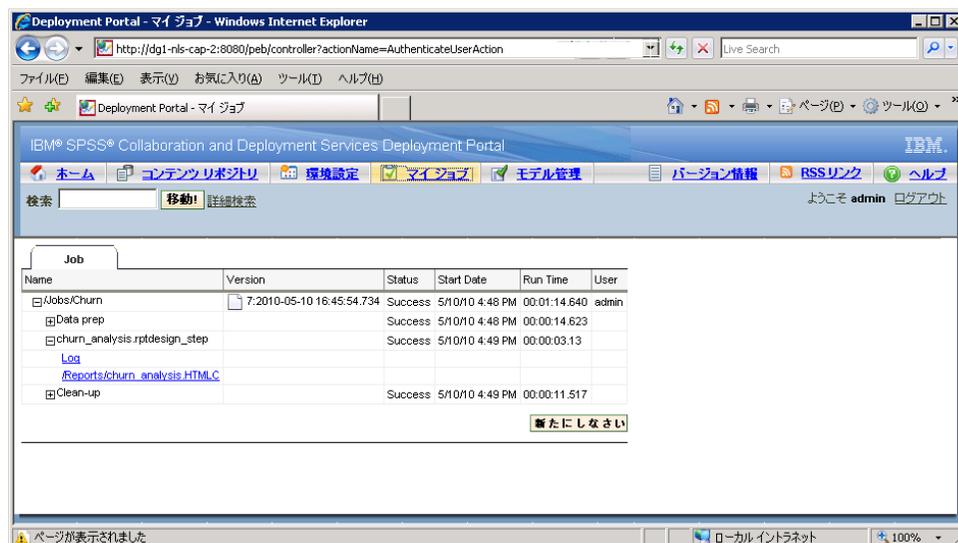
## ジョブ ステータス

JobStatusURL プロパティを含む通知テンプレートは、ジョブ出力やログへのリンクを含むメッセージを作成します。

ジョブの結果を表示するには、次の手順を実行します。

- 通知メッセージのステータス リンクをクリックします。サーバーの [ログイン] ページが表示されます。
- ログイン名とパスワードを入力します。[ログイン] をクリックします。[ジョブ ステータス] ページが表示されます。

図 13-4  
ジョブ ステータス



ジョブ ステータス ビューには、ジョブ内のすべてのジョブ ステップの状態に関する情報など、ジョブの処理ステータスの詳細情報が表示されます。ビューを使用して、生成された出力のほか、ジョブ ログ、各ジョブ ステップのログを表示することができます。

### ジョブの詳細

名前: ジョブのリポジトリ パス。

**バージョン:** ジョブのバージョン ラベル。

**ステータス:** 実行中、成功、または失敗など、ジョブの処理ステータス。

**開始日:** ジョブの処理が開始された日時。

**実行時間:** ジョブ実行の期間

**ユーザー:** ジョブを登録したユーザー。

- ▶ ジョブのステータスを更新するには、[更新] をクリックします。
- ▶ ジョブ ログやジョブ ステップを記載したジョブの詳細を展開するには、そのジョブ名の横の + をクリックします。
- ▶ ジョブ ログを表示するには、ジョブ名の下 [ログ] リンクをクリックします。[ログ] タブが開きます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。

### ジョブ ステップの詳細

**名前:** ジョブ ステップの名前。

**ステータス:** 実行中、成功、または失敗など、ジョブ ステップの処理ステータス。

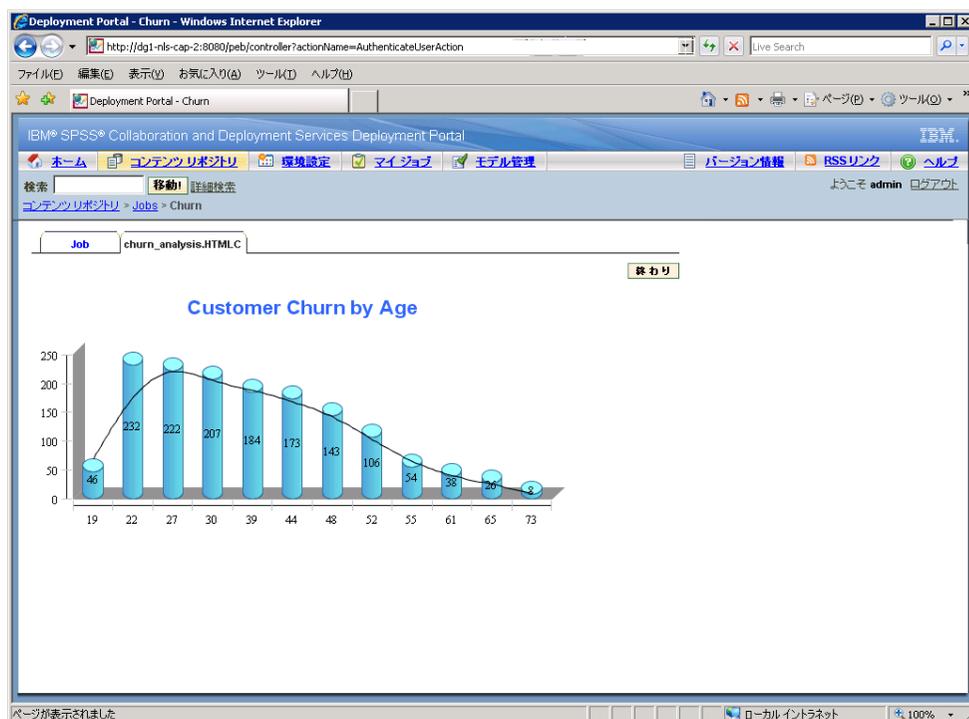
**開始日:** ジョブ ステップの処理が開始された日時。

**実行時間:** ジョブ ステップの実行期間。

- ▶ ジョブ ステップのログや結果の出力を記載したジョブ ステップの詳細を展開するには、そのジョブ ステップ名の横の + をクリックします。
- ▶ ジョブ ステップのログを表示するには、ジョブ ステップ名の下 [ログ] リンクをクリックします。ジョブ ステップのログが新しいタブに表示されます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。
- ▶ ジョブ ステップの出力を表示するには、出力ファイル名をクリックします。[結果] タブが開きます。タブを閉じるには、[閉じる] をクリックします。

たとえば、ここに表示されるジョブは 3 つのステップで構成されています。最初のステップではデータの準備、2 番目のステップでは BIRT レポート、3 番目のステップでは一時ファイルのクリーンアップを実行します。

図 13-5  
ジョブ出力



## 通知サービス パフォーマンスの最適化

通知サービス全体のパフォーマンスは、登録データを保存し処置するデータベース システムのパフォーマンスのほか、登録者および登録データを管理、イベントを収集、通知を生成、形式設定、および配信する IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services コンポーネントの一連のパフォーマンスを示します。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の通知機能には、多くのシステム リソースを必要とし、詳細な設定を必要とする場合があります。通知サービスのパフォーマンスを改善するために、一般的なガイドラインに従うこともお勧めします。

## 通知サービス構成

### 通知構成オプション

通知サービス構成オプションで定義されたパラメータを変更して、通知サービス パフォーマンスを改善することができます。次のオプションを使用すると、パフォーマンスに大きな効果が見られる場合があります。

- イベント ノイズ フィルタリングを使用すると、関連する通知プロバイダや登録者に一致した登録情報を持たない通知イベントを処理の早い段階で無視します。イベント ノイズ フィルタ キャッシュのサイズは、一致する登録情報で解決しないキャッシュされたイベントの最大数を定義します。必要に応じて、イベント ノイズ フィルタリング（[イベント ノイズ フィルタ] 構成オプション）を有効化して、キャッシュのサイズを拡大し（[イベント ノイズ フィルタ キャッシュ] 構成オプション）、通知サービスパフォーマンスを改善することができます。実稼働環境では、イベント ノイズ フィルタリングを無効化することはお勧めできません。デバッグおよびテスト環境でのみ使用する必要があります。
- 登録識別キャッシュは、一致する登録識別のリストに対する、解決したフィルタリング式のマッピングのキャッシュです。キャッシュのサイズは、キャッシュ内のフィルタリング式の数を定義します。フィルタリング式に関連する一致する登録識別の数に制限はありませんが、解決されたフィルタリング式あたりの一致する登録情報の数は、数十、またはまれに数百という、比較的少数であることが期待されます。キャッシュのサイズを拡大すると（[登録識別キャッシュ] 構成オプション）パフォーマンスを改善することができます。
- 永続イベント キューを使用すると、受信通知イベントを一時ディスクストレージに保存し、消費メモリーを最小化することができます。デフォルトで、受信通知イベントをメモリーに保存できます。受信イベントの比率が高く、使用できる RAM が十分でない場合、一時ディスクストレージにイベントを保存することができます。永続イベント キューが有効である場合、イベント キュー記憶域のコミット バッチ サイズで、一時記憶域に書き込まれる前にメモリーに保存される通知イベントの最大数を設定します。永続イベント キューを有効化し（[永続イベント キューの有効化] 構成オプション）、コミット バッチ サイズを拡大すると（[永続イベント キュー サイズ] 構成オプション）、パフォーマンスが向上し、追加メモリーの要件により、バッチサイズを適度に拡大することをお勧めします。ディスクの永続イベント キュー記憶域ファイルを拡大（[永続イベント キュー サイズ] オプション）しても、パフォーマンスに対する明確な影響はありません。永続イベント キュー設定への変更を有効にするには、システムを再起動する必要があります。
- 通知メッセージで送信されるバイナリ コンテンツ（E メール添付）を無効にすると、パフォーマンスが大幅に改善されます（[バイナリ コンテンツの有効化] 構成オプション）。バイナリを添付した通知メッセージの生成は、プロセスを消費する操作である場合があります。バイナリ添付のコンテンツは、リポジトリから読み込み、通知メッセージに追加し、E メール サーバーなど適切な配信チャネルを介して送信する必要があります。添付されたバイナリ コンテンツの送信では、特定のタイプの通知メッセージを必要とする場合があります。たとえば、ベース 64 の文字コード化バイナリ添付（SMTP）では、生成されたメッセージの合計サイズに約 33% 追加します。さまざまなカスタム テンプレートを数多く使用して、大きいサイズの添付を含む通知メッセージの形式設

定をする場合、オーバーヘッドの処理が大きくなる場合があります。こうした場合、通知サービスではメッセージを形式設定し、添付を追加、そして配信チャンネルをそれぞれに使用して各メッセージを送信する必要があります。パフォーマンスを改善するために、添付を含む通知の数、添付のサイズ、添付を含む通知メッセージの形式設定に使用するカスタム テンプレートの数を制限することをお勧めします。

- 通知メッセージの処理および配信は、リソースをかなり消費します。より小規模のインストールの場合、または IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services を非専用サーバーにインストールする場合 m[イベント コレクタのコア プール サイズ] 構成オプションおよび [イベント コレクタの最大プール サイズ] 構成オプションを変更して、プールのサイズを単一のバックグラウンド スレッドに制限することをお勧めします。

通知構成オプションの詳細、説明、デフォルト値については、「[通知](#)」( p.78 ) を参照してください。

### 専用 SMTP サーバー

E メール サーバーなど、配信チャンネルのパフォーマンスは、通知サービス全体のパフォーマンスを制御する重要な要素です。IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知の場合、通常の会社の E メール サーバーではなく、高速の専用 SMTP サーバーの使用を強くお勧めします。専用サーバーを使用すると、メーラー キューに通知メッセージを追加する時間が劇的に短縮され、通知サービスのパフォーマンスが改善されることが示されています。使用可能な構成によりリポジトリと同じホストで専用 E メール サーバーを展開すると、通知サービスがネットワークの E メール サーバーとの通信にかかる時間を短縮します。

### スレッド数

SMTP サーバーに割り当てられるスレッド数が十分であることが不可欠です。そのスレッド数は、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知サービスのイベント コレクタ プールの処理スレッド数以上です。配信サーバーのスレッド数が不十分である場合、通知サービスは配信サーバーと効率的に通信することはできません。

## 一般的な推奨事項

次の手法により、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services ユーザーが使用できる全体の機能を削減することなく通知サービスのパフォーマンスを大幅に改善することができます。

## 受信者数の最小化

イベント マッチング時の受信者集計時間全体を最小化するために、各登録者を個別に指定するのではなく、一連の外部配信リストを定義することをお勧めします。これらの配信リストは、会社のディレクトリ サーバー (Microsoft Exchange、Lotus Domino など) に保存することができます。この方法で、通知サービスが受信者および配信デバイスを取得するために実行する必要がある多数のデータベース クエリーの必要性がなくなります。会社の専用SMTP サーバーは、使用可能なリソースを使用し、通知メッセージの配信をより効果的に処理できる必要があります。

## カスタム テンプレート数の最小化

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services を使用して、指定されたイベント タイプの通知メッセージの形式設定に使用する、無制限のカスタム テンプレート数を定義します。ただし、通常の場合では、デフォルトのテンプレートのみを使用した通知メッセージの形式設定のみで十分です。デフォルトのテンプレートは、サーバーのファイル システムに保存され、メモリーのキャッシュされます。これらのテンプレートを、特定のユーザー要件を満たすようにカスタマイズすることができます。詳細は、[p. 120 通知テンプレートの編集](#) を参照してください。テンプレートは要求ごとにデータベースから取得し、各通知メッセージを個別に形式設定する必要があるため、多数のカスタム テンプレート (一致するイベントごとに数百または数千) を使用すると、パフォーマンスを著しく低下させる場合があります。同じ理論が、送信元 SMTP カスタム アドレスに適用されます。多くの場合、リポジトリ構成オプションで指定されているように、単一のデフォルトの送信元アドレスで十分です。通知テンプレートの内容 (件名と本文) はデフォルト テンプレートの内容と同じで、送信元カスタム アドレスを指定すると、指定した通知のカスタム テンプレートを設定します。

## 登録数の最小化

通知サービスのパフォーマンスを改善するために、通常、単一イベントに一致する登録情報数を最小化する必要があります。受信イベントが、さまざまな登録者およびさまざまなメッセージ テンプレートを持つ多くの登録情報と一致する場合、配信を効率的に集計することができず、受信者に個別の通知メッセージを生成する必要があります。処理がイベント タイプ階層を越えるため、初期の単独通知イベントで多くの派生イベントを生成する可能性があるという点に注意してください。初期イベントは、アプリケーション固有のイベントスプリッタによって一連のイベントに分割される場合もあります。多数の派生イベントが初期イベントに生成される場合、登録レイアウトを管理する方法について考慮することをお勧めします。たとえば、コンテンツ リポジトリ階層の各子フォルダの多くの登録情報を個別に指定するのではなく、親フォルダの単一登録情報を指

定して、[サブフォルダへの適用] オプションを使用することで十分な場合がよくあります。詳細は、の IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のユーザー マニュアルを参照してください。登録情報数を制限することも、また有用です。ユーザーを個別に登録できるようにする代わりに、配信リストを会社の SMTP サーバーに設定し、保存することができます。配信リストを使用し、制限された数の登録情報を作成して、パフォーマンスを改善、メッセージの処理および配信にかかる時間を最小化することができます。

### 登録管理アクティビティのスケジュール設定

イベント マッチング時のパフォーマンスを改善するために、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services 通知サービスは多くの内部キャッシュを保持します。クライアントがイベント タイプ リポジトリまたは登録リポジトリに変更を行うと、これらのキャッシュは無効化（クリア）されます。通知サービスのイベント処理のピーク時間が重複しないスケジュールに基づいて、登録者の追加、登録情報の削除など、登録管理アクティビティを行うことをお勧めします。処理の負荷が軽い登録管理アクティビティの実行は通常受け入れ可能ですが、パフォーマンスの低下による短時間のバーストが発生する場合があります。

## 通知サービスのデバッグ

通知サービスのデバッグを有効にするには、アプリケーション サーバーの log4j.xml ファイルを編集します。JBoss を使用している場合、次のように <your\_jboss\_installation>%server%default%conf%log4j.xml を編集して、com.spss.notification パッケージの **DEBUG** ログ レベルを有効にします。

```
<category name="com.spss.notification"> <priority value="DEBUG"/> </category>
```

その他のアプリケーション サーバーでは、ブラウザ インターフェイスまたは展開されたコンポーネントのログ構成を編集するその他の方法を提供しています。SMTP ログ記録を有効にするには、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で [SMTP デバッグ モードの有効化] 構成オプションを **true** に設定します。通知ログは非常に詳細で、イベントマッチングおよび通知配信アクティビティに関する詳細情報を提供します。最も重要なログ項目は次のように表示されます。

```
[...Smtpdistributor] Exiting SMTP distributor.The distribution took 5.906 s.
```

SMTP の配信が 100 ～ 200 ミリ秒以上かかる場合、専用 SMTP サーバーの使用を強くお勧めします。

デバッグの目的で、該当する構成オプションを次の値に設定して、配信ステータス通知 (Delivery Status Notifications: DSN) を有効にすることもお勧めします。

SMTP DSN 通知

FAILURE,SUCCESS,DELAY

SMTP DSN Ret

FULL

注：SMTP サーバーは、これらの配信通知を生成する RFC3461 指定に対応する必要があります。

## 通知の配信失敗のトラブルシューティング

リポジトリのインストール時に適切な設定を電子メール サーバーおよびデフォルトの送信者の電子メール アドレスに指定すると、通常、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services 通知が適切に配信されるための追加の電子メール構成は必要ありません。インストール時に間違いが起こった場合、通知構成のオプションを変更して修正することができます。詳細は、9 章 p.78 通知 を参照してください。

通知および登録の配信失敗が発生した場合、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の管理者にも次のようなシステムが生成したメッセージで通知されます。

Your message did not reach some or all of the intended recipients.

Subject: IBM SPSS Deployment Services: New version of ChurnAnalysis created

Sent: 4/5/2010 2:35 PM

The following recipient(s) could not be reached:

jsmiht@mycompany.com on 4/5/2010 2:35 PM

There was a SMTP communication problem with the recipient's email server.

Please contact your system administrator.

多くの場合、配信の失敗は、通知受信者を指定またはデフォルトの登録アドレスを指定した場合のユーザー エラーによって発生します。

特定の場合においては、会社のネットワークまたは電子メール サーバーの設定により通知メッセージの配信に問題が発生する場合があります。たとえば、サーバーが外部のアドレスに送信するよう構成されていない場合があります。問題を調査するには、次の手順を行います。

- 通知の配信失敗を確実に検出する場合、リポジトリ監査レコードを使用します。監査の詳細は、「15 章」を参照してください。

- 通知の失敗の原因を確認するには、デバッグ モードを有効にすることをお勧めします。 [詳細は、 p.127 通知サービスのデバッグ を参照してください。](#)
- nslookup クエリーを使用して、SMTP サーバーの構成を検証することができます。
- 通知メッセージの SMTP ヘッダーを検証すると、SMTP サーバー メッセージの送信についての役立つ情報が取得できます。

通知および登録の配信失敗は、リポジトリ監査ビューに記録されます。 . [詳細は、 15 章 p.133 リポジトリの監査 を参照してください。](#)

# JMS 構成

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services は Java Messaging Service (JMS) を使用してサードパーティのアプリケーションと通信し、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository イベントに基づいてジョブの処理を開始します。JMS API は、2 つ以上のクライアント間でメッセージを送信するための Java Message Oriented Middleware (MOM) API です。JMS を使用すると、プログラムではまず、接続ファクトリのインスタンスを作成してキューまたはトピックに接続します。その後、メッセージを作成して、送信またはパブリッシュします。受信側では、クライアントはメッセージを受信またはサブスクライブします。同じ Java クラスを使用し、目的のプロバイダの JNDI 情報を使用することによって、さまざまな JMS プロバイダと通信できます。

パブリッシュ/サブスクライブ モデルで JMS 通信を行うことができるのは IBM SPSS Collaboration and Deployment Services だけです。このモデルでは、特定のメッセージ トピックにメッセージがパブリッシュされます。特定のメッセージ トピックに関するメッセージの受信では、0 以上の数の登録者が関心のある対象を登録できます。JMS キューは現在サポートされていません。

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services と連携させるための JMS の設定手順は、特定の IBM SPSS Collaboration and Deployment Services インストールで使用される JMS プロバイダによって異なります。最も一般的なオープンソースの JMS プロバイダには、Apache ActiveMQ、OpenJMS Group の OpenJMS、JBoss の JBoss Messaging などがあります。独自の実装には、IBM の WebSphere MQ (以前は MQSeries)、Sun Java System Message Queue、WebLogic などがあります。JMS プロバイダの設定方法については、ベンダーから提供されるドキュメンテーションを参照してください。

多数のジョブを同時に処理する場合など、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services のパフォーマンスを最適化する必要がある場合、アプリケーション サーバーの JMS 設定を同時並行処理の上限が拡大されるよう変更する必要があります。JMS 同時並行処理数の上限拡大の詳細については、次のトピックを参照してください。この章では、リポジトリ イベントに基づいて、ジョブの処理を設定する方法を示す例も提供しています。

## JMS 同時並行処理数の拡大

多くのジョブを同時に実行するなど、高い負荷により IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のパフォーマンスを最適化する必要がある場合、同時並行処理数の上限を増やすための設定、アプリケーションサーバーのJMSを変更する必要がある場合があります。WebSphere、JBoss、およびWebLogic用の一般的な手順は次のとおりです。詳細は、アプリケーションサーバーのマニュアルを参照してください。

### WebSphere

- ▶ WebSphere 統合ソリューション コンソールで、次のメニューを選択します。  
リソース > JMS > アクティブ化指定
- ▶ SPSSProcessEventActivationSpec を開いて、[エンドポイントあたりの最大同時 MDB 起動数] の値を大きくします。
- ▶ サーバーを再起動します。

### JBoss

- ▶ <JBoss server directory>/deploy の process-ejb.ear の process-ejb.jar の jboss.xml を変更し、**MaximumSize** 要素の値を大きくします。
- ▶ <JBoss server directory>/conf/standardjboss.xml の **MaximumSize** 要素の値を大きくして、JBoss サーバーのグローバル設定を変更します。
- ▶ サーバーを再起動します。

### WebLogic

- ▶ WebLogic ワークマネージャを使用して、アクティブなスレッドの数を制御します。
  - 新しいネットワーク マネージャを作成し、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services の実行に使用する WebLogic サーバーを対象にします。
  - 展開ディスクリプタを更新し、新しいワーク マネージャを参照します。
  - <repository installation directory>/platform/deployables/process-ejb.ear の process-ejb.jar の weblogic-ejb-jar.xml を変更します。次の情報を追加します。

```
<dispatch-policy>PASVWorkManager</dispatch-policy>
<weblogic-enterprise-bean>
<ejb-name>ProcessEventMDB</ejb-name>
<message-driven-descriptor>
<pool>
```

```

<max-beans-in-free-pool>20</max-beans-in-free-pool>
<initial-beans-in-free-pool>1</initial-beans-in-free-pool>
</pool>
<destination-jndi-name>queue/SPSSProcess</destination-jndi-name>
<connection-factory-jndi-name>
ProcessConnectionFactory
</connection-factory-jndi-name>
</message-driven-descriptor>
<dispatch-policy>PASVWorkManager</dispatch-policy>
</weblogic-enterprise-bean>

```

- アプリケーション サーバーの process-ear を更新し、管理コンソールの設定を調整します。

## メッセージ ベース プロセスの例

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services のメッセージベースのスケジュール作成機能を使用して、サードパーティのアプリケーションやリポジトリ イベントによってプロセスを開始することができます。たとえば、ジョブ ステップのいずれかで使用される IBM® SPSS® Modeler ストリームが更新されたときにジョブを再実行できるように設定できます。次のステップを実行します。

- ▶ IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager を使用して、JMS メッセージ ドメインを作成します。
- ▶ このメッセージ ドメインを使用してジョブのメッセージベースのスケジュールを設定します。JMS メッセージ セレクタは、次の例のように SPSS Modeler ストリームのリソース ID を示す必要があります。

```
ResourceID=<リソース ID>
```

SPSS Modeler ストリームのリポジトリ リソース ID はオブジェクト プロパティにあります。

- ▶ 定義した JMS 登録者に基づいて SPSS Modeler ストリームの通知を設定します。
- ▶ メッセージベースのスケジュールをテストするには、ストリームを SPSS Modeler で開き、変更してリポジトリに保存する必要があります。すべての項目が正しく設定されると、スケジュールはジョブを開始します。詳細については、『Deployment Manager 5 ユーザー ガイド』を参照してください。

# リポジトリの監査

収集され作成されたデータ オブジェクトの容量が大きくなると、データに関する動作を追跡する必要があります。データベースの監査を行うことで、データを使用した人物、アクセスされたデータ オブジェクト、操作が発生した日時、およびオブジェクトをどのように操作したかを追跡できます。

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Repository は、監査に関する質問の回答を、質問の詳細レベルに応じて取得できる便利なメカニズムを備えています。これを使用すると、必要とされる最大限または最小限の詳細情報を柔軟に収集できます。データベースの監査とレポートは、最初は簡単なレベルで行い、ビジネスに必要な変更に合わせて複雑にすることができます。

注：通知と登録を使用すると、リポジトリ オブジェクトの変更や処理結果を継続的に追跡できます。詳細は、の IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager のマニュアルを参照してください。

データベースの監査とレポートを行うと、次のことが可能になります。

- データベースに保存されているデータ オブジェクトの作成や削除などの変更を監視する。
- 将来の分析や参照に備えて、データベース アクティビティの記録やログを作成する。
- データベース アクティビティのレポートを生成する。

これらの操作を簡単に追跡できるようになると、データの制御が強化され、組織のデータ セキュリティおよび変更管理規則を徹底できます。

## データベースの監査機能

リポジトリには、システム イベントやオブジェクトの変更内容を記録するためのさまざまなデータベース テーブルが用意されています。サポートされているリレーショナル データベースにリポジトリをインストールすると、監査とレポートに必要なテーブルが自動的に作成されます。ユーザーは、データベース オブジェクトを手動で追加する必要はありません。

監査情報にアクセスする最も簡単な方法は、サポートされているデータベース クライアント アプリケーションで SQL クエリーを実行することです。たとえば、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services に付属している BIRT Report Designer for IBM® SPSS® を使用すると、監査レポートを作成できます。

特定の種類の監査情報を定期的に取得する必要がある場合は、ビューを設定できます。データベース ビューは、クエリーの結果セットで構成される読み取り専用の仮想テーブルまたは論理テーブルです。リレーショナル データベースの通常のテーブルと異なり、ビューは物理スキーマの一部ではなく、データベース内のデータを基に計算または収集された動的テーブルです。テーブルのデータを変更すると、ビューに表示されるデータも更新されます。

リポジトリは、複数の事前定義のビューとともにインストールされます。事前定義のビューを使用すると、ファイル、ジョブ、ストリームなどのリポジトリ オブジェクトに関するさまざまな監査情報を取得できます。また、複雑なレポート要件に対応するためにカスタム ビューを設定することもできます。カスタム ビューを実装する場合は、各データベースのベンダーから提供されるドキュメントを参照して、SQL シンタックスの相違点を確認してください。

注： 監査クエリーは、IBM SPSS Collaboration and Deployment Services イベント テーブル、および事前定義のビューに対して実行できます。ただし、将来のシステム リリースでテーブル構造が変更される可能性があるため、互換性を考慮して、監査クエリーを記述する際はテーブルではなくビューを使用することをお勧めします。

## 監査イベント

次のシステム イベントは、データベース イベント テーブルに対してエントリをトリガします。

### リポジトリ イベント

- ファイルまたはフォルダの作成
- ファイルまたはフォルダの更新
- バージョン
- ファイルまたはフォルダの削除
- ファイルまたはフォルダの許可の変更

### セキュリティ イベント

- ログイン成功
- ログイン失敗
- ユーザーの追加
- ユーザーの削除
- パスワードの変更
- グループの追加

- グループへのユーザーの追加
- グループの削除

### ジョブ実行イベント

- ジョブの送信
- ジョブの開始
- ジョブ ステップの開始
- ジョブの正常終了
- ジョブの失敗
- ジョブ ステップの成功
- ジョブ ステップの失敗

### スコアリング イベント

- スコアリング要求
- スコアリング構成の変更

## イベント テーブル

リポジトリ イベントの情報は、監査イベント (SPSSAUDIT\_EVENTS) テーブルとイベント パラメータ (SPSSAUDIT\_PARAMETERS) テーブルに格納されます。システム イベントが発生するたびに、SPSSAUDIT\_EVENTS テーブルに行が生成されます。イベントは、SPSSAUDIT\_PARAMETERS テーブルのパラメータ行に (1 対多の関係で) 関連付けることができます。

### 監査イベント テーブル (SPSSAUDIT\_EVENTS)

**SERIAL:** イベント行の一意の識別子。この番号を基に、イベントが生成された順序を判定できます。

**STAMP:** イベントが発生した日付と時刻。

**COMPONENT:** イベントの発生元のシステム コンポーネント。COMPONENT で返される値を次に示します。

- repository/audit\_component\_name: リポジトリ イベント
- security/componentAuthN: ユーザー認証イベント
- security/componentLRU: ユーザーおよびグループ設定イベント
- prms/prms: ジョブ スケジュール イベント
- notification/notification: 通知または登録イベント
- userpref/auditComponent: ユーザー設定変更イベント
- scoring/scoring: スコアリング サービス イベント

**LOCUS:** オーナー コンポーネントで定義され、特定のイベント タイプを割り当てます。 **LOCUS** で返される値を次に示します。

リポジトリ イベントの Locus コード

- repository/audit\_access\_object: ファイルまたはフォルダへのアクセス
- repository/audit\_new\_object: ファイルまたはフォルダの作成
- repository/audit\_update\_object: ファイルまたはフォルダの更新 (コンテンツまたはメタデータ)
- repository/audit\_new\_version: バージョンの作成
- repository/audit\_delete\_version: バージョンの削除
- repository/audit\_delete\_object: ファイルまたはフォルダの削除
- repository/audit\_move\_object: ファイルまたはフォルダの移動
- repository/audit\_modify\_permissions: ファイルまたはフォルダのアクセス許可の変更
- repository/audit\_update\_custom\_property\_value: ファイルまたはフォルダのカスタム プロパティ値の更新
- repository/audit\_new\_custom\_property: 新しいカスタム プロパティの作成
- repository/audit\_modify\_custom\_property: 既存のカスタム プロパティの変更
- repository/audit\_delete\_custom\_property: 既存のカスタム プロパティの削除
- repository/audit\_reindex\_repository\_started: リポジトリのインデックス再作成処理の開始
- repository/audit\_reindex\_repository\_ended: リポジトリのインデックス再作成処理の終了

セキュリティ イベントの Locus コード

- security/locAuthen: ログイン成功
- security/locNotAuthen: ログイン失敗
- security/locLogout: ログアウト
- security/locLRUAdd: ユーザーの追加
- security/locLRUDelete: ユーザーの削除
- security/locLRUUpdate: パスワードの変更
- security/locLRUAdd: グループの追加
- security/locLRUUpdate: グループ名の変更

- security/locLRUUpdate: グループへのユーザーの追加、またはグループからのユーザーの削除
- security/locLRUDelete: グループの削除

ジョブ実行イベントの Locus コード

- prms/audit\_job\_submit: ジョブの送信
- prms/audit\_job\_start: ジョブの開始
- prms/audit\_job\_step\_start: ジョブ ステップの開始
- prms/audit\_job\_success: ジョブの正常終了
- prms/audit\_job\_failure: ジョブの失敗
- prms/audit\_job\_step\_success: ジョブ ステップの正常終了
- prms/audit\_job\_step\_failure: ジョブ ステップの失敗
- prms/audit\_job\_update: ジョブの更新

通知イベントの Locus コード

- notification/audit\_delivery: 通知メッセージの配信イベント (配信済み、未配信、一部配信済み)
- notification/audit\_subscription: 通知または登録の設定変更イベント (登録の作成、更新、削除)

ユーザー設定イベントの Locus コード

- userpref/auditLSet: ユーザー設定値の設定
- userpref/auditLDelete: ユーザー設定値の削除

スコアリング サービス イベントの Locus コード

- scoring/metric\_update-スコアリング サービス要求またはスコアリング構成の更新

**MIMETYPE:** イベントに関連付けられたオブジェクトの MIME タイプ。

**TITLE:** イベントの簡単な説明。通常、イベントのリストに表示されます。コンテンツ リポジトリ イベントの場合、これはファイル名になります。

**PRINCIPALID:** イベントを生成したユーザー。

**AUDIT\_RESOURCE:** コンテンツに関連付けられている場合は、コンテンツ リポジトリ オブジェクトの URI。

**DETAILS:** コンポーネントで定義されたイベントに関する追加情報を示す文字列。たとえば、ラベル変更前のラベル、メタデータ変更前のメタデータ、名前変更前の名前などです。

**SIGNATURE:**データが有効であるかどうかを確認するために使用する署名。

**ADDRESS:**イベントに関連付けられたクライアント システムの IP アドレス。

#### **監査イベント パラメータ テーブル (SPSSAUDIT\_PARAMETERS)**

**SERIAL:**イベントにパラメータを関連付ける SPSSAUDIT\_EVENTS テーブルへの外部キー。

**NAME:**パラメータの説明的な名前。たとえば、JobExecutionID、JobID、JobStepID、JobName、JobStepName などがあります。

**VALUE:**名前付きのパラメータの値。

列のデータ タイプや NULL 値を許容するかどうかなど、イベント テーブルのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用します。

## 監査ビュー

次は、リポジトリのインストール時にデフォルトでデータベースに作成される監査ビューです。ビューのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用します。監査データベース オブジェクトを実行するには、ビューに対して SQL クエリーを実行します。リポジトリ データベースには、監査ビューをサポートするために使用する他のビューも多数あります。これらのサポートビューは、レポート作成を対象としていません。

### 監査 (SPSSPLAT\_V\_AUDIT)

監査ビューには、ファイル バージョン ビューからの監査情報が含まれます。このビューには、全イベントのすべての監査パラメータが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**AUDITSERIALNUMBER :**イベントの一意の識別子。この番号を基に、イベントが生成された順序を判定できます。

**AUDITTIMESTAMP :**イベントを生成したコンポーネントによって設定される監査のタイムスタンプ (イベントが作成された日付)。

**AUDITCOMPONENT :**イベントを作成した監査対象のコンポーネント名またはサブシステム名。com.spss.<component> の形式で示されます。

**AUDITCATEGORY :**監査対象のイベントのカテゴリ。

**MIMETYPE** : 監査対象のオブジェクトの MIME タイプ。

**AUDITTITLE** : 監査対象のカテゴリまたはオブジェクト名。

**AUDITPRINCIPAL** : 監査対象のオブジェクトのプリンシパル ユーザー。

**AUDITRESOURCE** : 監査対象のコンテンツ ホスト。コンテンツ リポジトリ リソース ID があります。

**AUDITDETAILS** : コンポーネントで定義されたイベントに関する追加情報を示す文字列。たとえば、ラベル変更前のラベル、メタデータ変更前のメタデータ、名前変更前の名前などです。

**ADDRESS** : イベントに関連付けられたクライアント システムの IP アドレス。

**AUDITPARAMETERNAME** : 監査イベントの拡張パラメータ。たとえば、JobStepExecutionID、JobExecutionID、JobID があります。

**AUDITPARAMETERVALUE** : 監査イベントの拡張パラメータ値。たとえば、ID 値があります。

**AUDITRESOURCEID** : イベントに関連付けられているリソースのリポジトリ ID。ファイル バージョン (SPSSPLAT\_V\_FILEVERSION) ビュー内のファイルまたはジョブ ID に対する外部キーです。

**AUDITMARKER** : イベントに関連付けられているリソース バージョン。ファイル バージョン (SPSSPLAT\_V\_FILEVERSION) ビュー内のファイルまたはジョブ バージョン マーカーに対する外部キーです。

## カスタム プロパティ (SPSSPLAT\_V\_CUSTOMPROPERTY)

カスタム プロパティ ビューには、ファイル バージョン ビューの行に関するファイル カスタム プロパティ情報が表示されます。

**PROPERTYNAME** : カスタム プロパティの名前。

**PROPERTYVALUE** : カスタム プロパティの値。

**FILEID** : このプロパティが適用される、ファイル バージョン ビュー内のファイルまたはジョブに対する外部キー。

## ファイル バージョン (SPSSPLAT\_V\_FILEVERSION)

ファイル バージョン ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリーム、IBM® SPSS® Statistics シンタックス ファイル、SAS シンタックス ファイルなど、リポジトリ オブジェクトに関するファイルおよびバージョン情報が表示されます。このビューには、すべてのファイル、フォルダ、またはジョブの全バージョンが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**FILEID** : ファイルの一意の識別子。

**VERSION**: ファイルのバージョン。

**FILENAME** : ファイルの名前。

**VERSIONMARKER** : ファイル バージョンのバージョン マーカー。

**VERSIONLABEL** : ファイル バージョンのバージョン ラベル。

**FILEPATH** : ファイルへのパス。

**MIMETYPE** : ファイルの MIME タイプ。

**AUTHOR**: ファイルの著者 (ユーザーにより指定)。

**DESCRIPTION**: ファイルの説明。

**FILECREATEDDATE** : ファイルが作成された日時。

**FILECREATEDBY** : ファイルを作成したユーザー。

**FILELASTMODIFIEDDATE** : ファイルが最後に更新された日時。

**FILELASTMODIFIEDBY** : ファイルを最後に変更したユーザー。

**VERSIONCREATEDDATE** : ファイル バージョンが作成された日時。

**VERSIONCREATEDBY** : ファイルのバージョンを作成したユーザー。

**VERSIONLASTMODIFIEDDATE** : ファイル バージョンが最後に更新された日時。

**VERSIONLASTMODIFIEDBY** : バージョンを最後に変更したユーザー。

## ジョブ履歴 (SPSSPLAT\_V\_JOBHISTORY)

ジョブ履歴ビューには、ジョブ ステップ実行に関する情報が表示されます。このビューには、全ジョブの全ジョブ ステップに関するすべての実行が 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**EXECUTIONID** : 実行の一意の識別子。

**JOBID** : ファイル バージョン ビュー内のジョブ (FILEID) への外部キー。

**JOBVERSION** : ファイル バージョン ビュー内のジョブ バージョンへの外部キー。

**JOBSTEPID** : ジョブ ステップ ビュー内のジョブ ステップへの外部キー。

**JOBSTEPEXECUTIONSTATUS** : ジョブ ステップの成功や失敗を表すステータス。

**JOBSTEPEXECUTIONSTARTED** : ジョブ ステップの開始時刻。

**JOBSTEPEXECUTIONENDED** : ジョブ ステップの終了時刻。

**JOBSTEPEXECUTIONRUNTIME** : ジョブ ステップの合計実行時間。

**JOBSTEPERRORLOG** : ジョブ ステップのエラー ログ ファイルの ID。

**JOBEXECUTIONSTATUS** : ジョブの成功や失敗を表すステータス。  
**JOBEXECUTIONSTATUS** で返される値を次に示します。

- Null: 不明
- 0: 失敗
- 1: 成功
- 2: キュー格納済み
- 3: 実行中
- 4: 終了
- 5: カスケード
- 6: エラー
- 7: カスケード エラー
- 8: キャンセル中
- 9: キャンセル済み
- 10: キャンセル待機
- 11: カスケード キャンセル済み
- 12: 参加中

**JOBEXECUTIONSTARTED** : ジョブの開始時刻。

**JOBEXECUTIONENDED** : ジョブの終了時刻。

**JOBEXECUTIONRUNTIME** : ジョブの合計実行時間。

**JOBCLUSTERQUEUEDDATETIME** : ジョブがキューに配置された時刻。ジョブのキュー格納時刻は、送信時刻よりわずかに遅くなります。

**JOBCLUSTERCOMPLETIONCODE** : ジョブ タイプ別のジョブ ステータスに対応する整数値。ゼロ (0) は、すべてのタイプのジョブが成功したことを示します。

**JOBCLUSTERAPPLICATIONSTATUS** : ジョブ タイプ別のジョブ ステータスに対応する文字列値。

**JOBPROCESSID** : ジョブ タイプ別のシステム プロセスに対応する ID。たとえば、実行可能ファイルを実行中の場合は、オペレーティング システムのプロセス ID。

**JOBEXECUTEDPARAMETERS** : 現在、このフィールドは使用されていません。

**JOBNOTIFICATIONENABLED** : 通知がジョブで有効になっているかどうかを示します。

## ジョブ ステップ (SPSSPLAT\_V\_JOBSTEP)

ジョブ ステップ ビューには、ジョブのジョブ ステップに関する情報が含まれます。このビューには、全ジョブの全バージョンに関するすべてのジョブ ステップが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**JOBSTEPID** : ジョブ ステップの一意の識別子。

**JOBSTEPNAME** : ジョブ ステップの名前。

**JOBID** : このジョブ ステップが含まれている、ファイル バージョン ビュー内のジョブ (FILEID) に対する外部キー。

**JOBVERSION** : このジョブ ステップが含まれている、ファイル バージョン ビュー内のジョブ バージョンに対する外部キー。

**JOBSTEPTYPE** : ジョブ ステップのタイプ。現在、ClementineStreamWork、SPSSSyntaxWork、SASSyntaxWork、ExecutableContentWork (全般ワーク)、WindowsCommandWork などのタイプがあります。関連する DOS コマンドは、WindowsCommandWork または ExecutableContentWork のどちらかのタイプになります。

**REFERENCEDFILEID** : このジョブ ステップにより参照されるファイルの ID (該当する場合)。たとえば、IBM® SPSS® Modeler ストリーム、IBM® SPSS® Statistics シンタックス ファイル、SAS シンタックス ファイルなどがあります。

**REFERENCEDFILELABEL** : このジョブ ステップにより参照されるファイルのラベル (該当する場合)。

## スケジュール (SPSSPLAT\_V\_SCHEDULE)

スケジュール ビューには、ファイル バージョン ビュー内のジョブに関連付けられているスケジュール情報が表示されます。このビューには、すべてのスケジュールが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**JOBID** : ファイル バージョン ビュー内のジョブ (FILEID) への外部キー。

**JOBVERSION** : ファイル バージョン ビュー内のジョブ バージョンへの外部キー。これはこの時点で実行されるジョブ バージョンです。ジョブ ラベルを削除した場合 (または、新しいジョブ バージョンを保存し、その最新のジョブを実行するようにスケジュールを設定した場合)、ジョブ バージョンは変更されます。

**SCHEDULEDFREQUENCY** : スケジュールの繰り返し頻度は、スケジュールの期間と時間単位に関連します。たとえば、頻度を日単位、期間を 1 に設定した場合、スケジュールされる曜日は日曜日から土曜日までの任意の曜日になり、月単位でスケジュールされる日付は 0 になります。

**SCHEDULEDINTERVAL** : スケジュールの間隔を表す数です。この意味は SCHEDULEDFREQUENCY の値によって変わります。たとえば、頻度が週単位の場合に期間を 4 に設定すると、4 週ごとに実行されます。

**SCHEDULEDDAYOFMONTH** : 月単位のスケジュールで指定する日付。

**SCHEDULEDDAYOFWEEK** : 週単位のスケジュールで指定する曜日。

**SCHEDULEDTIME** : ジョブの開始予定時刻。

**SCHEDULESTARTDATE** : 繰り返しスケジュール (日単位、週単位、月単位) の開始日、または他のスケジュールの実行日。

**SCHEDULEENDDATE** : 繰り返しスケジュール (日単位、週単位、月単位) の繰り返し終了日。他のスケジュール タイプの場合、この列は NULL になります。また、リストに示されているスケジュール タイプでも、リストに示された日付でトリガを終了する場合には、NULL になります。

**NEXTSCHEDULED TIME** : スケジュールの次の開始日。スケジュールが終了日を過ぎている場合、または 1 回限りのスケジュールの場合には、NULL になります。

**SCHEDULEENABLED** : 有効になっているスケジュール。

**SCHEDULELABEL** : スケジュールがトリガされるときに実行されるジョブのラベル。

**SCHEDULELASTUPDATE** : このスケジュールが最後に更新されたときの日付タイムスタンプ。

**SCHEDULECREATOR** : スケジュールを作成したユーザーのユーザー ID。

## ストリーム属性値 (SPSSPLAT\_V\_STREAMATTRVALUE)

ストリーム属性値ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリームにおけるノードに関する属性情報が表示されます。このビューには、全ストリームにおける全属性のすべての許容値が 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**ATTRIBUTEID** : 属性の一意の識別子。

**ATTRIBUTENAME** : 属性の名前。

**NODEID** : ストリーム ノード ビュー内のノードへの外部キー。

**ATTRIBUTETYPE** : 属性のタイプ。

**ATTRIBUTE CATEGORICALVALUE** : 複数の値を持つ属性に対する、属性の許容値。

**NUMERICALUPPERBOUND** : 数値属性で許容される上限値。

**NUMERICALLOWERBOUND** : 数値属性で許容される下限値。

## ストリーム ノード (SPSSPLAT\_V\_STREAMNODE)

ストリーム ノード ビューには、IBM® SPSS® Modeler ストリームにおけるノードの情報が表示されます。このビューには、全ストリームの全バージョンのすべてのノードが 1 行につき 1 つずつ含まれます。

**NODEID** : ストリームにおけるノードの一意の識別子。

**STREAMID** : このノードが含まれている、ファイル バージョン ビュー内のストリーム (FILEID) に対する外部キー。

**STREAMVERSION** : このノードが含まれている、ファイル バージョン ビュー内のストリーム バージョンに対する外部キー。

**NODENAME** : ストリーム内のノードの名前。

**NODETYPE** : ストリーム内のノードのタイプ。

**NODELABEL** : ストリーム内のノードのラベル。

**ALGORITHMNAME** : モデル作成ノードにおけるノードのアルゴリズム。

**MININGFUNCTION** : モデル作成ノードにおけるノードのデータ マイニング機能。

**IOFILENAME** : FileInput ノードまたは FileOutput ノードにおける、ノードの入力ファイルまたは出力ファイル。

**IODATABASETABLE** : DatabaseInput ノードまたは DatabaseOutput ノードにおける、データベース テーブルの名前。

**IODSN** : DatabaseInput ノードまたは DatabaseOutput ノードにおける、ノードのデータ ソースの名前。

注 : このリリースでは、SPSSPLAT\_V\_STREAMNODE ビューの ioDSN 列は使用しません。この列には、すべてのレコードで NULL が含まれます。

## スコアリング サービス ログギング

IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services では、IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services - Scoring サービスの操作をログ記録するデータベース機能も用意しています。次のデータベース オブジェクトを使用して、スコアリング サービス情報を保存します。

- 要求ログ テーブル
- データベース ビュー
- データベース スキーマ

スコアリング サービス ログギングは、次のようなりポジトリで使用できるすべてのデータベース管理システムでサポートされています。

- DB2
- MS SQL Server
- Oracle

注 : DB2 on IBM i は、スコアリング サービス ログギングに使用できません。

## 要求ログ テーブル

デフォルトでは、スコアリング サービスの要求情報が SPSSSCORE\_LOG テーブルに格納されています。

### スコアリング ログ テーブル (SPSSSCORE\_LOG)

**SERIAL:**スコアリング サービス要求の一意の識別子。

**STAMP:**スコアリング サービス要求の日時。

**INFO :**スコアリング要求に関する追加情報 (XML 形式)。情報は、データベースで登録された XML スキーマにしたがって生成されます。スコアリング ログ ビューで、同じ情報を関連する形式で使用できます。

### クリーンアップとメンテナンス

スコアリング サービス要求がログ記録されるにつれ、SPSSSCORE\_LOG が非常に大きくなり、このテーブルからレコードを削除する必要がある場合があります。たとえば、管理者は次の SQL 分を実行して、2009 年 1 月 1 日より前の古いレコードを除外することができます。

```
DELETE FROM spssscore_log WHERE STAMP < '2009-01-01'
```

## データベース ビュー

次のスコアリング ビューは、リポジトリのインストール時にデフォルトでデータベースに作成されます。SPSSSCORE\_LOG テーブルの INFO 列に XML として保存された情報を、関連する形式で表示します。ビューのプロパティに関する詳細情報を取得するには、データベース クライアント アプリケーションのツールを使用、または SQL クエリーを実行します。

### スコアリング要求 (SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER)

このビューには、SPSSSCORE\_LOG テーブルのスコアリング要求の行の 1 行が表示されます。

**SERIAL:**スコアリング要求の一意の識別子。

**ADDRESS:**スコアリング要求を開始するコンピュータの IP アドレス。たとえば、クラスタの負荷バランサーまたはプロキシ サーバーのアドレスなど、クライアントではなくサーバーのアドレスとなる場合があります。

**HOSTNAME:**スコアリング要求を開始するコンピュータの名前。コンピュータでスコアリング サービスを実行するサブレット コンテナがドメイン名システムの逆検索を許可していない場合、値はコンピュータの IP アドレスに対応します。ホスト名を指定できない場合、Null 値が使用されます。ホスト名の検索にあまりに時間がかかる場合、ブラウザベースの IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Deployment Manager で該当する設定オプションを使用し、ホスト名を検索しないようにシステム設定することによって、スコアリング サービスのパフォーマンスを改善できる場合があります。

**PRINCIPAL:**スコアリング要求と関連するユーザー名。この値が要求に指定されていない場合、情報はログされません。

**STAMP:**この列には、スコアリング サービス要求がログ記録した時間のタイムスタンプが表示されます。

**MODEL\_OBJECT\_ID:**スコアリング サービスで構成されたオブジェクトのリポジトリ ID。たとえば、IBM® SPSS® Modeler ストリームがスコアリングに構成された場合、これはストリームのリポジトリ ID です。

**MODEL\_VERSION\_MARKER:**スコアリングに構成された特定バージョンのリポジトリ オブジェクトの識別子。

**CONFIGURATION\_NAME:**スコアリング サービス構成エントリの名前。スコアリング モデルが構成されると、名前が割り当てられます。

## スコアリング要求入力 (SPSSSCORE\_V\_LOG\_INPUT)

ビューには、スコア作成に使用されたモデル入力に関する情報が表示されます。SPSSSCORE\_LOG テーブルと SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER ビューの1 行に対し、SPSSSCORE\_V\_LOG\_INPUT の複数行となります。SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER の各行には、入力値が 1 つずつ表示されます。

**SERIAL:**スコアリング要求行の一意の識別子。

**INPUT\_TABLE:**入力ソースが IBM® SPSS® Collaboration and Deployment Services Enterprise View の場合、これは Enterprise View テーブル名です。

**INPUT\_NAME:**入力フィールドの名前。入力ソースが Enterprise View の場合、これは Enterprise View 列名です。

**INPUT\_VALUE:**入力値。

**INPUT\_TYPE:**入力データ型。次のデータ型を使用できます。

- date
- daytime
- decimal
- double
- float
- integer
- long
- string
- timestamp

### スコアリング要求コンテキスト データ (SPSSSCORE\_V\_LOG\_CONTEXT\_INPUT)

このビューには、スコアリング サービスに渡され、Enterprise View データ プロバイダ定義 - リアルタイム のコンテキスト データ ソースとして使用されたデータに関する情報が表示されます。SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER ビューの1 行に対し、SPSSSCORE\_V\_LOG\_CONTEXT\_INPUT ビューの複数行となります。

**SERIAL:**スコアリング要求行の一意の識別子。

**CONTEXT\_TABLE:** コンテキスト データ ソースで使用されるテーブルの名前。

**CONTEXT\_ROW:**1 から始まるコンテキスト データの行番号。

**CONTEXT\_NAME:** コンテキスト データ ソースの列名に対応する入力フィールドの名前。

**CONTEXT\_VALUE:**入力値。

### スコアリング要求出力 (SPSSSCORE\_V\_LOG\_OUTPUT)

SPSSSCORE\_V\_LOG\_OUTPUT ビューを使用して、スコアリング サービスの出力をログ記録します。SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER ビューの1 行に対し、SPSSSCORE\_V\_LOG\_OUTPUT ビューの複数行となります。スコアリング サービスには、複数の出力を提供する機能があります。各出力は、複数の値で構成される場合があります。たとえば、スコアリング サービスには、2 つの推奨事項 (2 つの出力) が指定されているとします。これらの推奨事項はそれぞれ、1 から始まる一意の行番号が割り当てられます。各推奨事項に対して、複数の出力値がある場合があります。

**SERIAL:**スコアリング要求行の一意の識別子。

**OUTPUT\_ROW:1** から始まるコンテキスト データの行番号。

**OUTPUT\_NAME:** コンテキスト データ ソースの列名に対応する出力フィールドの名前（属性名）。

**OUTPUT\_VALUE:**出力値。

### スコアリング要求メトリック (SPSSSCORE\_V\_LOG\_METRIC)

SPSSSCORE\_V\_LOG\_METRIC ビューを使用して、スコアリング要求を処理する時間など、スコアリング サービスの出力メトリックをログ記録します。SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER ビューの1 行に対し、SPSSSCORE\_V\_LOG\_METRIC ビューの複数行となります。

**SERIAL:**スコアリング要求行の一意の識別子。

**METRIC\_NAME:** メトリック フィールドの名前。

**METRIC\_VALUE:**メトリック値。

### スコアリング要求プロパティ (SPSSSCORE\_V\_LOG\_PROPERTY)

SPSSSCORE\_V\_LOG\_PROPERTY ビューを使用して、要求の処理に使用するプロパティをログ記録します。SPSSSCORE\_V\_LOG\_HEADER ビューの1 行に対し、SPSSSCORE\_V\_LOG\_PROPERTY ビューの複数行となります。ログ記録できるプロパティは、選択したスコア プロバイダによって異なります。

**SERIAL:**スコアリング要求行の一意の識別子。

**METRIC\_NAME:**プロパティの名前。

**OUTPUT\_VALUE:**プロパティ値。

## 監査クエリーの例

監査ビューに対して実行する SQL クエリーの例を次に示します。一部の SQL の機能は、Microsoft SQL Server 固有の機能であり、他のデータベース プラットフォームでは無効になる場合があることに注意してください。

### ユーザー 'jsmith' のログイン成功

```
select AUDITTIMESTAMP as "Login date",  
ADDRESS as "Machine address"  
from SPSSPLAT_V_AUDIT  
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'  
and AUDITCATEGORY = 'security/locAuthen'
```

```
and AUDITTITLE = 'jsmith'  
order by 1 desc
```

### 全ユーザーのログイン失敗

```
select AUDITTITLE as "Username",  
AUDITTIMESTAMP as "Login date",  
ADDRESS as "Machine address"  
from  
SPSSPLAT_V_AUDIT  
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'  
and AUDITCATEGORY = 'security/locNotAuthen'  
order by 1 asc, 2 desc
```

### 先月中のユーザーごとのログイン成功回数

```
select AUDITTITLE as "Username",  
COUNT(*) as "Successful logins"  
from  
SPSSPLAT_V_AUDIT  
where AUDITCOMPONENT = 'security/componentAuthN'  
and AUDITCATEGORY = 'security/locAuthen'  
and AUDITTIMESTAMP >= DATEADD(month, -1, GETDATE())  
group by AUDITTITLE  
order by 2 desc
```

### カスタム プロパティ 'Region' が指定されているすべてのリポジトリ リソース

```
select V1.FILEPATH + V1.FILENAME as "Resource", V2.PROPERTYNAME + ' = ' + V2.PROPERTYVALUE as "Property/Value"  
from SPSSPLAT_V_FILEINFO V1,  
SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY V2  
where V1.FILEID = V2.FILEID  
and V2.PROPERTYNAME = 'Region'
```

### カスタム プロパティ値 'Asia-Pacific' が指定されているすべてのリポジトリ リソース

```
select V1.FILEPATH + V1.FILENAME as "Resource", V2.PROPERTYNAME + ' = ' + V2.PROPERTYVALUE as "Property/Value"  
from SPSSPLAT_V_FILEINFO V1,  
SPSSPLAT_V_CUSTOMPROPERTY V2  
where V1.FILEID = V2.FILEID  
and V2.PROPERTYVALUE = 'Asia-Pacific'
```

### ユーザー 'jsmith' によって変更された (新しいバージョンが作成された) すべてのリポジトリ リソース

```
select FILEPATH + '/' + FILENAME as "Resource",  
VERSION as "Version",  
VERSIONCREATEDDATE as "Modified date"  
from SPSSPLAT_V_FILEVERSION
```

---

```
where VERSIONCREATEDBY = 'jsmith'
```

### ファイル /Modeler/Base\_Module/drugplot.str を変更した全ユーザー

```
select VERSION as "Version",  
VERSIONCREATEDBY as "Username",  
VERSIONCREATEDDATE as "Created date"  
from SPSSPLAT_V_FILEVERSION  
where FILEPATH + FILENAME = '/Modeler/Base_Module/drugplot'
```

# Nativestore スキーマの参照

nativestore.xsd スキーマは、Deployment Manager にインポートされるユーザーおよびグループを含む XML ファイルの構造を定義します。また、このファイルで削除する必要がある廃止されたユーザーおよびグループを指定することができます。

## XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
  <user userID="lsanborn" password="ls7725" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
  <user userID="lalger" password="la4011" encrypted="false">
    <group>analyst</group>
  </user>
  <user userID="cjones" password="cj2683" encrypted="false">
    <group>analyst</group>
  </user>
  <obsolete>
    <user>mmonroe</user>
    <user>bgmurphy</user>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

## nativestore 要素

子要素 : [user](#)、[obsolete](#)

ローカル ユーザーおよびローカル グループを Deployment Manager にインポートする Root 要素。

## user 要素

親要素 : [nativestore](#)

子要素 : [group](#)、[role](#)

追加または更新されるユーザー。

テーブル A-1  
user 要素の属性

名前	種類	使用	Default	説明
userID	string	必須の	デフォルト値ではない	システム ログインに使用されるユーザー ID。
password	string	オプション	デフォルト値ではない	通常、プレーンテキストのパスワード。encrypted 属性が true の場合、このパスワードは暗号化されます。通常、インポート時に暗号化されたパスワードを使用することは、実用的ではありません。サーバーからのエクスポート時にパスワードは暗号化されますが、Deployment Manager ユーザー インターフェイスでは使用されません。
暗号化	boolean	オプション	false	パスワードがプレーンテキストであるか暗号化されているかを示します。暗号化されたパスワードはネイティブ ストアからエクスポートされます（暗号化は一元的で、ユーザーのパスワードを再作成することはできません）。別のシステムからインポートする場合、パスワードはプレーンテキストである必要があります。encrypted 属性は通常省略されます。

## XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
<user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
  <group>sales</group>
</user>
</nativestore>
```

## group 要素

データ型 : 文字列

親要素 : [user](#)

ユーザーに関連付けられたグループ。グループが存在しない場合は自動的に作成されます。

### XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <user userID="sbennett" password="sb9482" encrypted="false">
    <group>sales</group>
  </user>
</nativestore>
```

### role 要素

**データ型** : 文字列

**親要素** : [user](#)

ユーザーに関連付けられたロール。ロールが存在しない場合は自動的に追加されません。

### obsolete 要素

**親要素** : [nativestore](#)

**子要素** : [user](#)、[group](#)

削除されるグループまたはユーザー。「置換モード」でロードされる場合があります。その場合、自動的にすべてのグループおよび管理者以外のユーザーは削除されます。置換モードでは、この要素は影響を受けません。

### XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <廃止された>
    <user>mmonroe</user>
    <user>bgmurphy</user>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

### user 要素

**データ型** : 文字列

**親要素** : [obsolete](#)

削除されるユーザー ID。管理権限を持つユーザーは削除できません。

### XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <obsolete>
    <user>mmonroe</user>
  </obsolete>
</nativestore>
```

### group 要素

**データ型** : 文字列

**親要素** : [obsolete](#)

削除されるグループ名。

### XML の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<nativestore>
  <obsolete>
    <group>jones project</group>
  </obsolete>
</nativestore>
```

# 注意事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権（特許出願中のものを含む）を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。使用許諾については、下記の宛先に書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3-2-31 IBM World Trade Asia Corporation Licensing

2 バイト文字セット (DBCS) 情報についてのライセンスに関するお問い合わせは、お住まいの国の IBM Intellectual Property Department に連絡するか、書面にて下記宛先にお送りください

神奈川県大和市下鶴間1623番14号 日本アイ・ビー・エム株式会社 法務・知的財産 知的財産権ライセンス渉外

**以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。** IBM は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書は定期的に見直され、必要な変更（たとえば、技術的に不適切な記述や誤植など）は、本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製

品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとして扱います。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）の間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Software Group, Attention: Licensing, 233 S. Wacker Dr., Chicago, IL 60606, USA.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお問い合わせください。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

### Trademarks

IBM、IBM ロゴ、ibm.com、SPSS は、世界中の管轄地域で登録された、IBM Corporation の商標です。IBM 商標の現在の一覧については、Web サイト <http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> を参照してください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは米国またはその他の国の Adobe Systems Incorporated の登録商標または商標です。

Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、および Pentium は、米国およびその他の国の Intel Corporation またはその子会社の商標または登録商標です。

Linux は米国およびその他の国の Linus Torvalds の登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT、および Windows ロゴは米国およびその他の国の Microsoft Corporation の商標です。

UNIX は米国およびその他の国の The Open Group の登録商標です。

Java および Java ベースのすべての商標およびロゴは、米国、その他の国、または両方の Sun Microsystems, Inc. の商標です。

その他の製品名およびサービス名は IBM またはその他の企業の商標です。



# 索引

同時並行性, 130-131  
管理者特権, 69, 76-77  
命名規則, 24  
文字制限  
  ユーザー定義の関数, 97  
登録管理, 125  
表記方法  
  名前の設定, 24  
資格情報, 72  
配信失敗, 128  
報告書, 70  
管理者, 47  
視覚化  
  報告書, 86  
  指定, 86  
作成  
  groups, 35  
  拡張グループ, 40  
  許可されたユーザー, 42  
  ユーザー, 30  
  ロール, 49  
削除  
  groups, 39  
  MIME タイプ, 102  
  管理対象サーバー, 24  
  ファイル, 105, 109-110, 112  
  ユーザー, 35  
変更  
  groups, 37  
  パスワード, 15  
  ユーザー, 32  
接続  
  有効期限の時刻, 71  
概要, 14-15, 24  
構成, 69  
  システム, 69  
  セキュリティ, 69  
  テンプレート, 69  
  ヘルプ, 69  
画像  
  ファイルとの関連, 101-102  
監査, 128, 133  
  events, 134  
  データベース スキーマ, 135  
編集  
  groups, 37  
  MIME タイプ, 101  
  ユーザー, 32  
  ロール, 50  
表示  
  サーバー プロパティ, 21  
  ジョブ出力, 123

設定, 69-70, 73-74, 76-78, 84, 87, 92-93, 95-97  
  共同, 78  
  通知, 78  
  ATOM, 78  
  Data Service, 73  
  Deployment Manager, 74  
  Deployment Portal, 74  
  Deployment Portal スコアリング, 75  
  Enterprise View, 76  
  IBM ShowCase Warehouse Builder, 96  
  IBM SPSS Statistics, 72  
  RSS, 78  
  URL プレフィックス, 95  
  オプション, 123  
  カスタム ダイアログ, 72  
  キャッシュ, 70  
  システム, 69-70, 73-74, 76-78, 84, 92-93, 95-97  
  スコアリング, 75  
  セキュリティ, 93  
  セットアップ, 95  
  テンプレート, 69  
  プロセス管理, 84  
  ヘルプ, 77  
  ページャ, 84  
  リポジトリ, 87  
追加  
  groups, 35  
  MIME タイプ, 100  
  管理対象サーバー, 18  
  ユーザー, 30  
通知, 113  
  書式設定, 118  
  設定, 78  
HTML, 119  
Velocity, 113  
  カスタマイズ, 114, 116, 118  
  コンテンツ, 113  
  テキスト, 119  
  テンプレート, 113, 120  
  件名ヘッダー, 113  
専用 SMTP サーバー, 123  
  
Active Directory, 26, 55, 64  
  有効化, 59  
  無効化, 59  
  ローカル オーバーライド, 55, 61, 64  
Active Directory (ローカル オーバーライド), 26-28  
Apache ActiveMQ, 130  
BEA WebLogic, 130

## 索引

- BIRT, 70
- BIRT Report Designer for IBM SPSS, 4, 7
- Coherence, 70
- collaboration, 1
- connectionURL パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- Coordinator of Processes  
有効なメンテナンス プロバイダ, 71
- Data Service  
設定, 73
- deleteLabeled パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- deployment, 2
- Deployment Manager  
設定, 74
- Deployment Portal  
設定, 74
- Deployment Portal スコアリング構成, 75
- domain, 67
- DSN, 127
- E メール通知, 113  
HTML, 119  
テキスト, 119
- EIM, 55, 65
- eim.jar, 55
- encrypted 属性  
user, 153
- Enterprise Identity Management, 55, 65
- Enterprise View, 76
- events  
監査, 134  
ジョブ実行, 134  
セキュリティ, 134  
リポジトリ, 134
- excludeType パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- group 要素  
obsolete, 154-155  
user, 152-153
- groups  
作成, 28, 35  
削除, 39  
変更, 28, 37  
拡張, 26-28, 40  
編集, 28, 37  
追加, 28, 35  
IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Deployment Manager での管理,  
26-27  
インポート, 39  
ローカル, 28
- IBM i, 8
- IBM i ユーザー リポジトリ, 55
- IBM ShowCase, 8
- IBM ShowCase Warehouse Builder  
設定, 96
- IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Deployment Manager, 3-4
- IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Deployment Portal, 3, 5
- IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Enterprise View, 4, 6
- IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Repository, 3-4
- IBM SPSS Collaboration and Deployment  
Services Repository Server  
プロパティ, 22
- IBM SPSS Decision Management, 8
- IBM SPSS Statistics  
資格情報, 72  
カスタム ダイアログ, 72  
サーバー, 72
- includeSubFolders パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- includeType パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- Java Messaging Service, 130-131
- jBoss, 127
- JBoss, 131
- JBoss Messaging, 130
- JD Edwards (JDE), 56, 63
- JDE アプリケーション ユーザー セキュリティ  
プロバイダ, 56, 63
- JMS, 130-131
- JMS キュー, 130
- JMS トピック, 130
- JMS メッセージ ドメイン, 132
- JMX コンソール, 131
- JNDI, 130
- JobStatusURL プロパティ  
通知テンプレート, 121
- Kerberos  
domain, 67  
JAAS, 67  
Key Distribution Center, 67  
realm, 67  
キー テーブル ファイル, 67  
サービス チケット, 67
- LDAP, 55
- legal notices, 156
- logfile パラメータ  
クリーンアップ ユーティリティ, 111
- messageContent 要素  
contentType 属性, 118  
通知テンプレート, 113, 116, 118
- messageProperty 要素  
通知テンプレート, 113-114

- messageSubject 要素
    - 通知テンプレート, 113, 116
  - MIME, 99
  - MIME タイプ, 99, 118
    - 削除, 102
    - 編集, 101
    - 追加, 100
  - mimeMessage 要素
    - 通知テンプレート, 113
  - nativestore 要素, 152
  - nativestore スキーマ, 152
  - nslookup, 128
  - obsolete 要素
    - nativestore, 152, 154
  - olderThan パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - OpenJMS, 130
  - OpenLDAP, 26-27, 55, 66
    - 有効化, 57
    - 無効化, 57
  - password 属性
    - user, 153
  - password パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - resource パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - RFC3461, 127
  - role 要素
    - user, 152, 154
  - RSS フィード, 78
  - SAS
    - 実行サーバー, 7
  - search, 92
  - servers
    - 停止, 12
    - 起動, 12
  - SMTP
    - サーバー スレッド, 123
    - プロパティ, 114
    - メッセージ ヘッダー, 128
    - ログ記録, 127
  - SQL クエリー, 133
  - SSL, 22, 61
  - SSO, 14, 55, 65
  - Sun Java System Message Queue, 130
  - SVG グラフ, 70
  - System i, 8
  - testMode パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - topic, 130
  - trademarks, 158
  - UDF 文字制限, 97
  - URL プレフィックス, 95
  - user 要素
    - nativestore, 152-153
    - obsolete, 154
  - userID 属性
    - user, 153
  - userid パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - value-of 要素
    - 通知テンプレート, 114, 116
  - Velocity, 113
  - version, 16
  - versionsToKeep パラメータ
    - クリーンアップ ユーティリティ, 111
  - WebLogic, 131
  - WebSphere, 131
  - WebSphere MQ, 130
  - XSS, 53
- 
- アカウント
    - ロック, 34
    - ロック解除, 34
  - アクション, 26-27
    - ロール, 45
    - ロールからの削除, 50
    - ロールへの追加, 50
- 
- 永続イベント キュー, 123
  - イベント コレクタ プール, 123
  - イベント ノイズのフィルタリング, 123
  - 監査イベントの捕捉, 134
  - インストール済みパッケージ, 16
  - インデックス再作成, 103
  - インデックスの作成
    - 実行の権限, 103
    - 強制的構成オプション, 103
    - リポジトリのアップグレード, 103
  - インポート, 47
- 
- エクスポート, 47
- 
- 通知構成オプション, 123
- 
- ガイドライン
    - 名前の設定, 24
  - カスケード スタイルシート, 70
  - カスタマイズ
    - 通知, 114, 116
    - 通知メッセージ, 113, 118
    - メッセージ テンプレート, 113, 118

## 索引

- カスタム ダイアログ, 72
- キャッシュ, 70
  - ログイン, 93
- 登録識別キャッシュ, 123
- キュー, 130
- 監査クエリー, 149
- クエリーの例, 149
- クリーンアップ ユーティリティ, 109
  - parameters, 111
  - インストール場所, 110
  - コマンド ライン, 110
  - ジョブ ステップ, 112
- 拡張グループ, 26-27, 40
  - Active Directory, 61
- クロス サイト スクリプト, 53
- コンポーネント, 16
- 送信された作業
  - 削除, 108
- 許可されたユーザー, 26-27, 42
  - Active Directory, 61
- 管理対象サーバー
  - 削除, 24
  - 追加, 18
  - サーバー情報, 20
  - タイプ, 19
  - プロパティ, 21
  - ログイン, 22
  - ログオフ, 23
- 実行サーバー, 6
  - SAS, 7
  - リモート プロセス, 7
- 検索サービス, 103
- 通知サービスのデバッグ, 127
- システム
  - 概要, 15, 24
  - 設定, 69-70, 72-74, 76-78, 84, 87, 92-93, 95-97
  - 起動, 12, 14-16
  - ナビゲーション, 12, 16
  - ログアウト, 12
  - ログイン, 12, 14-15
- システム情報, 16
- ジョブ出力
  - 表示, 123
- ジョブ履歴
  - 削除, 108
- ジョブ ステップ履歴, 121
- 一般ジョブ ステップ
  - バッチ削除, 112
- ジョブ ステータス, 121
- ジョブ実行イベント, 134
- ジョブ履歴の制限, 108
- シングル サインオン, 14, 55, 65, 67
- スキーマ
  - データベースの監査, 135
- スコアリング, 8
- スコアリング構成, 75
- 高速スコアリング, 8
- スコアリング サーバー, 7
- スコアリング サービス, 92
- 配信ステータスの通知, 127
- セキュリティ, 69, 93
- セキュリティ イベント, 134
- セキュリティ プロバイダ, 26-27, 55-56
  - 有効化, 63
  - 無効化, 63
- Active Directory, 59, 64
- Active Directory (ローカル オーバーライド), 61, 64
- IBM i, 61
- IBM i ネイティブ, 65
- IBM i ユーザー リポジトリ, 55
- JDE アプリケーション ユーザー, 63
- OpenLDAP, 57, 66
- ネイティブ, 57, 64
- 外部セキュリティ プロバイダ, 27
  - Active Directory, 26
  - Active Directory (ローカル オーバーライド), 26
  - OpenLDAP, 26
- セッション タイムアウト, 93
- セットアップ
  - 設定, 95
- 統合ソリューション コンソール, 131
- タイムアウト エラー, 74
- タブ
  - ナビゲート, 16
- ディレクトリ パス, 86
- デバッグ情報, 86
- テンプレート, 69
  - E メール通知, 113, 120
  - Velocity, 120
  - イベント プロパティ変数の挿入, 116
  - 内容のカスタマイズ, 116

- 書式のカスタマイズ, 118
  - プロパティの挿入, 116
  - プロパティのカスタマイズ, 114
- データベース 監査, 133
- データベース スキーマ
  - 監査, 135
- データベース バックアップ, 106
- 監査テーブル, 133
  
- トピック
  - 名前の設定, 24
- トラブルシューティング, 16
  - 通知の配信失敗, 128
  
- ナビゲーション, 12, 16
- 有効なメンテナンス プロバイダ, 71
  
- ネイティブ プロバイダ, 55, 57, 61, 64-65
  
- 通知の配信失敗, 128
- 検索の上限, 93
- 規制の準拠, 133
- 保留接続のタイムアウト, 71
  
- バイナリ コンテンツの無効化, 123
- パスワード
  - 入力, 14
  - 変更, 12, 15
  - 指定, 14
- バックアップ
  - 日単位, 106
  - データベース, 106
- パフォーマンス, 130
- パフォーマンス調整, 123
- 数値パフォーマンスの推奨, 123
  - 受信者数, 125
  - 登録管理, 125
  - 登録数, 125
  - カスタム テンプレート数, 125
  
- 監査ビュー, 133
  
- ファイル
  - 画像との関連, 101-102
  - 名前の設定, 24
- フォルダ
  - 名前の設定, 24
- プロセス管理
  - 設定, 84
- プロトコル タイムアウト, 74
- プロバイダ, 55
  
- ヘルプ, 69, 77
- ページ
  - 設定, 69, 73-74, 76-78, 84, 87, 92-93, 95-97
  - 通知, 78
  - Data Service, 73
  - Deployment Portal, 74
  - IBM ShowCase Warehouse Builder, 96
  - search, 92
  - SMTP 設定, 78
  - プロセス管理, 84
  - リポジトリ, 87
  - ログイン, 14-15, 69
- ページャ , 84
  
- ポート番号, 22
  
- メッセージ ベース プロセスの例, 132
- メッセージ ベースのスケジュール作成, 130-131
- メンテナンス サービス, 105
  
- ユーザー
  - 作成, 28, 30
  - 削除, 35
  - 変更, 28, 32
  - 編集, 28, 32
  - 設定, 27
  - 許可, 26-28, 42
  - 追加, 28, 30
  - IBM SPSS Collaboration and Deployment Services Deployment Manager での管理, 26-27
  - インポート, 39
  - グループ メンバシップ, 26-27
  - システム リソースへのアクセス, 26-27
  - リモートで定義, 26-28
  - ロック, 34
  - ロック解除, 34
  - ローカル, 26-28
- ユーザー設定, 5
- ユーザー アカウント
  - ロック, 34
  - ロック解除, 34
- ユーザーとグループのインポート, 39
- ユーザー定義の関数, 97
  
- ライセンス, 16
  
- リポジトリ
  - 設定, 87
- リポジトリ イベント, 134

## 索引

リポジトリ メンテナンス, 105-106  
開始 (最小), 107  
開始日付, 107  
頻度, 107  
開始 (最大), 107  
クラスタ環境, 107  
送信された作業, 108  
ジョブ履歴, 108  
トランザクション期間, 107  
トランザクションの遅延, 107  
ログ出力, 109  
切り詰めエラー  
修正, 97  
リモート プロセス  
実行サーバー, 7  
リモートで展開するスコアリング サーバー, 7

監査レポート, 133

ログ, 16  
ログアウト, 12  
ログイン, 12  
    キャッシュ, 93  
ログイン ページ, 14-15  
ロック  
    ユーザー, 34  
ロック解除  
    ユーザー, 34  
ローカル オーバーライド  
    Active Directory, 55  
ローカル グループ  
    Active Directory, 64  
ローカル セキュリティ プロバイダ, 26-27  
ローカル プリンシパル フィルタ  
    Active Directory, 64  
ローカル ユーザー ディレクトリ, 55  
ルール, 26-27, 45  
    管理者, 47  
    作成, 49  
    削除, 52  
    編集, 50  
    追加, 50  
    アクションの削除, 50  
    アクションの追加, 50  
    グループの割り当て, 50  
    ユーザーの割り当て, 50